

# 徳 瀬 遺 跡

日田市県営住宅改築工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

大分県文化財調査報告書第94集

1 9 9 6

大 分 県 教 育 委 員 会

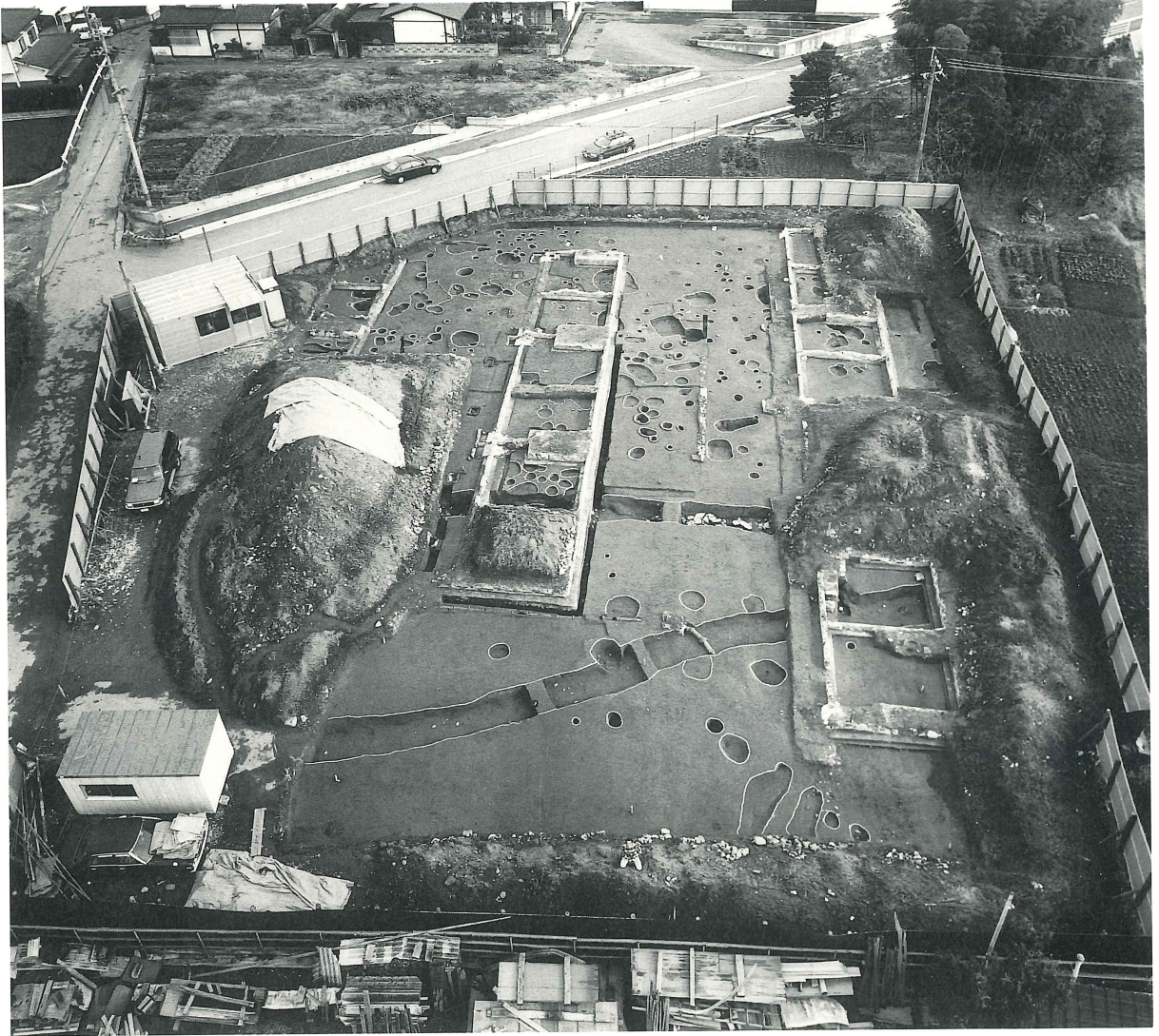
# 徳 瀬 遺 跡

日田市県営住宅改築工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

大分県文化財調査報告書第94集





德瀨遺跡全景

## 序 文

大分県の西部に位置する水郷日田市は、日本最古の豪族居館として知られる小迫辻原遺跡や、装飾古墳のランドヤ古墳、穴観音古墳など、弥生から古墳時代にいたる遺跡が数多く所在しています。

このため大分県教育委員会は、地元日田市とともに、これらの遺跡の保存・活用を積極的に進めていますが、今回、県営友田住宅の建替えに伴う埋蔵文化財の発掘調査結果をとりまとめました。調査は、平成6年10月から7年1月までの約3ヵ月実施しましたが、縄文・弥生・古墳時代の遺構・遺物が多数検出されました。日田市では、徳瀬遺跡のような沖積地での調査例は少なく、日田盆地内での人々の動きを知るうえで貴重な資料といえます。本書が、今後の学術研究ならびに文化財の保護・啓発に役立てば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大な御協力をいただいた関係各位に対して、衷心より感謝申し上げます。

平成8年3月

大分県教育委員会教育長

田 中 恒 治



## 例 言

- 1、本書は、平成6年に発掘を実施した日田市県営友田住宅改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。
- 2、発掘調査は、大分県土木建築部の委託事業として大分県教育委員会が実施した。
- 3、調査団の構成は次の通りである。

調査委員 後藤宗俊（別府大学教授）

末広利人（大分県教育庁文化課長）

調査主任 渋谷忠章（同文化課主幹兼埋蔵文化財第2係長）

調査員 王永光洋（同文化課主査）

西 哲弘（同文化課主査）

稲村博文（同文化課嘱託 現鹿児島県肝属郡串良町教育委員会）

調査事務 油布芳典（大分県教育庁文化課課長補佐兼管理係長）

小野高寛（同文化課主事）

- 4、本書の編集、執筆は渋谷、牧尾義則（大分県教育庁文化課主査）、王永、西、江田豊（同文化課主任）、染矢和徳（同文化課主事）、稲村が行なった。

- 5、調査協力者

山本タケ、島田けさみ、猪熊誠、猪熊スミコ、猪熊ヨネ、谷頭忠雄、白石高恵、佐藤善孝、衛藤タキ子、手島トシエ、高村笑美子、池田千津子、瀬戸ロキサエ、阿部完子、木下強、加納健作、浜田純一、大関洋

## 本文目次

I. 調査に至る経過	1
II. 歴史地理的環境	4
III. 調査の概要	4
IV. 遺構と遺物	5
V. まとめ	46
写真・図版	51

## 挿 図 目 次

第1図 徳瀬遺跡周辺遺跡分布図	1	第10図 6号竪穴出土遺物	8
第2図 徳瀬遺跡周辺地形図	2	第11図 1号土坑実測図	9
第3図 徳瀬遺跡遺構配置図	3	第12図 1号土坑出土遺物(1)	9
第4図 1号竪穴及び出土管玉実測図	5	第13図 1号土坑出土遺物(2)	10
第5図 2号竪穴実測図	5	第14図 1号土坑出土石器	10
第6図 3・4・5竪穴出土遺物(1)	6	第15図 2号土坑実測図	10
第7図 3・4・5竪穴実測図	7	第16図 2号土坑出土遺物	11
第8図 3・4・5竪穴出土遺物(2)	8	第17図 3号土坑実測図	11
第9図 6号竪穴実測図	8	第18図 4号土坑実測図	11

第19図	4号土坑出土遺物	11	第60図	36号土坑実測図	27
第20図	5号土坑実測図	12	第61図	37号土坑実測図	28
第21図	6号土坑実測図	12	第62図	37号土坑出土遺物	28
第22図	6号土坑出土遺物	12	第63図	38号土坑出土遺物	28
第23図	7号土坑実測図	13	第64図	38号土坑実測図	28
第24図	8号土坑実測図	13	第65図	39号土坑実測図	29
第25図	8号土坑出土遺物	14	第66図	39号土坑出土遺物	29
第26図	9号土坑出土遺物	14	第67図	40号土坑実測図及び出土遺物	30
第27図	9号土坑実測図	14	第68図	41号土坑出土遺物	30
第28図	10号土坑実測図	14	第69図	41号土坑実測図	31
第29図	11号土坑実測図	15	第70図	42号土坑出土遺物	31
第30図	12号土坑実測図	15	第71図	42号土坑実測図	31
第31図	12号土坑出土遺物	16	第72図	43号土坑実測図	32
第32図	13号土坑実測図	16	第73図	43号土坑出土遺物	32
第33図	14号土坑実測図	16	第74図	44号土坑実測図	33
第34図	14号土坑出土遺物	17	第75図	45号土坑実測図	33
第35図	15号土坑実測図	17	第77図	46号土坑実測図	33
第36図	15・16号土坑実測図	18	第77図	47号土坑実測図	33
第37図	17号土坑実測図	19	第78図	47号土坑出土遺物	33
第38図	17号土坑出土遺物	19	第79図	49号土坑出土遺物	33
第39図	18号土坑実測図	20	第80図	48号土坑実測図	34
第40図	18号土坑出土遺物	20	第81図	49号土坑実測図	34
第41図	19・20号土坑実測図	21	第82図	50号土坑実測図	34
第42図	19・20号土坑出土遺物	21	第83図	50号土坑出土遺物	34
第43図	21号土坑実測図	22	第84図	51号土坑実測図	35
第44図	21号土坑出土遺物	22	第85図	52号土坑実測図	35
第45図	24・25号土坑出土遺物	22	第86図	53号土坑実測図	35
第46図	22~25号土坑実測図	23	第87図	54号土坑実測図	36
第47図	26号土坑出土遺物	24	第88図	55号土坑実測図	36
第48図	26号土坑実測図	24	第89図	56号土坑実測図	36
第49図	27号土坑出土遺物	24	第90図	56号土坑出土遺物	36
第50図	27号土坑実測図	24	第91図	1・2号溝実測図	37
第51図	28号土坑実測図	25	第92図	1号溝出土遺物	39
第52図	28号土坑出土遺物	25	第93図	2号溝出土遺物(1)	41
第53図	29号土坑実測図	25	第94図	2号溝出土遺物(2)	42
第54図	29号土坑出土遺物	25	第95図	包含層出土遺物(1)	43
第55図	30号土坑出土遺物	25	第96図	包含層出土遺物(2)	44
第56図	30・31号土坑実測図	26	第97図	日田盆地の主要定着期遺跡分布図	46
第57図	32号土坑実測図	26	第98図	市教委調査区1号溝出土土器	47
第58図	33・34号土坑実測図	27	第99図	徳瀬遺跡遺構変遷図	48
第59図	35号土坑実測図	27			



## 図版目次

図版 1	3～5号竪穴	6号竪穴
	2号土坑	15・16号土坑全景
	17号土坑	39号土坑
	40号土坑	4号竪穴遺物出土状況
図版 2	14号土坑遺物出土状況	19号土坑遺物出土状況
	1号竪穴出土遺物（管玉）	4号竪穴出土遺物
	4号竪穴出土遺物	8号土坑出土遺物
	19号土坑出土遺物	47号土坑出土遺物
図版 3	50号土坑出土遺物（ミニチュア土器）	2号溝出土遺物
	2号溝出土遺物	2号溝出土遺物
	2号溝出土遺物	2号溝出土遺物
	3～5竪穴出土遺物	1・2号土坑出土遺物
図版 4	17・24・26号土坑出土遺物	15・17号土坑出土遺物
	24号土坑出土遺物	28号土坑出土遺物
	39・41・42・50号土坑出土遺物	19号土坑・2号溝出土遺物
	1号溝出土遺物	2号溝出土遺物
図版 5	2号溝出土遺物	2号溝出土遺物
	2号溝出土遺物	2号溝出土遺物
	包含層出土遺物	38・43号土坑出土遺物（石錘・磨石）
	40号土坑出土遺物（磨石）	

# I. 調査に至る経過

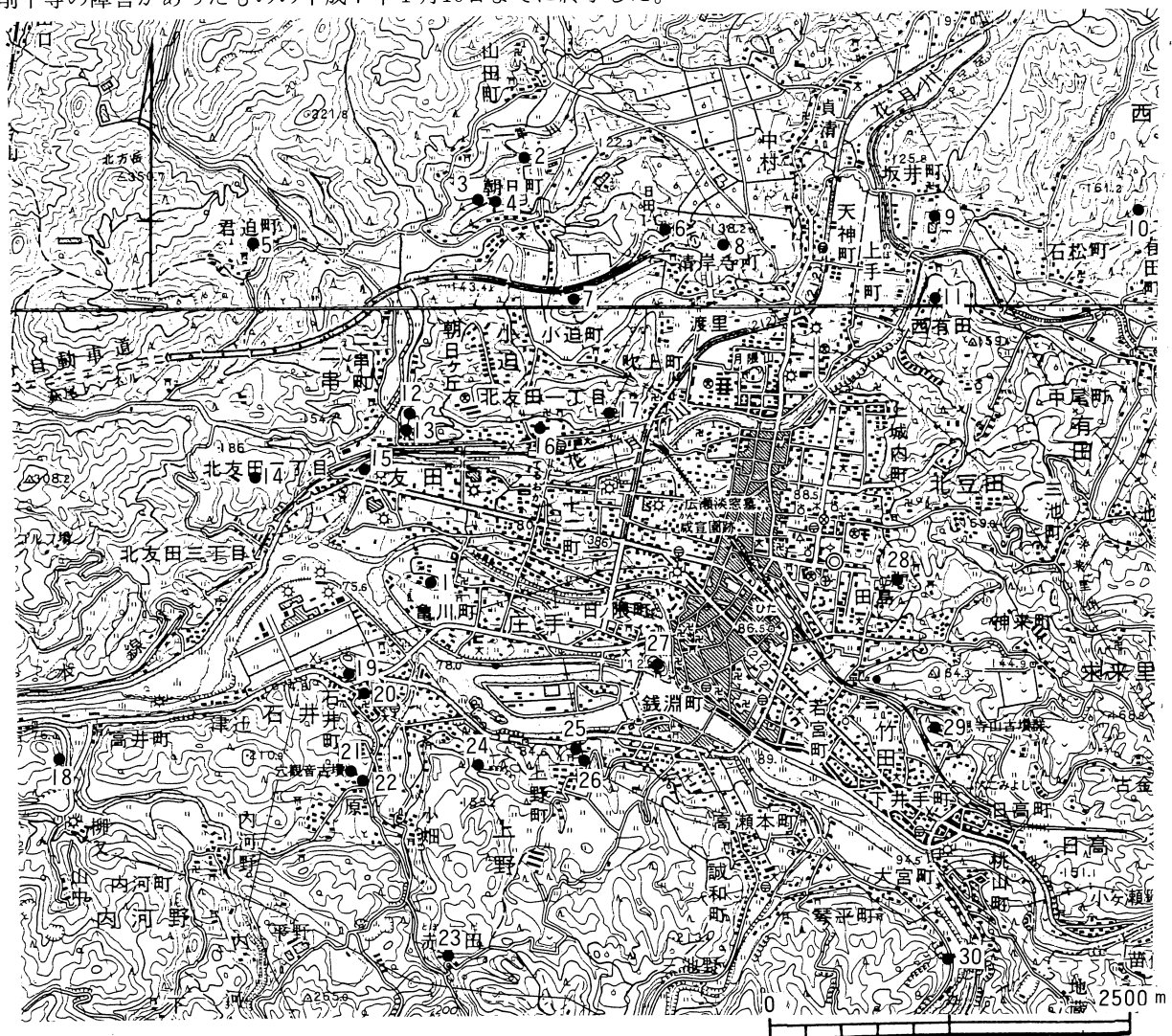
大分県土木建築部では、県営住宅の建築後、耐用年数の二分の一を経過した住宅について、平成3年度を基準に今後10年間で20市町村41団地2,779戸の建替えを計画している。

今回、調査対象となった日田市県営友田住宅は、平成6年度に建替えが計画されており、県土木建築部から平成6年5月に遺跡の取り扱いについて最初の協議があった。

県営住宅に隣接する市道からは、平成5年に日田市教育委員会が発掘調査を実施し遺跡を確認しており、当該地内にも遺跡の存在する可能性が高いため、保存について協議がおこなった。

その結果、調査対象地のうち、明らかに遺跡に影響がある部分について発掘調査を実施することとし、残り部分については盛土のうえ駐車場等で保存することとなった。

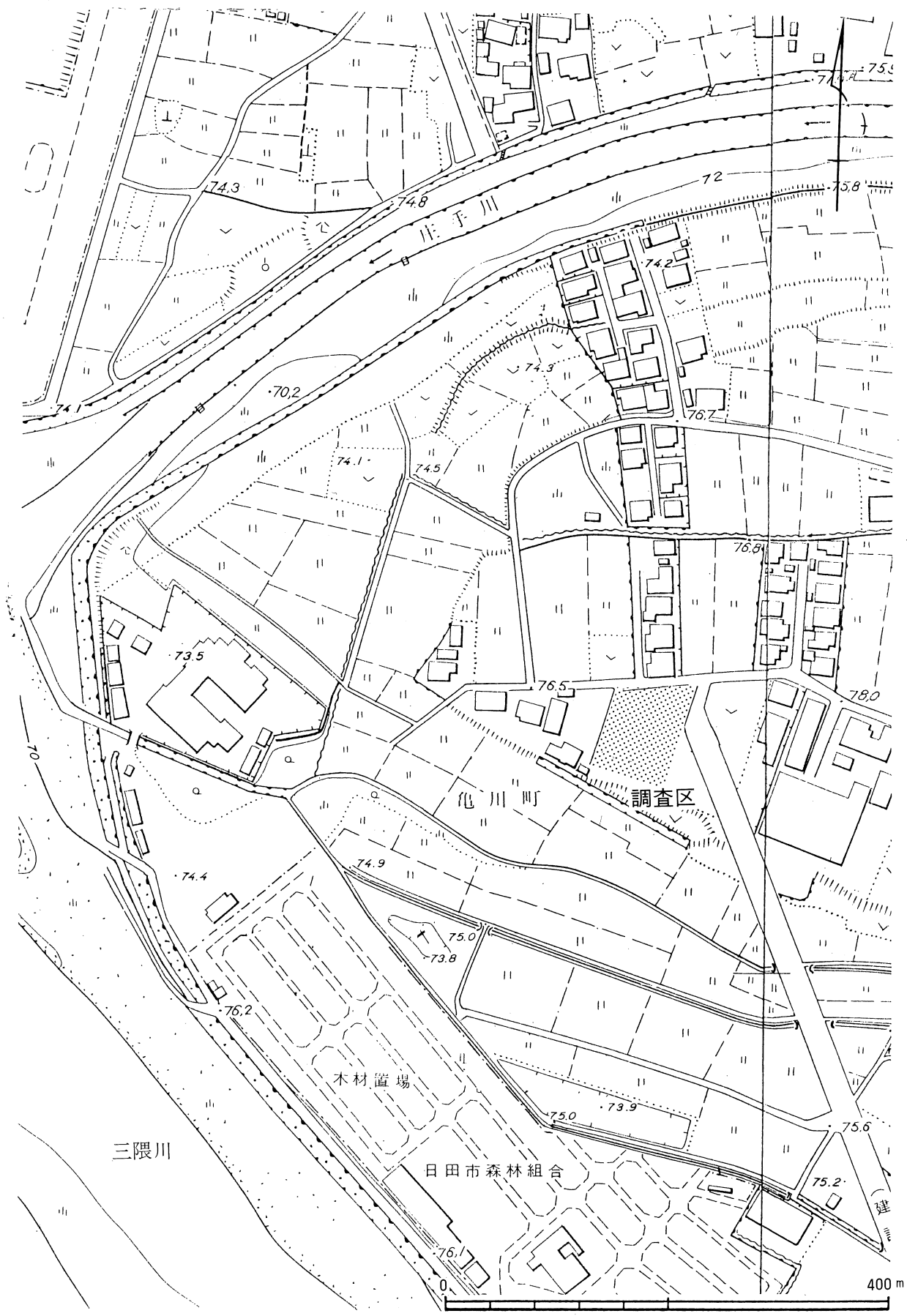
発掘調査の実施については、既存の建物の撤去が完了した平成6年10月から開始し、建物基礎部による遺跡の削平等の障害があったものの平成7年1月10日までに終了した。



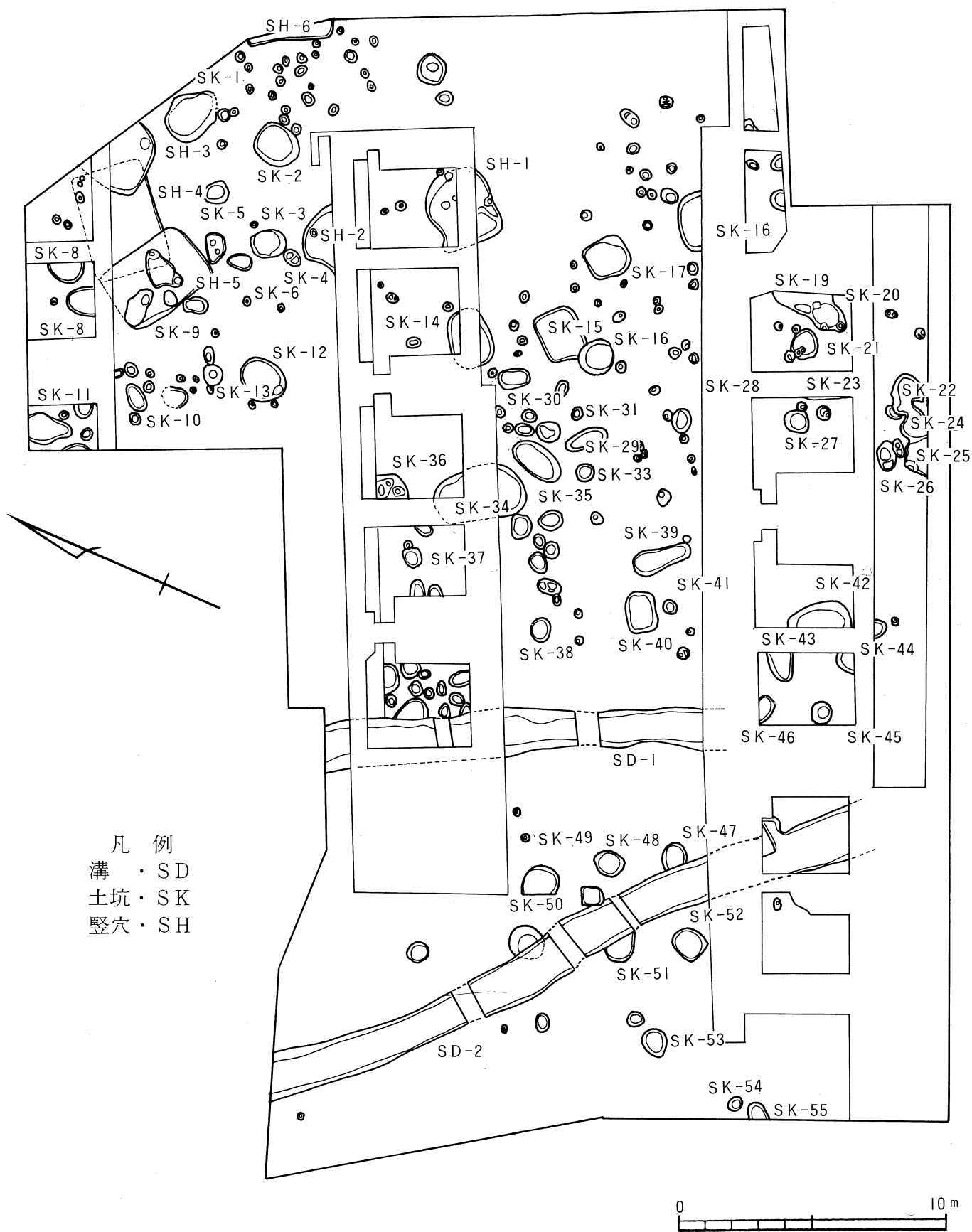
第1図 徳瀬遺跡周辺遺跡分布図 (国土地理院「日田」「大行同」転載、S = 1/50,000)

- |                |            |           |              |            |
|----------------|------------|-----------|--------------|------------|
| 1. 徳瀬遺跡        | 2. 朝日宮ノ原遺跡 | 3. 天満1号墳  | 4. 天満2号墳     | 5. 君迫遺跡    |
| 6. 草場第2遺跡      | 7. 小迫辻原遺跡  | 8. 草場第1遺跡 | 9. 峰崎遺跡      | 10. 有田古墳   |
| 11. 慈眼山遺跡(鷹城跡) | 12. 鳥越古墳   | 13. 片山石棺  | 14. 穴原遺跡     | 15. 三郎丸遺跡  |
| 16. 岳林寺遺跡      | 17. 吹上遺跡   | 18. 川下遺跡  | 19. ガランドヤ古墳群 | 20. 尾園遺跡   |
| 21. 穴瀬音古墳      | 22. 長者原遺跡  | 23. 上米田遺跡 | 24. 護願寺古墳群   | 25. 上野姥塚古墳 |
| 26. 上野カグネ塚古墳   | 27. 日隈古墳   | 28. 薬師堂古墳 | 29. 法恩寺山古墳群  | 30. 手崎遺跡   |





第2図 徳瀬遺跡周辺地形図



第3図 徳瀬遺跡遺構配置図



## II. 歴史地理的環境

遺跡は、日田市大字友田字徳瀬に所在する。大分県の西部にあり、福岡県浮羽町や杷木町などと境をなす日田市は、市街地を筑後川の上流である三隈川が西流し、標高約150mの台地や丘陵に囲まれた盆地を形成している。市街地は三隈川のほかに花月川、高瀬川、庄手川、大肥川など大小の支流が流入し、水郷の町として多くの観光客を集めている。

日田市は、県下でも有数の遺跡密集地として知られているが、遺跡の多くは盆地を囲む丘陵や台地上に弥生時代から古墳時代前期の集落や墓地がみられ、その斜面や崖面には大規模な横穴群が点在する。また、古墳は台地や丘陵上にみられるが、河岸段丘上にも横穴式石室を主体部とする円墳を多く見ることができる。甕棺の分布域に属し、北部九州系の土器や装飾古墳など、地理的条件から北部九州との交流が顕著に認められる。徳瀬遺跡は、日田盆地の西側にあたり三隈川とその支流である庄手川に囲まれた中洲の微高地上に存在する。この微高地は、南北約120m、東西約1kmと細長い形状をし、現状は宅地や畑地として利用されている。今回の調査区は、遺跡の西側にあたるが微高地南側の低位沖積地では河川の氾濫等により、これまで遺構は確認されていない。

東側は、県道石井～庄手線から北方向へ走る市道が調査区に接して建設され、平成5年日田市教育委員会が約600㎡の範囲を調査した。その結果、弥生時代前期末から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡や土坑の他に、古墳時代前期の石棺や方形周溝墓等が検出され、住居跡からは柱状片刃石斧、石庖丁、太形蛤刃石斧等が、10号石棺墓からは位至三公鏡とみられる鏡片が出土している。弥生時代において、台地上でない盆地内に前期から断続して集落が立地する例は少なく、その特異性が注目されている。

古代においては、南側の三隈川右岸が石井駅の推定される石井郷、北側は日理郷、東側は鞆編郷となり、徳瀬遺跡のある地域はその三郷が接する位置にあたる。

## III. 調査の概要

前項で述べたように、調査区の東側は、日田市教育委員会が市道建設に伴って、昭和59年度・平成5・6年度の3度にわたる調査が実施されている。この調査で弥生時代前期・中期の住居跡と貯蔵穴、土坑、後期末末から古墳時代の住居跡、溝、古墳時代の方形周溝墓などが検出され、この地が集落から墓地に変質したことが明らかとなった。したがって、日田市調査区と接しており、しかも当該地は西側に伸びる舌状の微高地の先端部にあたることから、以前の県営住宅建設においてある程度の破壊があったとしても、建物の間などの空閑地に遺構の残存が十分に想定された。

調査は、建物の基礎が残っており、この基礎を重機で取り除くと、残存している遺構の破壊につながる恐れがあることからこの基礎はそのままにしておき、空閑地のみ重機で表土を剥ぎ、基礎の内部についてはできるだけ人力で行うことにした。その結果、調査対象区約2154㎡の内、調査面積は約1200㎡となり、表土下約50cmの黄褐色粘質土層上において数多くの遺構が検出された。

遺構は、竪穴6基、土坑56基、溝2条に柱穴などが検出された。その大半は弥生時代前期後半から中期前半を中心とする長方形プランの竪穴住居跡、隅丸方形や長楕円形、楕円形の貯蔵穴、性格不明の土坑群などで、その外、中期後半から末の土坑、後期後半及び終末の大溝2条である。

このように、発掘区の状況は弥生時代前期から中期が中心であり、溝に伴う時期の生活遺構や古墳時代の方形周溝墓・石棺などの墓はなく、日田市教育委員会の調査区と大きく異なる状況であった。

遺物は、多くの遺構が発見されたにもかかわらず、残念なことに削平や攪乱が思いのほか大きく時期を決定する資料を得られなかった遺構も多い。遺物の大半は、各時期に属する土器群であるが、弥生時代前末から中期の1号竪穴から碧玉（軟玉）製の管玉が1点出土し注目された。しかし、43号土坑から縄文時代晩期の浅鉢が混在して出土していることや形態的特徴などから縄文時代に属すると判断された。その外、石皿、石鏃が出土した。

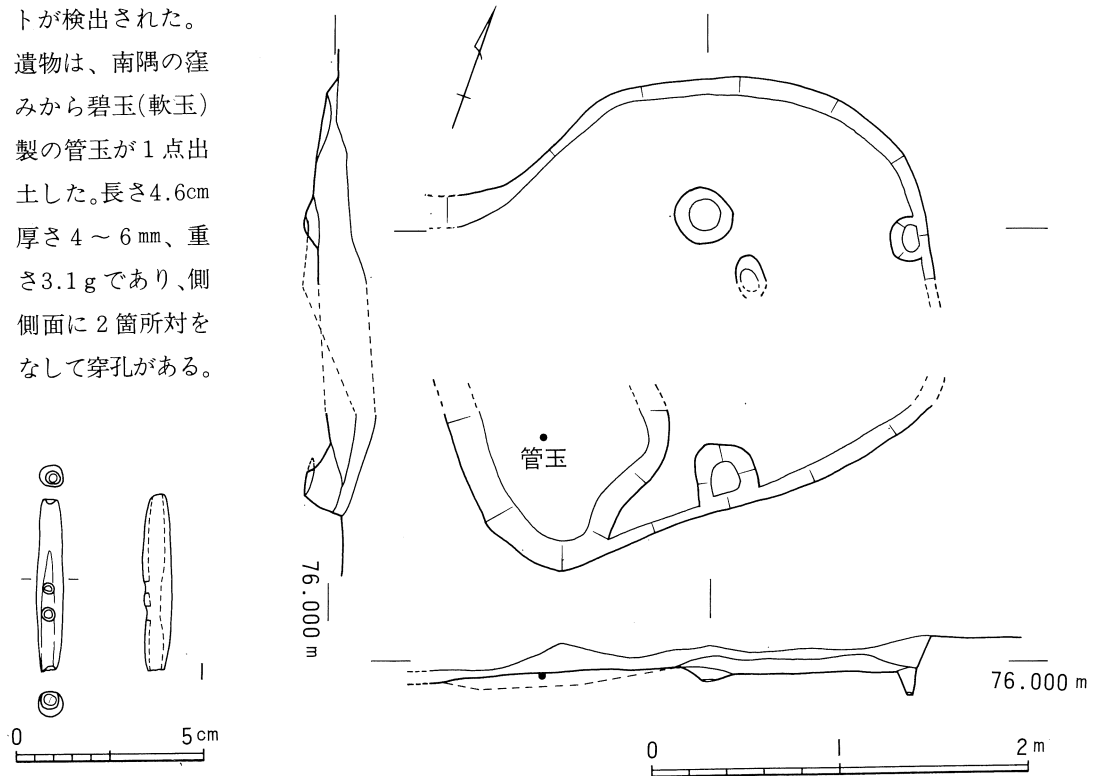
## IV. 遺構と遺物

### 1号竖穴

調査区の東側に位置する。建物の基礎により遺構の中央を東西に破壊され、さらに全体的に削平を受けたためか遺構の残存状況は悪い。長径約2.7m、短径約2.3m、深さ約15~20cmのややいびつな隅丸方形を呈する。床面はほぼ水平であるが南隅あたりが一段窪んでいる。東と南壁及び床面の4箇所に小ピット

トが検出された。

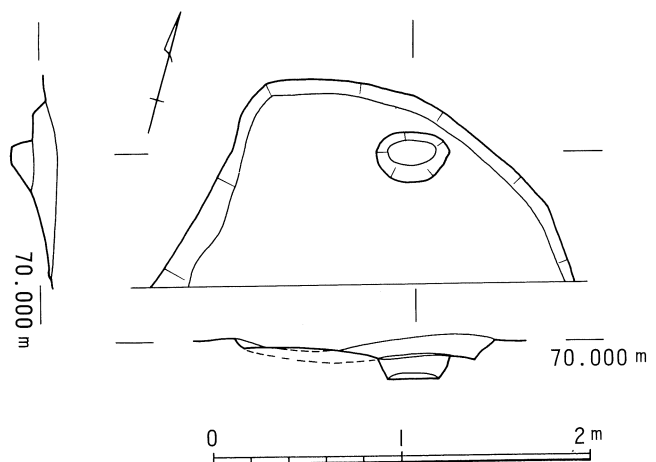
遺物は、南隅の窪みから碧玉(軟玉)製の管玉が1点出土した。長さ4.6cm、厚さ4~6mm、重さ3.1gであり、側面に2箇所対をなして穿孔がある。



第4図 1号竖穴及び出土管玉実測図

### 2号竖穴

1号竖穴から約5m北側に位置する。この遺構も南側の半分ほどが建物の基礎によって破壊されている。そのため平面プランはわからないが、残存状況からおそらく隅丸方形の竖穴が想定される。残存長約1.1m、幅(短径)約1.95m、深さ約10cmである。床面はほぼ水平である。床面の北側において長径40cm、短径26cm、深さ14cmのピットが検出された。竖穴内から遺物の出土はなく時期は不明である。

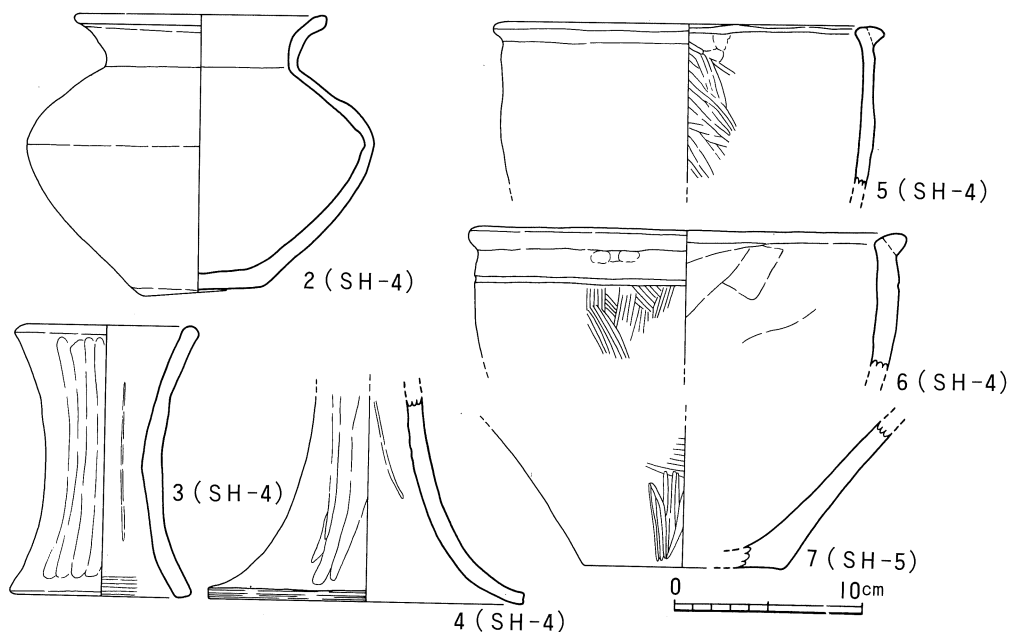


第5図 2号竖穴実測図

**3・4・5号竖穴** 調査区の北東隅の拡張区において、3基の竖穴と2基の土坑が重複して検出された。それぞれ遺構との切り会い関係は、次のように判断された。3号・4号・5号竖穴との関係であるが重複する部分に床を貼った状況が確認されたことから4号竖穴が最も古く、その後、4号竖穴の上に3号・5号竖穴が造られたと判断された。さらに、5号竖穴と6・7号土坑との関係については、これも5号竖穴の貼り床の下で検出されたことから、6・7号土坑の後に、5号竖穴が造られたと考えられる。これら竖穴遺構の性格は、かなり削平を受けてはいるが遺物及び遺構の特徴から4・5号竖穴は住居跡と判断されたが、3号竖穴については形態、規模などから隅丸方形の貯蔵穴の可能性が強いと思われる。しかし、部分的な調査のため判然としなかった。3号竖穴は、3基のうち最も東に位置する。北半分が未調査である。残存長約1.3m、幅（短径）2.7m、深さ8cmである。平面形は隅丸の方形と思われる。遺物は、甕の底部など数点の土器破片が出土した。4号竖穴は、3基の真ん中に位置する。3号・5号竖穴の床面下で東西壁のプランが確認されたが、北側壁は建物基礎によってすでに破壊されていた。北壁がないが一辺約4mほどの隅丸方形を呈する竖穴住居跡と考えられる。深さは20cmである。主柱穴は検出されず、南壁に接するようにピットがあるが位置的に主柱穴とは認められなく、本遺構に伴う可能性は弱いと思われる。遺物は、壺や甕、高坏、器台など比較的多くの土器が出土した。なお、覆土から2点の石鏃が検出されたが縄文期に所属すると考えられる。5号竖穴は、東に位置する。この遺構も北側の壁がすでに失われていた。東西2.5m、南北約4m、深さ4～8cmほどの隅丸長方形呈する竖穴住居跡である。主柱穴は中央やや南側で短軸方向に2本対をなす柱穴が想定される。その外、床面中央から東側にかけて焼土粒子や木炭の広がり確認され、主柱穴間に炉跡を有すると考えられる。遺物は、大きく削平を受けており、若干の土器破片が残存する程度であった。

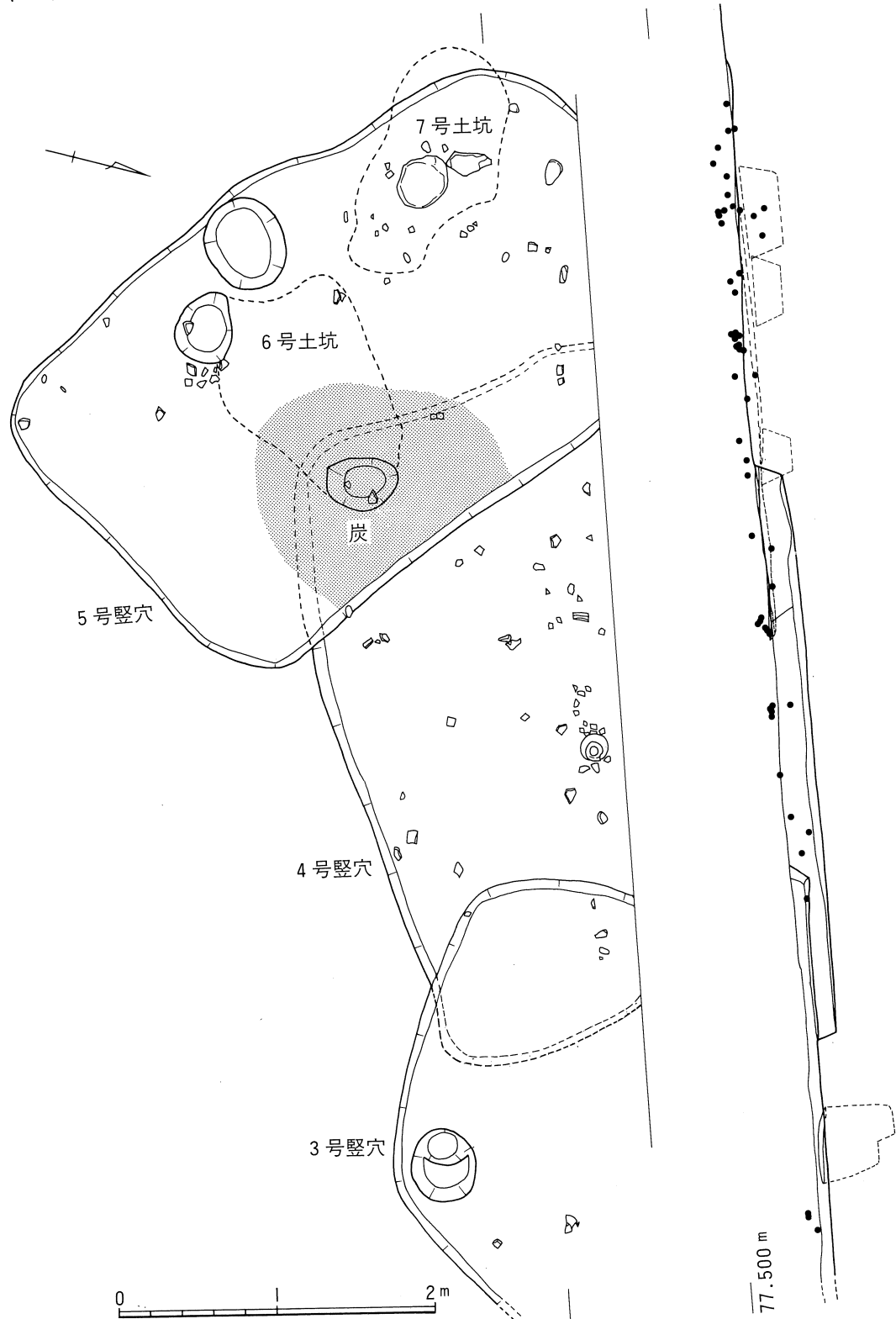
**出土遺物**

12が3号竖穴、7が5号竖穴出土でその外の土器はすべて4号竖穴出土土器である。2・7が壺で2は平底で中央が大きく折れるソロバン玉状の胴部に、小さく外反して開く口縁部をもつ小型の壺である。7は平底を呈する底部破片で、外面に篋磨き調整を施している。3と10は底径と口縁径がほぼ同じになる鼓形状の器台である。4は高坏の脚部である。ラップ状に開く長脚タイプで外面篋磨きがある。5・6・8・9・11～15は甕の口縁部と底部の破片である。5・6は口縁部に三角

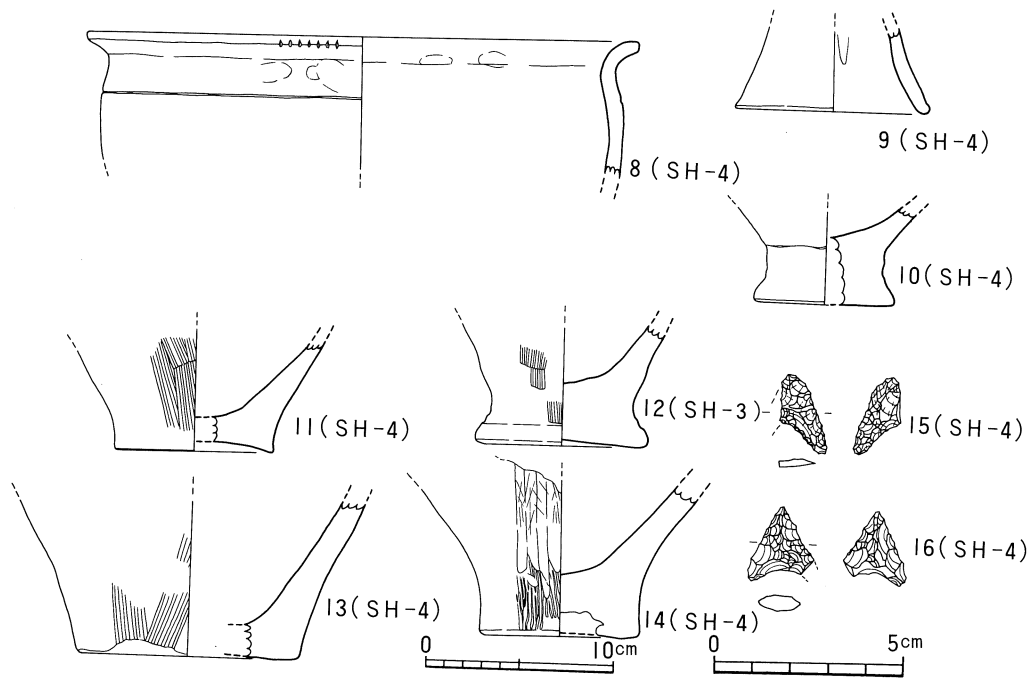


第6図 3・4・5号竖穴出土遺物 (1)

形の貼付突帯をもついわゆる亀ノ甲タイプの甕であり、6には口縁部下に一条の沈線をめぐらして  
 いう。8は口唇部下側に刻み目をもち、如意形の口縁に、一条の篋描き沈線をめぐらす。9は器  
 台の底部である。底部は、分厚いタイプ（10・12・14）と比較的薄いタイプ（11・13）があり、上  
 げ底とそうでないものがある。15・16は石鏃で、15は黒曜石製、16はサヌカイト製である。以上か  
 ら、これら3基の竪穴は弥生時代前期末から中期前半頃にかけて造られたと考えられる。

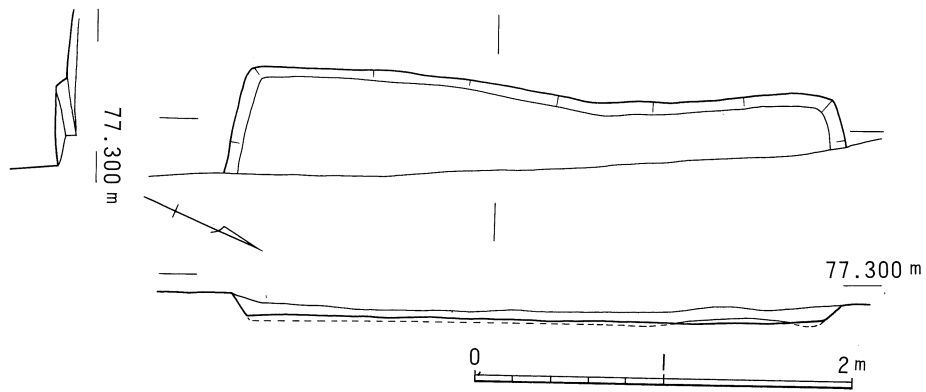


第7図 3・4・5号竪穴実測図



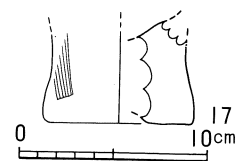
第8図 3・4・5号竖穴出土遺物 (2)

**6号竖穴** 遺構は調査区の北東端に位置する。平面プランは方形で、規模は2.30m×60cm、最大深10cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は平坦である。竖穴は調査区外に続くものと推定される。竖穴からは土器片が出土した。



第9図 6号竖穴実測図

**出土遺物** 17は甕の底部である。外面調整は上下方向に刷毛目を施す。底径8.2cmである。遺物は弥生中期初頭から前半に比定される。

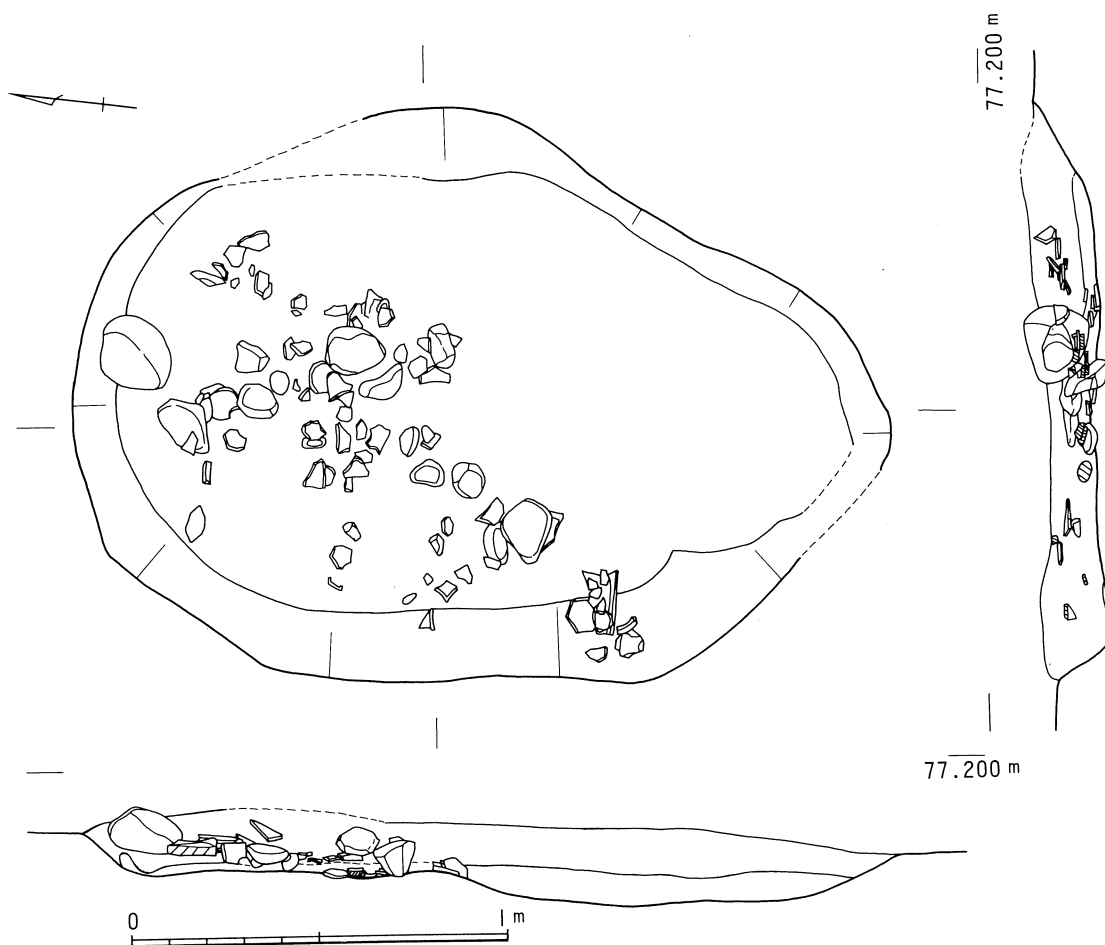


第10図 6号竖穴出土遺物



### 1号土坑

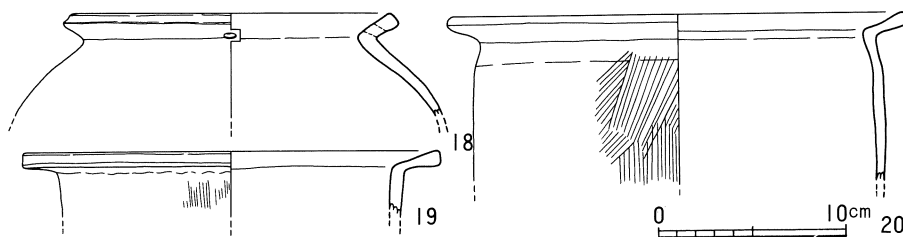
遺構は調査区の北東端に位置する。平面プランは楕円形で、規模は長軸2.18m、短軸1.51m、最大深18cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は平坦で二段になっている。土坑内からは土器片、礫が北側に偏ったかたちで出土している。



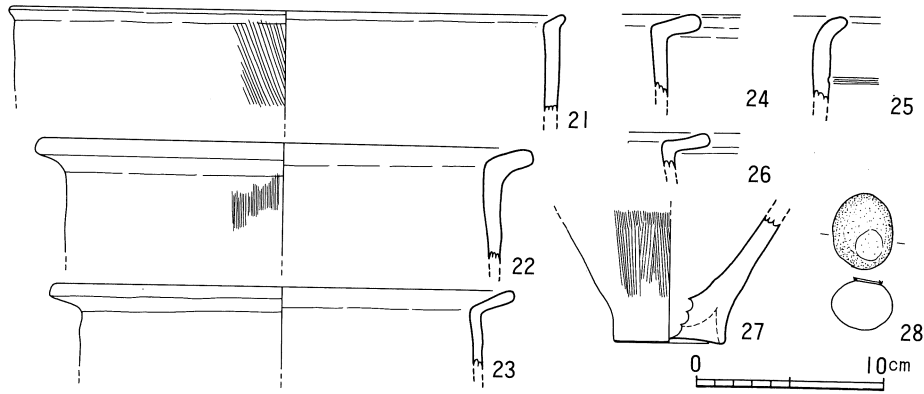
第11図 1号土坑実測図

### 出土遺物

18は壺である。口縁部は屈曲し、内外面ともに調整は不明である。遺物は頸部に一對の孔をもつ。19~26は甕である。口縁部はくの字あるいは短く外反する。外面の調整は上下方向に刷毛目を施す。内面の調整は不明である。27は甕の底部片で、外面は上下方向に刷毛目を施す。内面の調整は不明である。28は砂岩質の磨石である。29は石鏃、30はスクレイパーで、ともに黒曜石である。18~27は弥生中期後半から末に比定される。

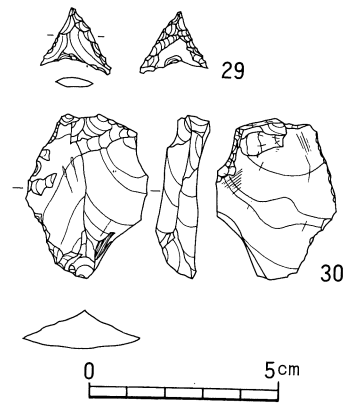


第12図 1号土坑出土遺物 (1)

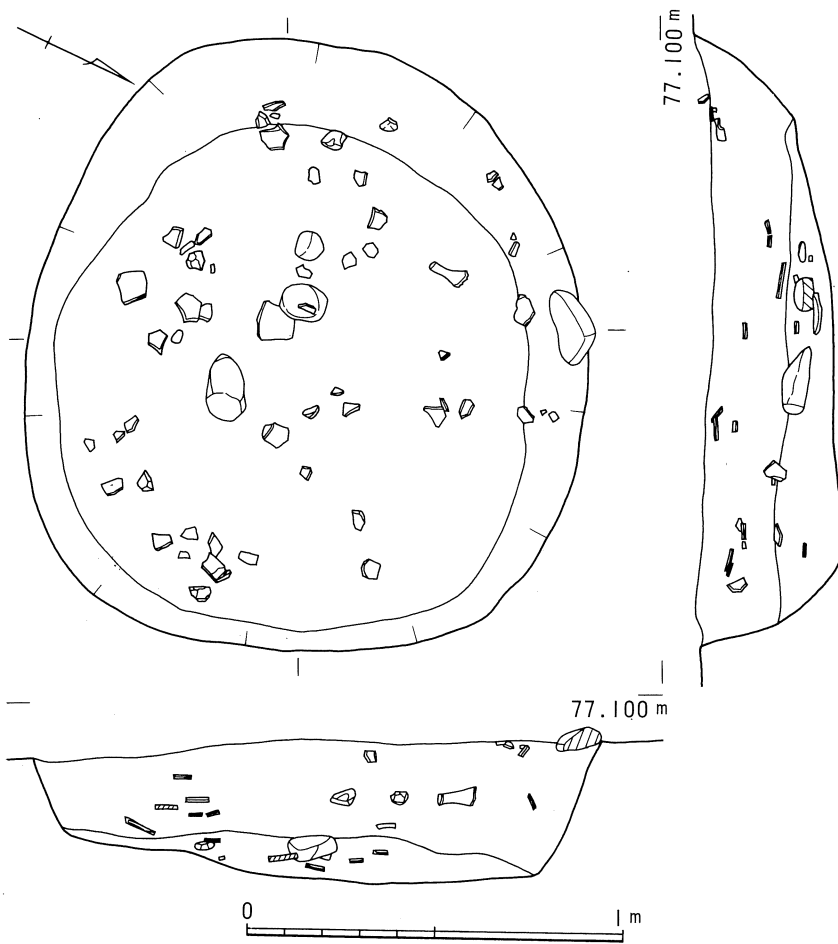


第13図 1号土坑出土遺物 (2)

**2号土坑** 遺構は調査区の北東端に位置する。平面プランは楕円形で、規模は長軸1.62m、短軸1.48m、最大深37cmである。立ち上がりは明瞭である。遺物は土器片と礫が出土した。



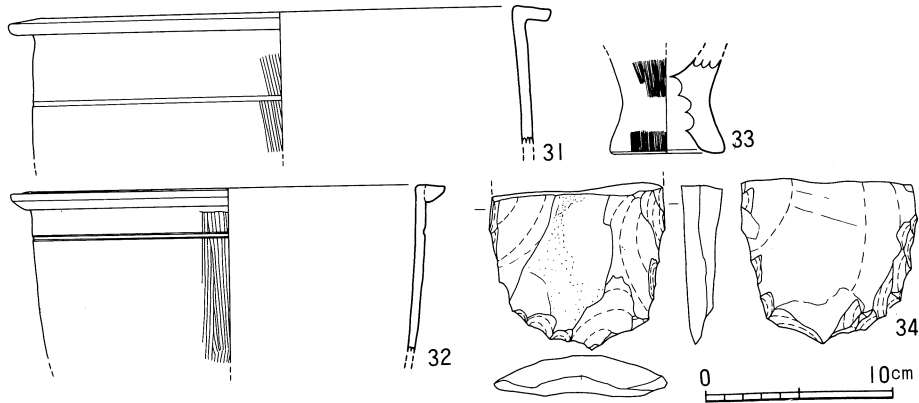
第14図 1号土坑出土石器



第15図 2号土坑実測図

**出土遺物**

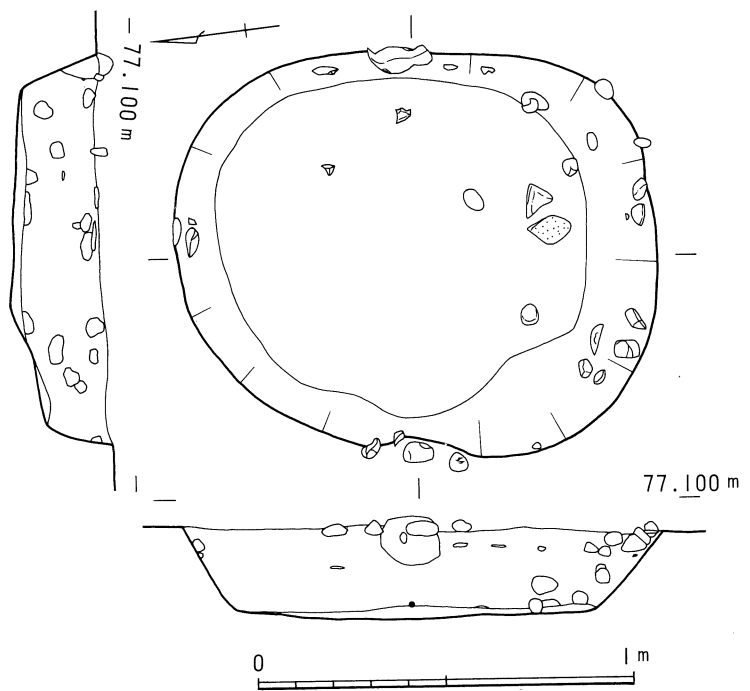
31、32は甕である。31の口縁部は屈曲し、胴部に一条の沈線をもつ。32の口縁部は断面三角形の粘土を貼りつけ、胴部に沈線をもつ。外面はともに上下方向に刷毛目を施す。内面の調整は不明である。33は底部片で、上げ底である。外面は上下方向に刷毛目を施す。34は安山岩質の扁平打製石斧刃部である。劣化が著しく調整痕を残さない。31～33は弥生中期初頭から前半に比定される。



第16図 2号土坑出土遺物

3号土坑

遺構は調査区の北東側に位置する。平面プランは楕円形で、規模は長軸1.28m、短軸1.07m、最大深24cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は平坦である。土坑内からは礫が出土している。土器片など時期を特定できる遺物は出土しなかった。



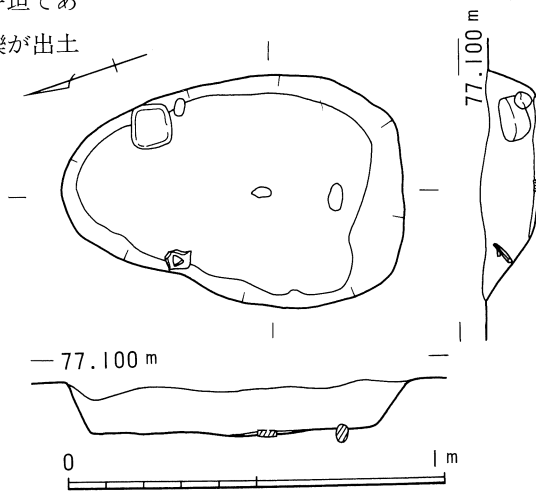
第17図 3号土坑実測図

4号土坑

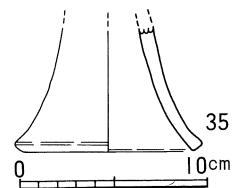
遺構は調査区の北東側に位置する。平面プランは楕円形で、規模は長軸81cm、短軸62cm、最大深13cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は平坦である。遺物は土器片と礫が出土した。

出土遺物

35は器台の底部である。内外面ともに調整は不明、底径8.9cmである。遺物は弥生中期初頭から前半に比定される。



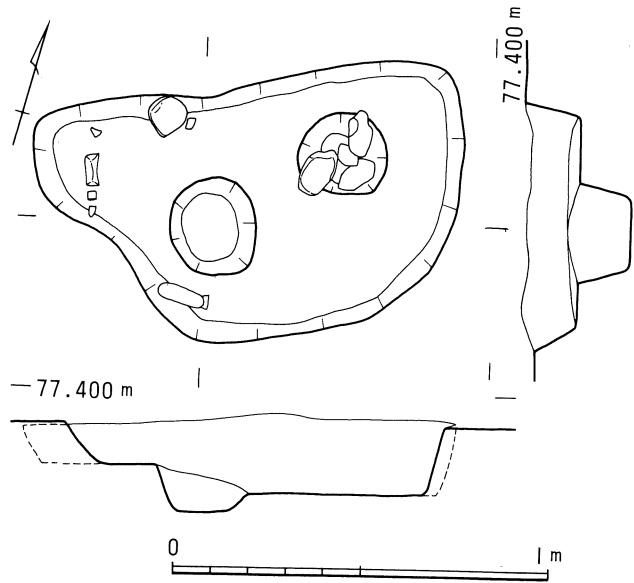
第18図 4号土坑実測図



第19図 4号土坑出土遺物

5号土坑

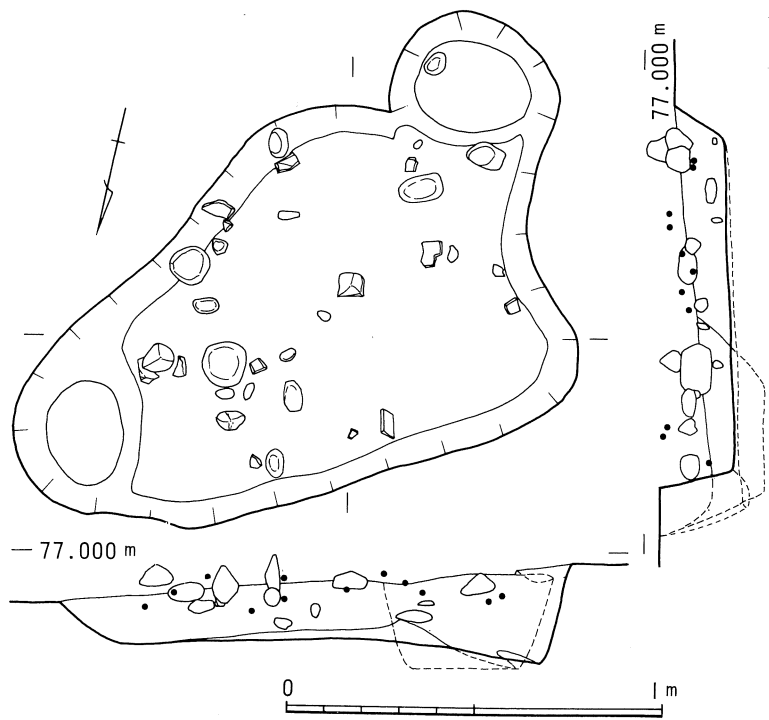
遺構は調査区の北東側に位置する。平面プランは不定形で、規模は長軸1.14m、短軸72cm、最大深21cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は平坦である。底部には円形掘り方を2箇所確認した。それぞれ径20cmと25cm、最大深12cmと16cmである。土坑内からは床面掘り方付近に礫を出土した。土器など時期を特定できる遺物は確認されなかった。



第20図 5号土坑実測図

6号土坑

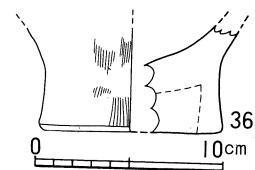
遺構は調査区の北東側に位置する。平面プランは不定形で、規模は長軸1.50m、短軸1.03m、最大深27cmである。掘り方は明瞭で、底部はほぼ平坦である。遺構の北東・南西端には楕円形掘り方を確認した。土坑と掘り方の前後関係は確認されなかったが5号縦穴の主柱穴とも考えられる。土坑内からは土器片と礫が埋土上層で出土している。



第21図 6号土坑実測図

出土遺物

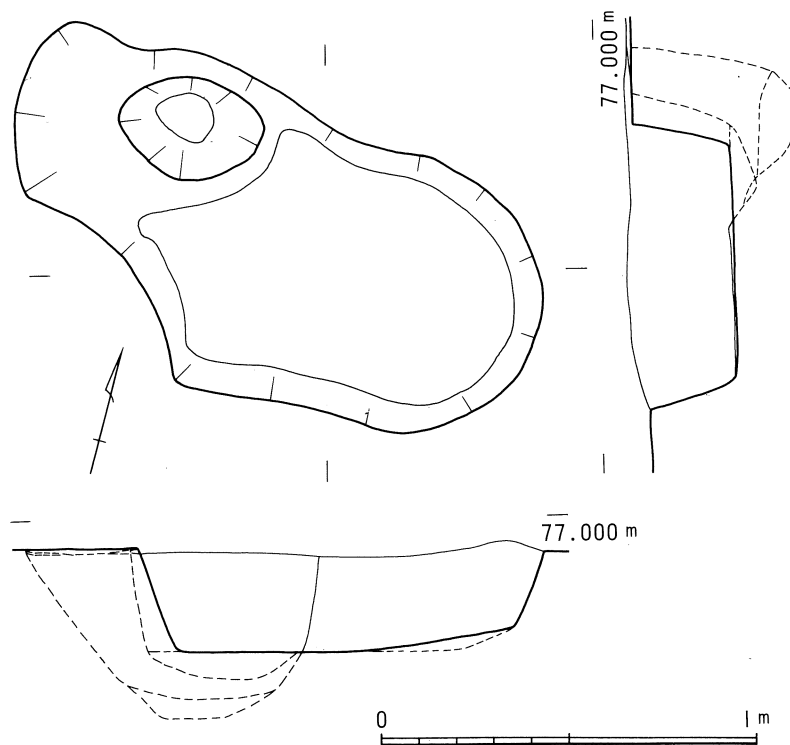
36は底部片である。外面は上下方向に刷毛目を施す。底部は平底である。遺物は弥生前期後半から末に比定される。



第22図 6号土坑出土遺物

7号土坑

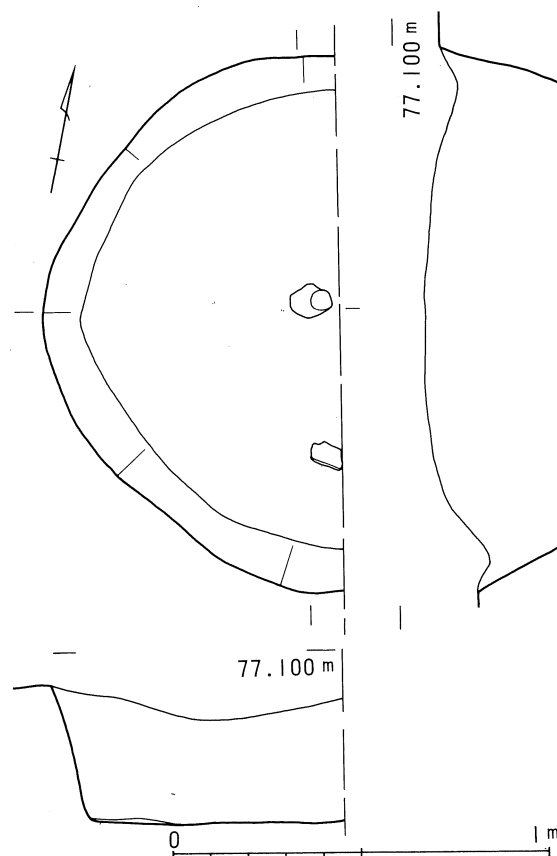
遺構は調査区の北側に位置する。平面プランは不定形で、規模は長軸1.52m、短軸82cm、最大深27cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は平坦である。土坑西端には長軸60cm、短軸55cm、最大深46cmの楕円掘り方を検出したが切り合い関係の有無は確認できなかった。遺物は出土していない。



第23図 7号土坑実測図

8号土坑

遺構は調査区の北端に位置する。遺構は建物基礎によって、東半分を消失していた。平面プランは円形で、規模は直径1.42m、最大深37cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は平坦である。土坑内からは土器片が出土している。

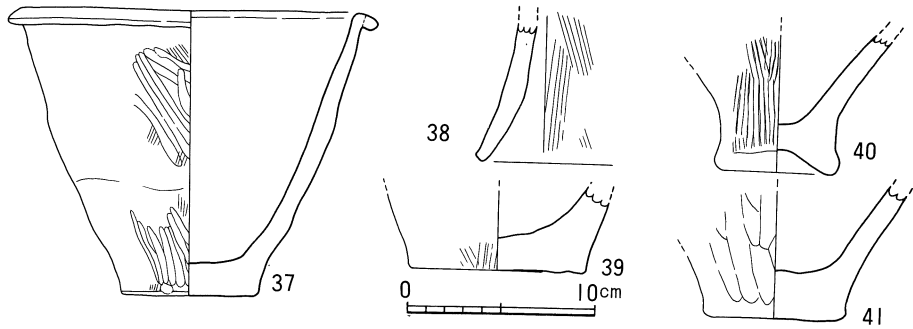


第24図 8号土坑実測図

出土遺物

37は甕である。口縁部に粘土貼りつけの突帯を持つ。外面は刷毛目調整の後、篋磨きを施し、内面は調整不明である。底部は平底である。口径17.6cm、器高15.1cmである。38は器台底部である。内面は上下方向に刷毛目を施す。外面は調整不明である。39~41は底部片である。39は平底で外面に刷毛目を施す。内面は調整不明である。40の底部は上げ底で外面に刷毛目を施す。内面は調整不明である。41は外面に篋磨きを施す。内面は調整不明である。遺物は弥生前期後半から末に比定される。





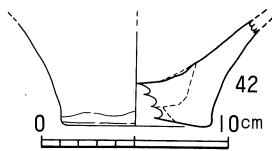
第25図 8号土坑出土遺物実測図

9号土坑

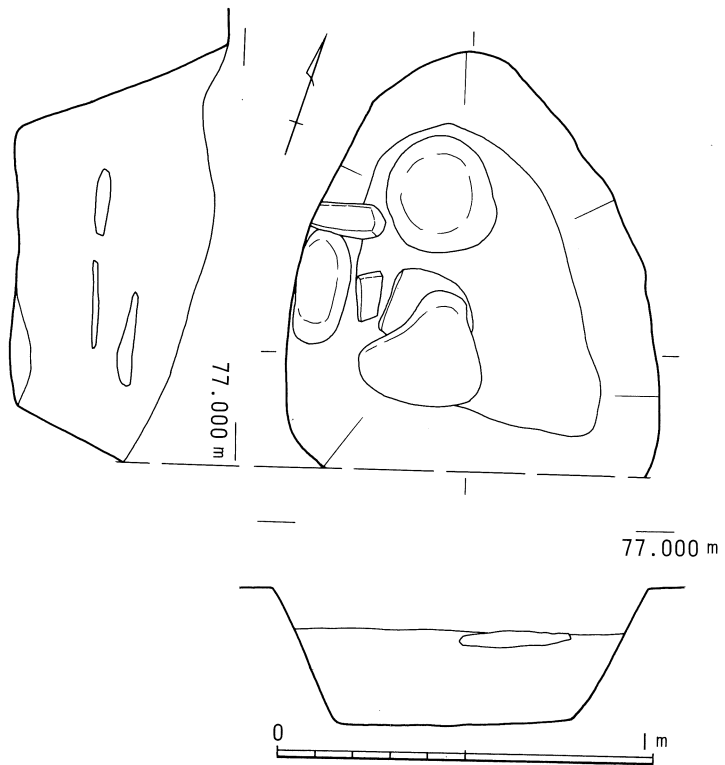
遺構は調査区の北端に位置する。遺構は建物基礎のため南端を消失している。確認できる規模は長軸1.11m、短軸99cm、最大深59cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は平坦である。

出土遺物

42は底部片である。内外面ともに調整は不明である。遺物は弥生前期末から中期初頭に比定される。



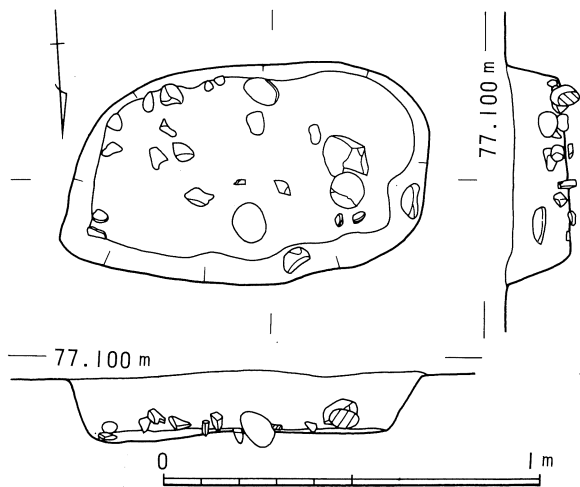
第26図 9号土坑出土遺物図



第27図 9号土坑実測図

10号土坑

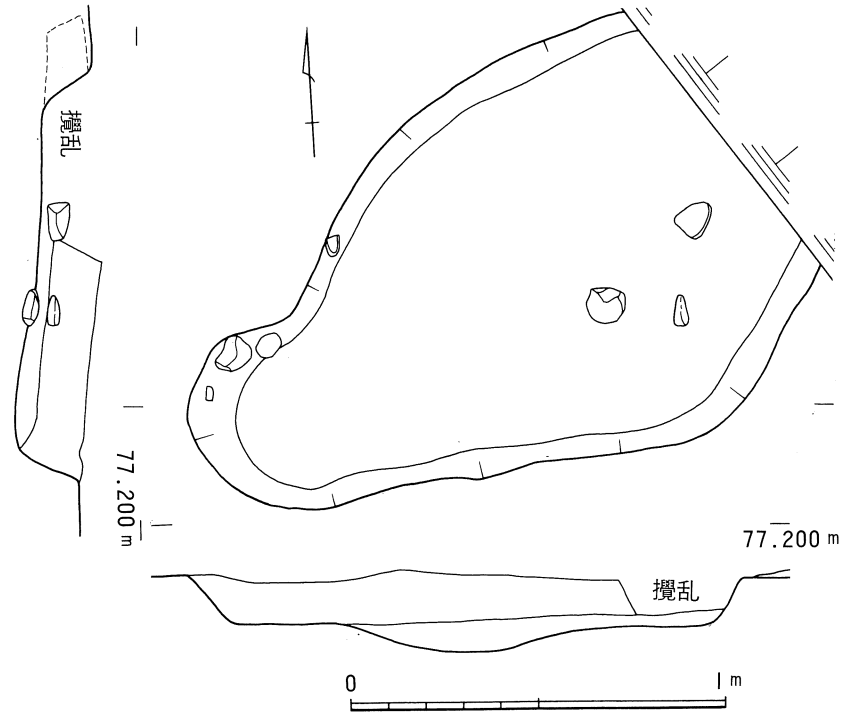
遺構は調査区の北端に位置している。平面プランは楕円形で、規模は長軸95cm、短軸47cm、最大深16cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は平坦である。底部からは礫、土器片が出土したが、時期を特定できる遺物は確認されなかった。



第28図 10号土坑実測図

11号土坑

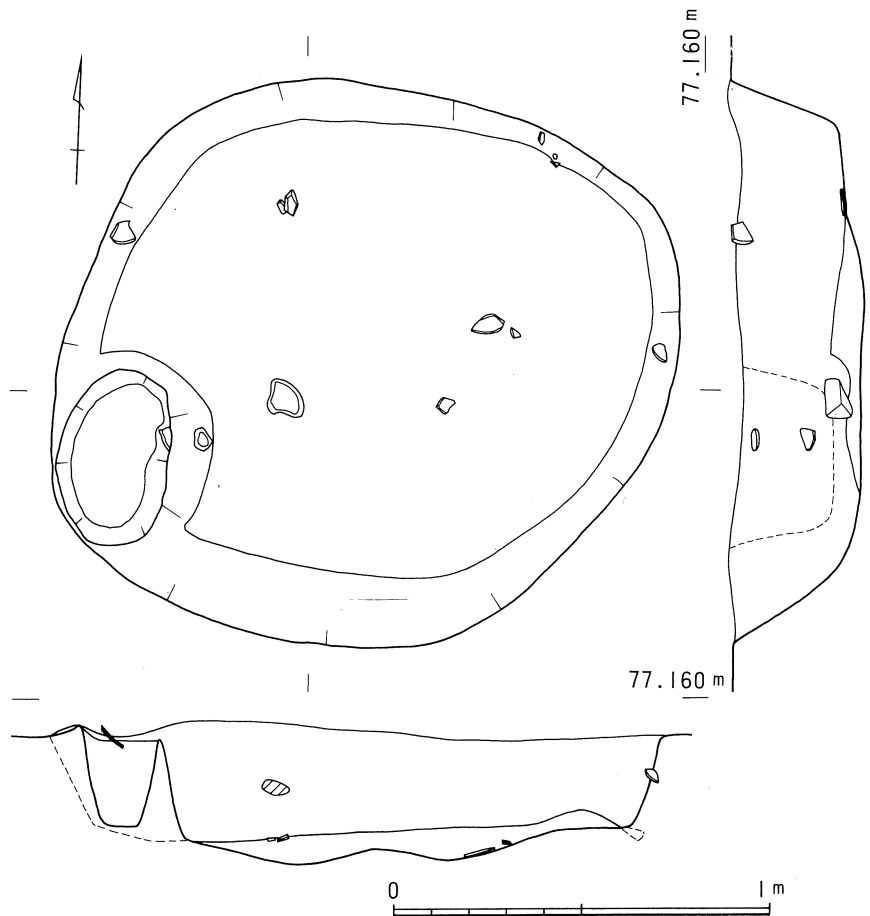
遺構は調査区の北端に位置する。遺構は建物基礎のため北東端を消失していた。確認できる遺構の規模は、長軸1.60m、短軸1.14m、最大深20cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は北から南に緩やかに傾斜している。土坑内からは礫が出土したが、土器片など時期を特定できる遺物は確認されなかった。



第29図 11号土坑実測図

12号土坑

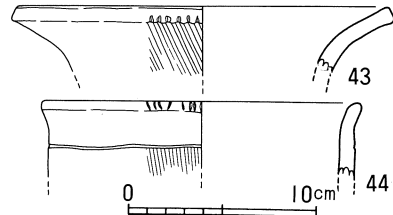
遺構は調査区の北側に位置する。平面プランはほぼ円形で、規模は長軸1.65m、短軸1.50m、最大深45cmである。遺構南西隅には長軸60cm、短軸43cm、最大深26cmの楕円形掘り方を確認した。土坑と掘り方の前後関係は不明である。遺物は土器片が出土した。



第30図 12号土坑実測図

出土遺物

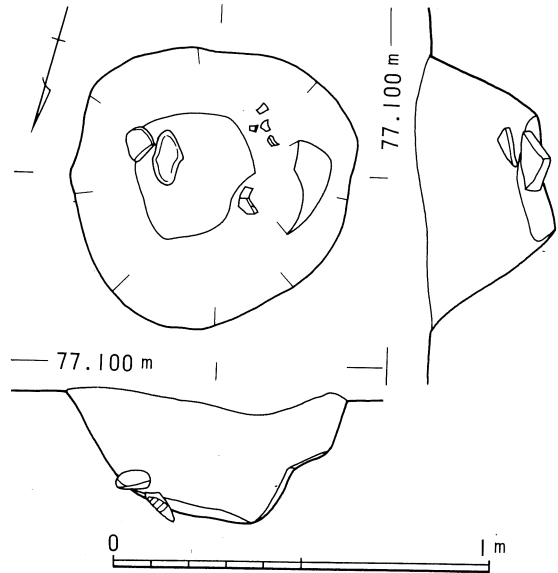
43は壺の口縁部でゆるやかに外反する。口唇部に刻目を施し、刻目直下から上下方向に刷毛目調整をなす。44は甕の口縁部でわずかに外反する。口唇部には刻目を施す。胴部には沈線を施し直下から上下方向に刷毛目調整をもつ。遺物は弥生前期後半から末に比定される。



第31図 12号出土遺物

13号土坑

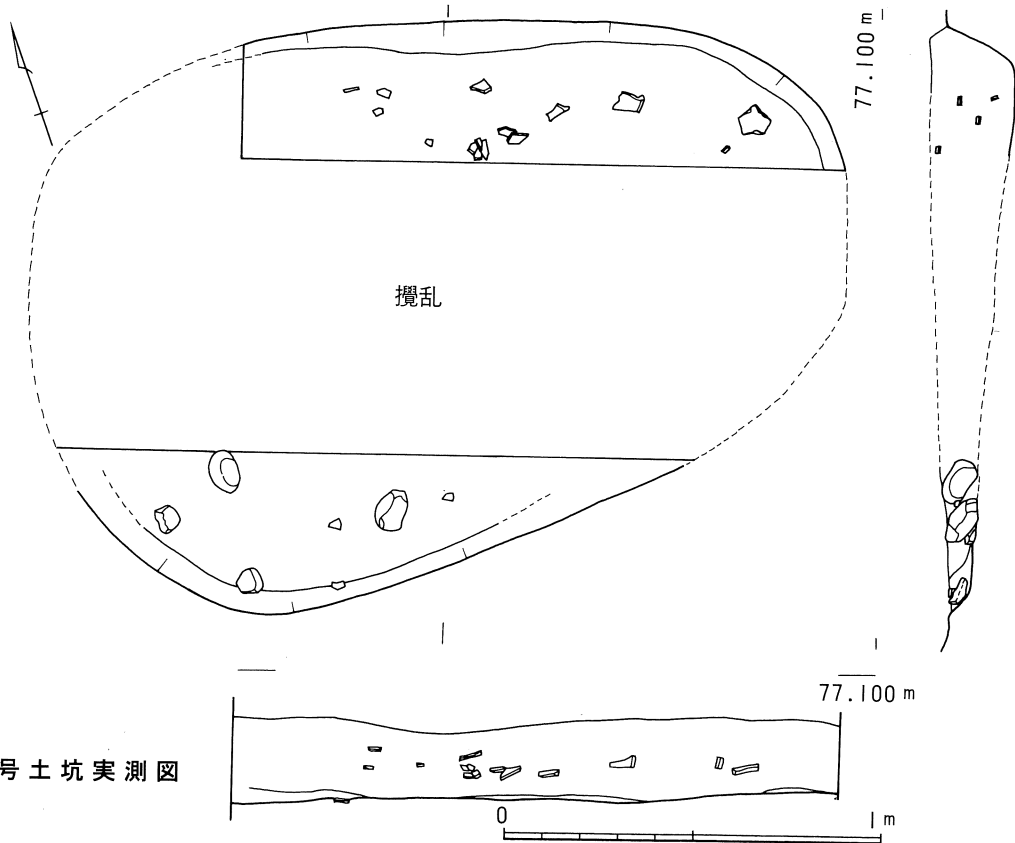
遺構は調査区の北側に位置する。平面プランは円形で、規模は直径75cm、最大深35cmである。立ち上がりは明瞭であるが、底部は東から西に傾斜している。土坑内からは礫の他に土器片が出土したが、時期を特定できる遺物は確認されなかった。



第32図 13号土坑実測図

14号土坑

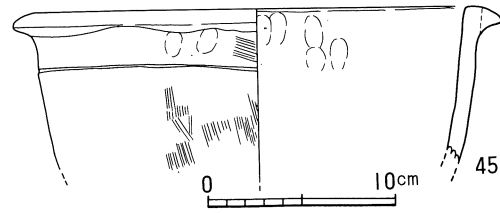
遺構は調査区の中央部北側に位置する。遺構は建物基礎により中央部を消失していた。平面プランは長楕円形で、規模は長軸2.15m、短軸1.52m、最大深25cmである。土坑内からは礫の他に土器片を出土している。



第33図 14号土坑実測図

出土遺物

45は甕の口縁部である。口縁部には断面三角形の突帯を貼りつけている。胴部外面には一条の沈線を施し、刷毛目調整をなす。突帯下と内面に指圧痕を確認できる。遺物は弥生前期後半から末に比定できる。



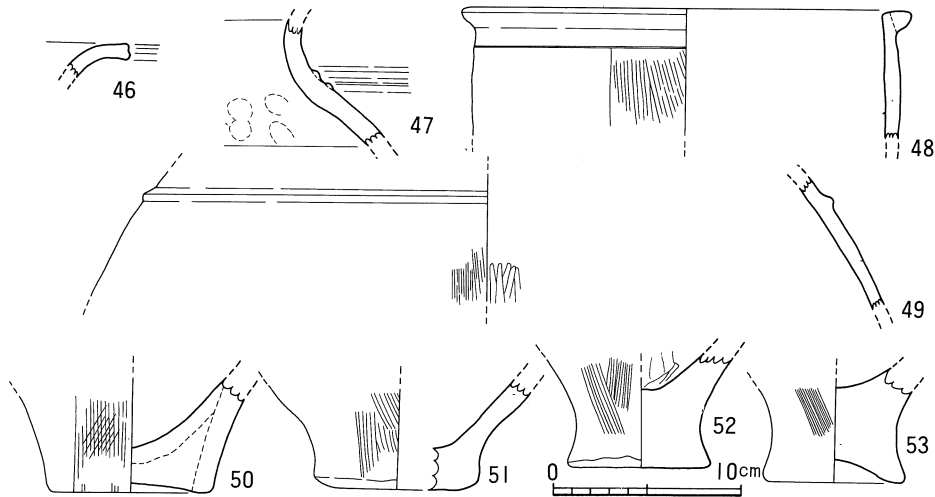
第34図 14号土坑出土遺物

15・16号土坑

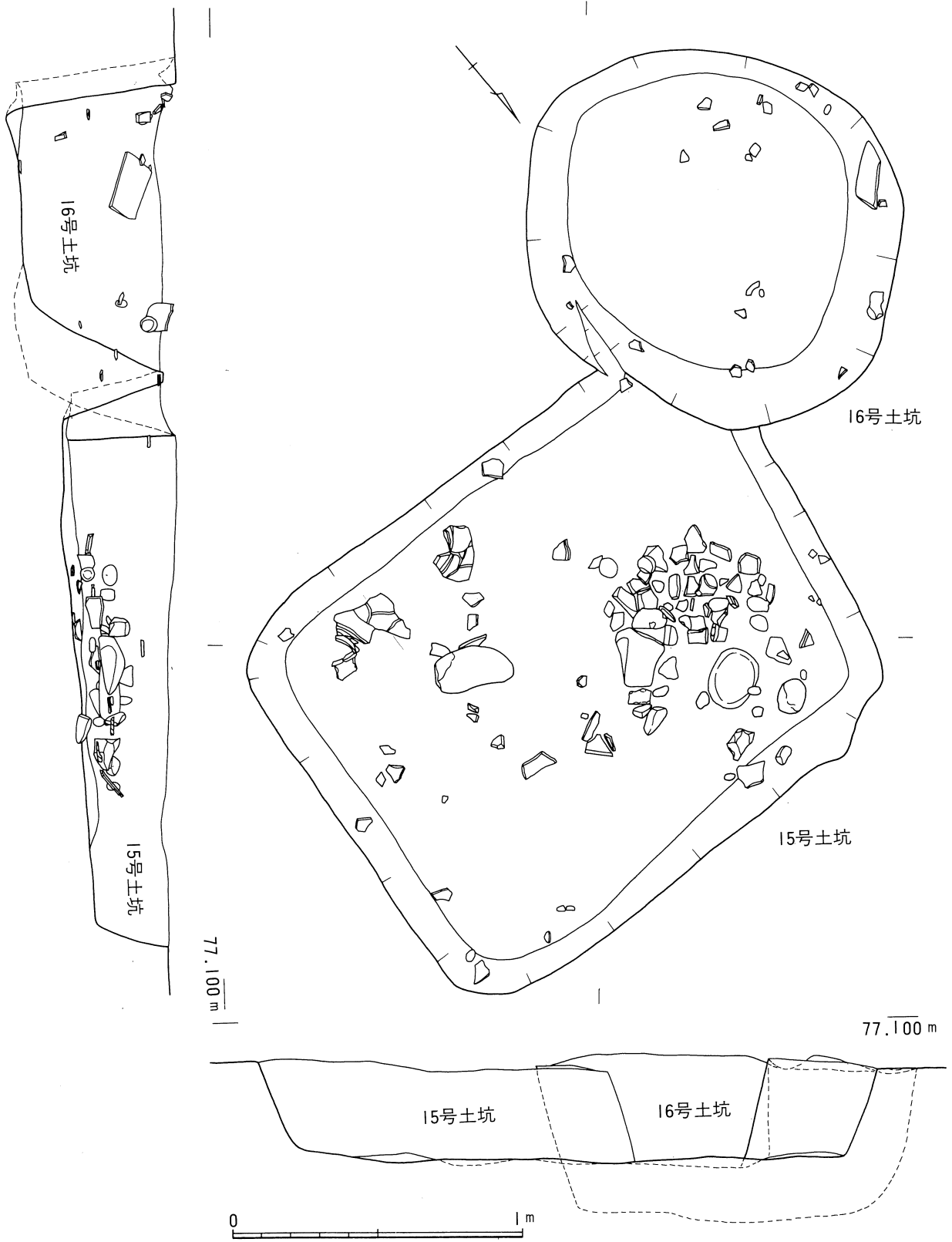
各遺構は調査区東側に位置している。15号土坑の平面プランは長方形で、規模は長軸1.93m、短軸1.56m、最大深31cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は平坦である。土坑内からは土器片と礫が出土している。16号土坑の平面プランは円形で、規模は直径1.30m、最大深53cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は平坦である。土坑内からは土器片と礫が出土しているが、時期を特定できる遺物は確認されなかった。土坑の切り合い関係は確認されなかった。

出土遺物

46は壺の口縁部で大きく外反する。内外面ともに調整は不明である。47は壺の頸部から胴部にいたる部分である。外面には貼りつけ突帯を2条施し、内面は指圧痕を確認できる。48は甕である。口縁部は直立し貼りつけの突帯をもつ。胴部には沈線を1条施し、直下から上下方向に刷毛目調整をなす。内面の調整は不明である。49は壺の胴部である。外面には断面三角形の貼りつけ突帯を持つ。突帯直下には上下方向に刷毛目を施す。内面は撫で調整である。50～53は底部片である。50～53の外面調整は上下方向、斜め方向の刷毛目調整を施している。52は内面を撫で調整し、底部は平底である。53の底部は上げ底である。遺物は弥生前期後半から末に比定される。



第35図 15号土坑出土遺物

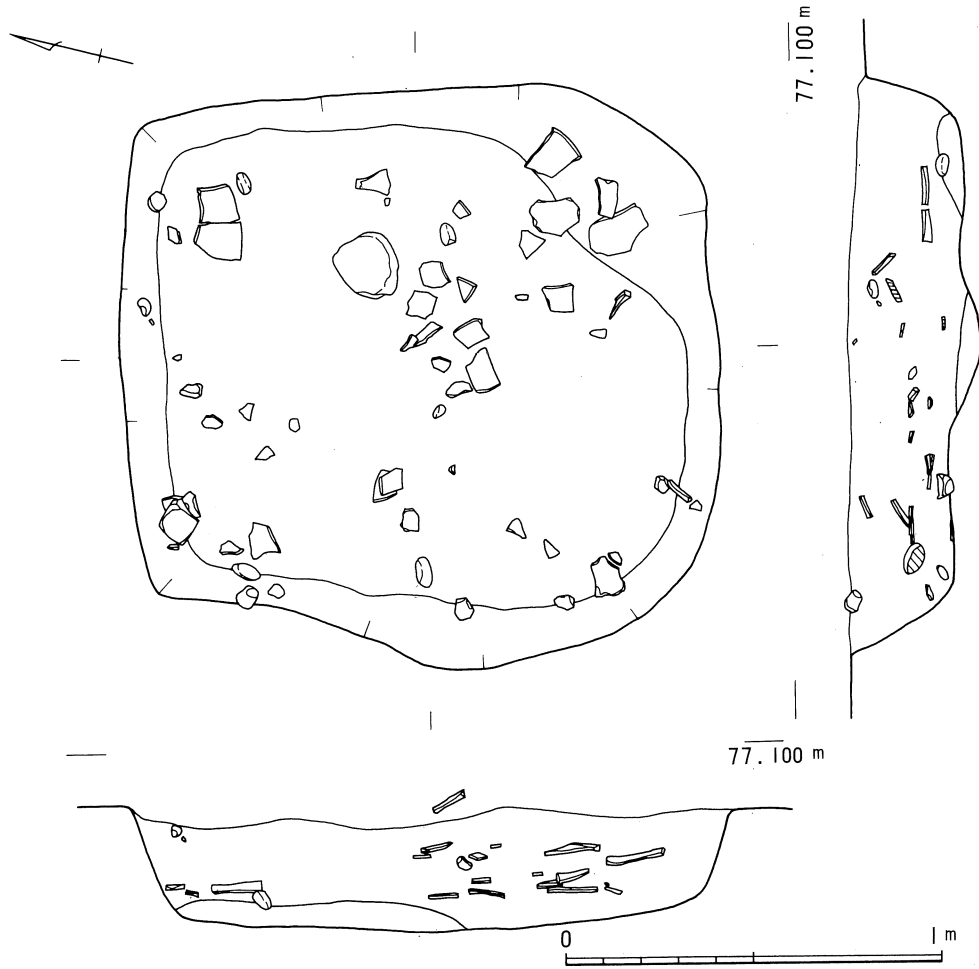


第36图 15·16号土坑实测图



17号土坑

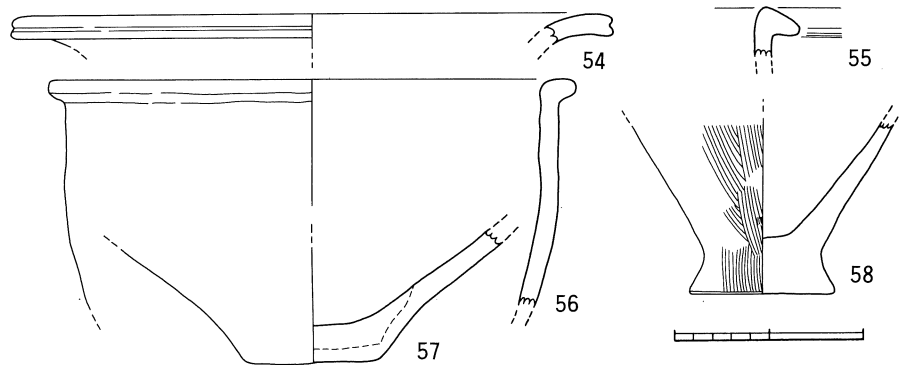
遺構は調査区の中央部東側に位置する。平面プランはほぼ方形で、規模は長軸1.60m、短軸1.55m、最大深30cmである。立ち上がりは明瞭であるが、底部は凹凸がある。



第37図 17号土坑実測図

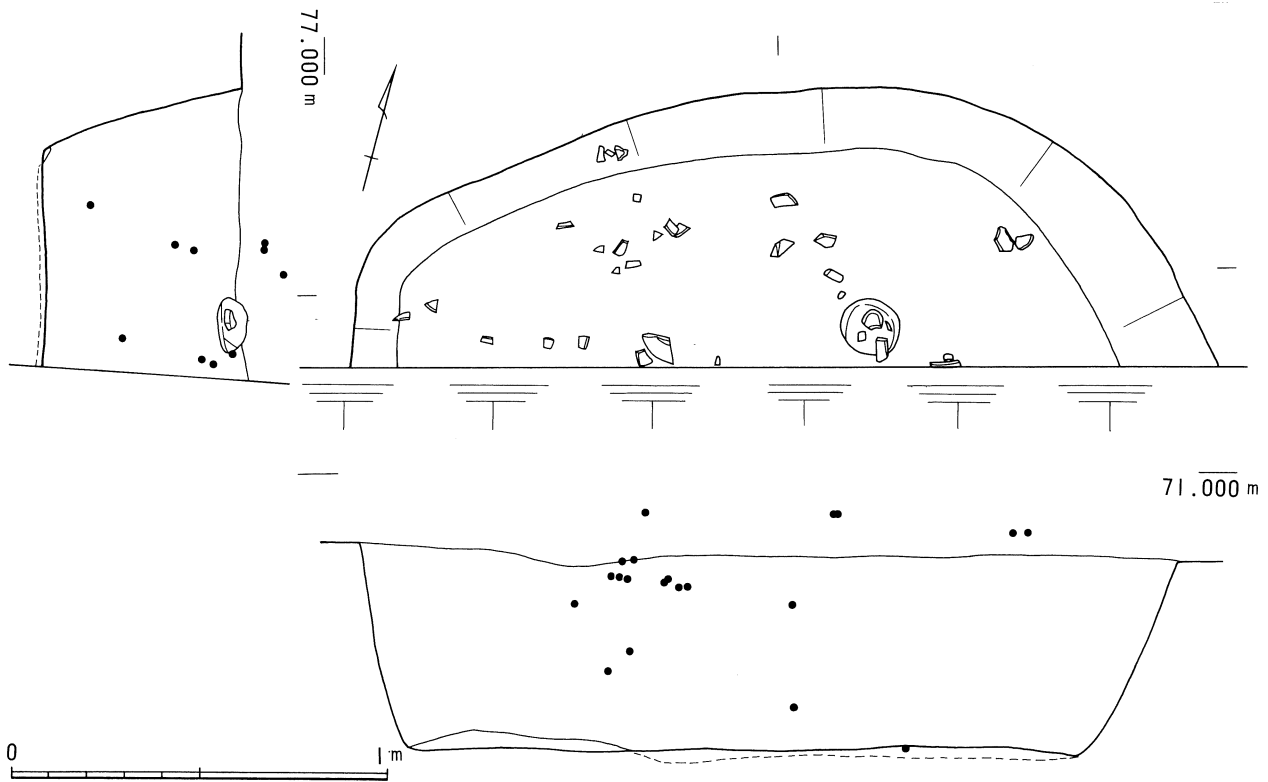
出土遺物

54は壺の口縁部である。55、56は甕で、口縁部に突帯をもつ。57は壺の底部片である。58は底部片で、外面上下方向に刷毛目を確認できる。底部は平底である。遺物は弥生前期後半から末に比定される。



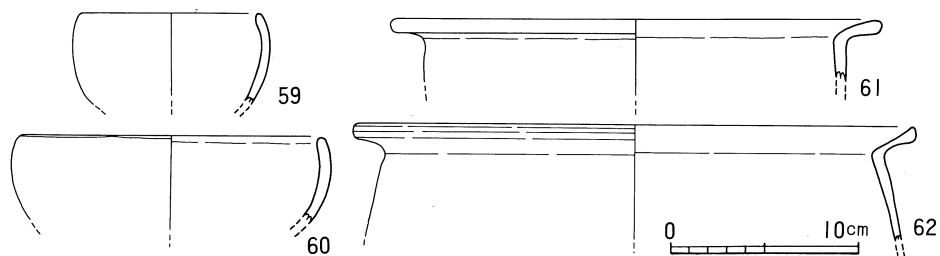
第38図 17号土坑出土遺物

**18号土坑** 遺構は調査区の東側に位置すが、建物基礎のため南半分を消失していた。平面プランは長楕円形で、確認できる規模は長軸2.30m、短軸74cm、最大深52cmである。立ち上がりは明瞭で、底部はほぼ平坦である。土坑内からは土器片が出土している。



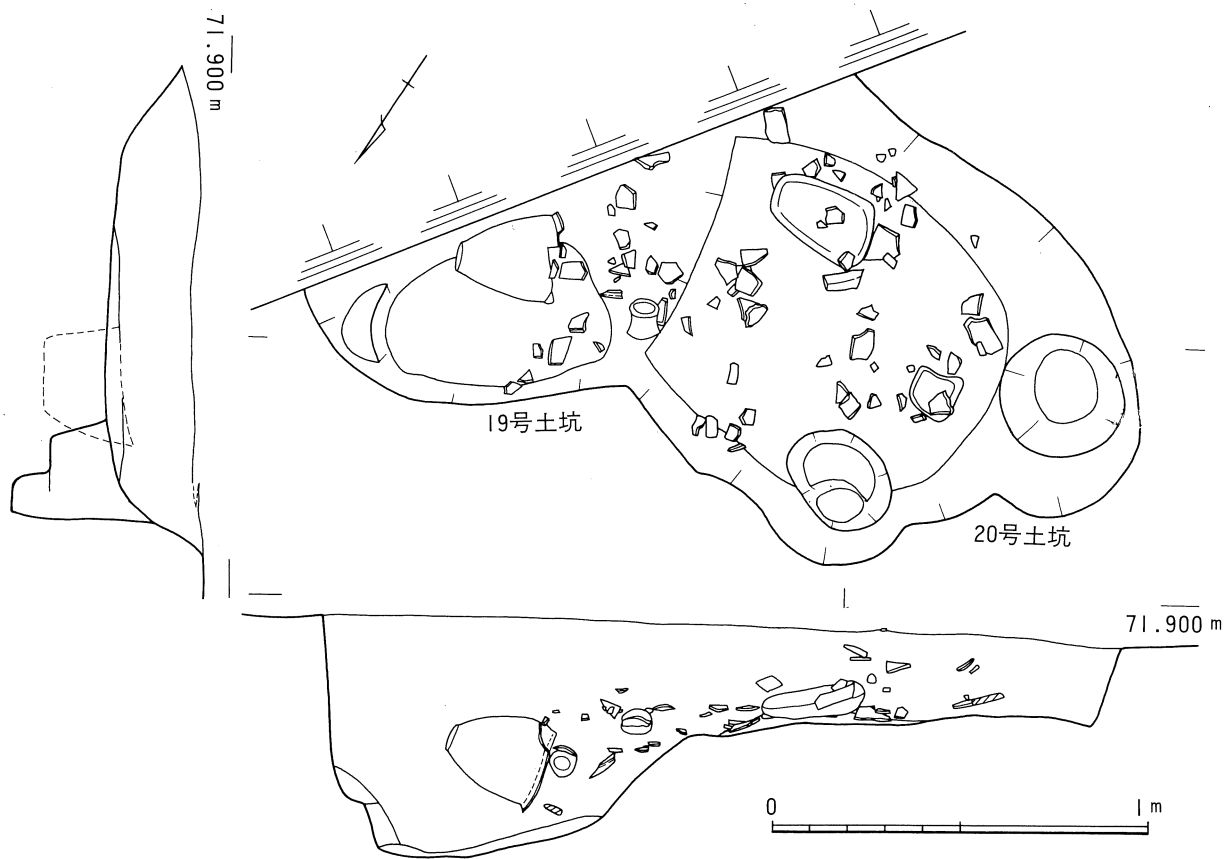
第39図 18号土坑実測図

**出土遺物** 59、60は高坏である。口縁部はともに緩やかに内反する。内外面ともに調整は不明である。61、62は甕である。ともにくの字の口縁部をもつ。内外面ともに調整は不明である。59、60は弥生中期中頃、61、62は弥生中期後半から末にそれぞれ比定できる。



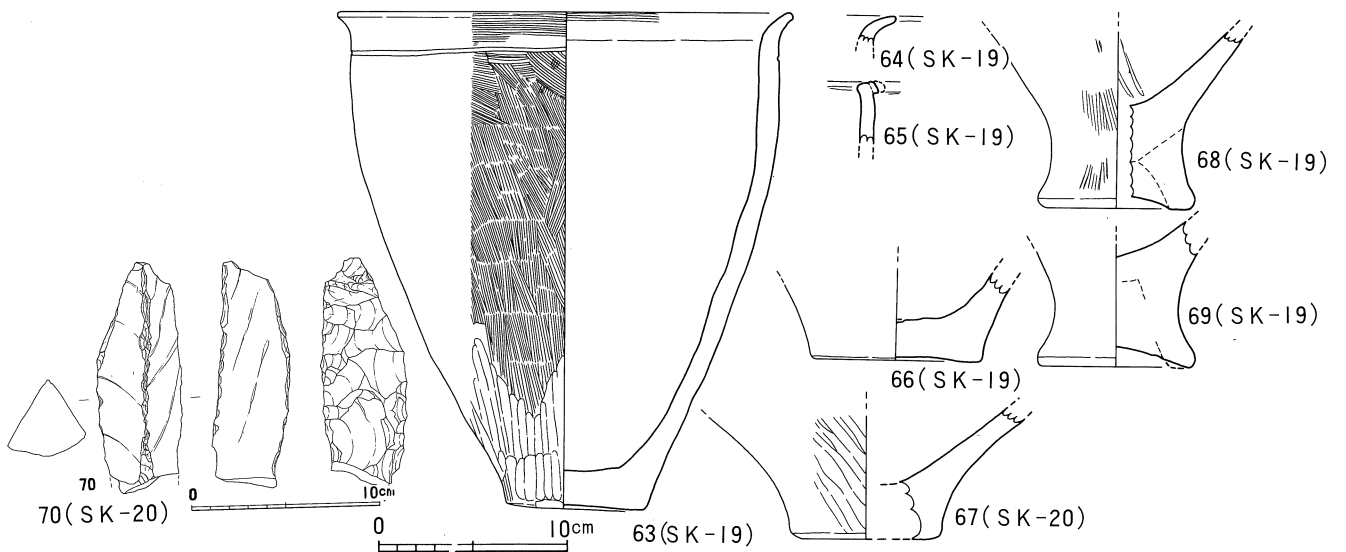
第40図 18号土坑出土遺物

**19・20号土坑** 各遺構は調査区の南東側に位置するが、建物基礎のため遺構の東側を消失していた。19号土坑の平面プランは楕円形で、確認できる規模は長軸90cm、短軸50cm、最大深63cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は凹凸がある。土坑内からは土器片を出土している。20号土坑の平面プランは不定形で、規模は長軸1.40m、短軸1.05m、最大深29cmである。土坑東側には径32cm、最大深20cmの円形と径25cm、最大深30cmの楕円形掘り方をそれぞれ確認した。遺構内からは土器片を出土している。19号土坑、20号土坑、円形掘り方、楕円形掘り方の前後関係は確認されていない。



第41図 19・20号土坑実測図

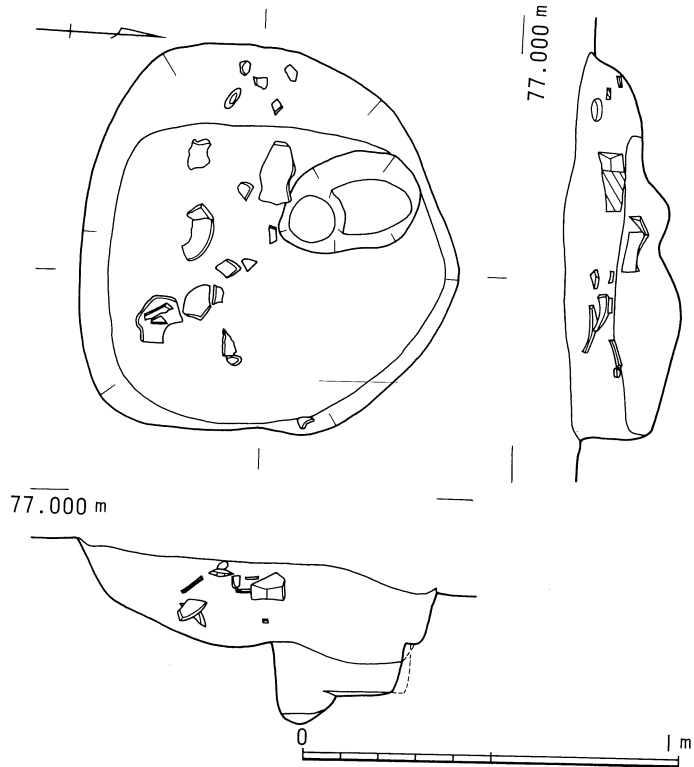
**出土遺物** 63~66、68、69は19号土坑、67、70は20号土坑からそれぞれ出土したものである。63は甕である。口縁部は外反し、胴部に沈線1条を施す。外面は刷毛目と篋磨き、内面は刷毛目を確認できる。口径は24.2cm、器高26.4cmである。64、65は甕、66~69は底部片である。70は凝灰岩の不明石器である。63~69は弥生前期後半から末に比定できる。



第42図 19・20号土坑出土遺物

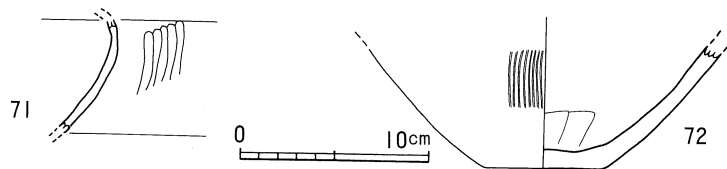
21号土坑

遺構は調査区の南東側に位置する。平面プランは円形で、規模は直径1.02m、最大深22cmである。立ち上がりは明瞭で、底部には凹凸がある。土坑内には長軸37cm、短軸24cm、最大深22cmの楕円形掘り方を確認した。土坑と掘り方の切り合い関係の有無は確認されなかった。遺構内からは礫と土器片を出土している。

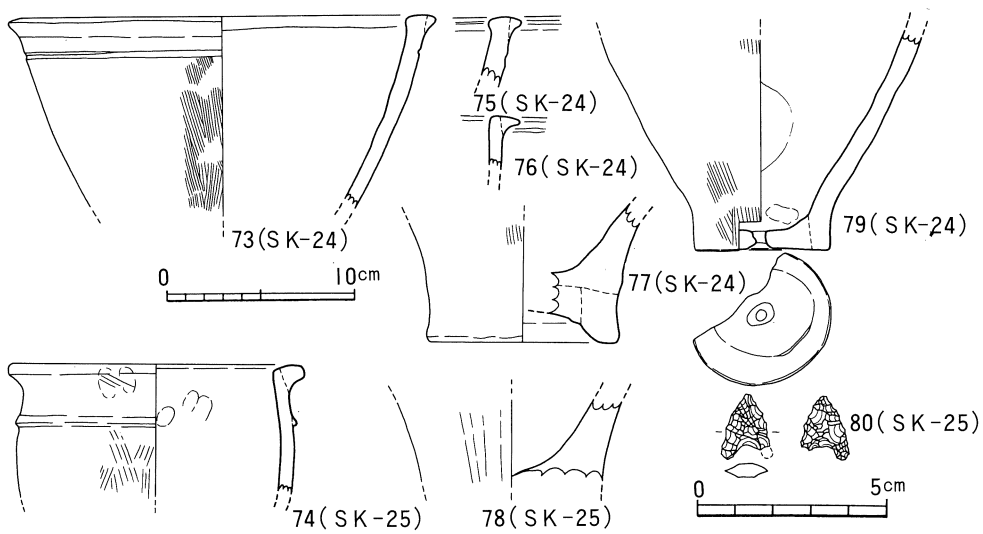


出土遺物

71は長頸壺の胴部である。外面には篋撫でを施す。72は底部片である。外面は刷毛目を上下方向に施す。内面底部は撫でを確認できる。遺物は弥生中期に比定できる。



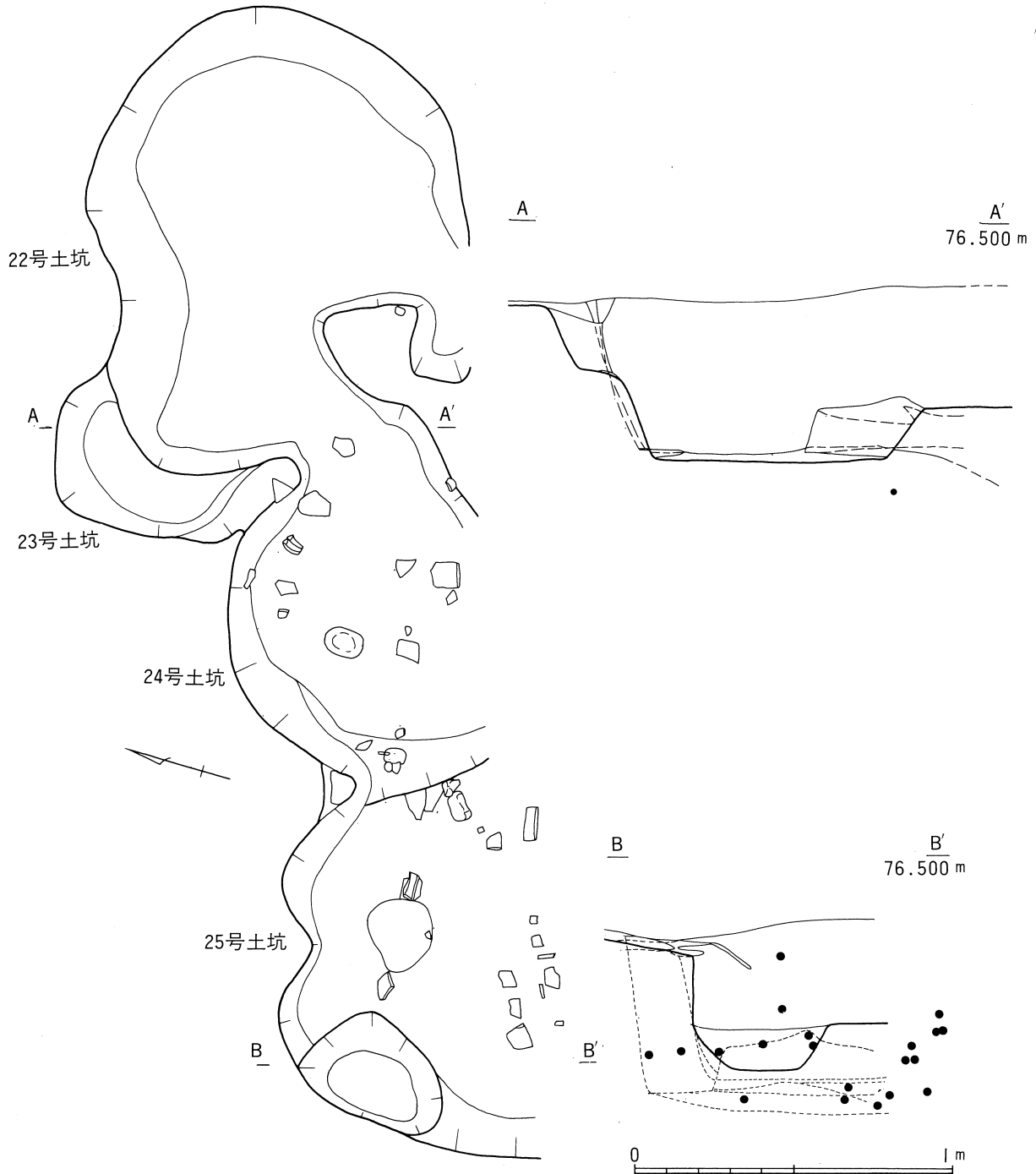
第44図 21号土坑出土遺物



第45図 24・25号土坑出土遺物

22～25号土坑 各遺構は調査区の南東端に位置すが、前後関係については確認されなかった。遺構全体の規模は長軸3.66m、短軸1.33m、最大深63cmである。

出土遺物 73、75～77、79は24号土坑、74、78、80は25号土坑から出土した。73～76は甕の口縁部である。73は口縁部に断面三角形の突帯を貼りつけ、胴部外面に沈線を施し、沈線直下から上下方向に刷毛目をもつ。74は口縁部と胴部に貼りつけ突帯を施す。口縁部と内面には指圧痕を確認できる。77、78は底部片で外面に刷毛目を確認できる。79は甕の底部である。底部中央に孔を施す。80は黒曜石の石鏃である。34号土坑の遺物は弥生前期後半から末に、25号土坑は中期初頭から前半にそれぞれ比定できる。



第46図 22～25号土坑実測図

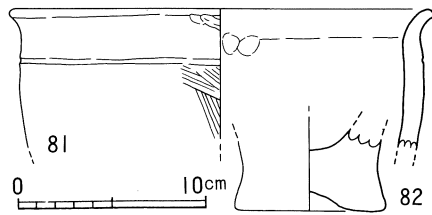


### 26号土坑

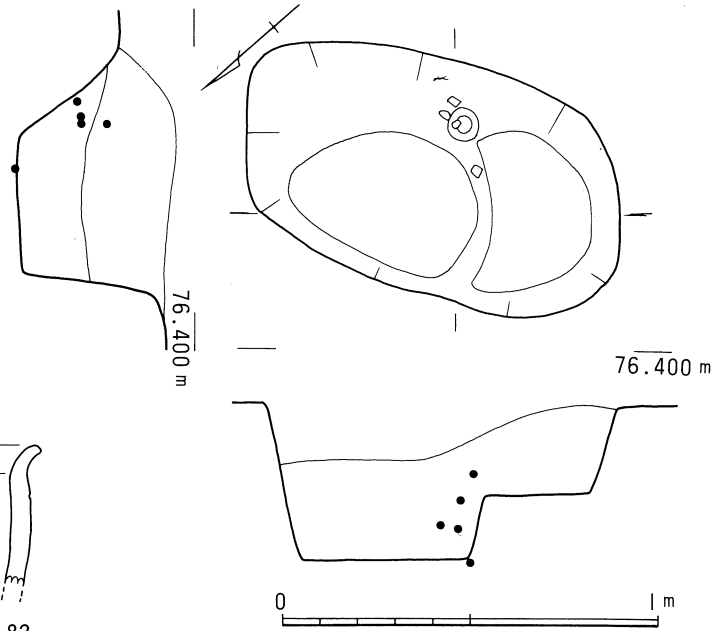
遺構は調査区の南東端に位置する。平面プランは楕円形で、規模は長軸1.01m、短軸82cm、最大深40cmである。立ち上がりは明瞭で、段堀である。内部より土器片を出土した。

### 出土遺物

81は甕で、外面に沈線と刷毛目を施す。82は底部片である。遺物は弥生前期後半から末に比定できる。



第47図 26号土坑出土遺物



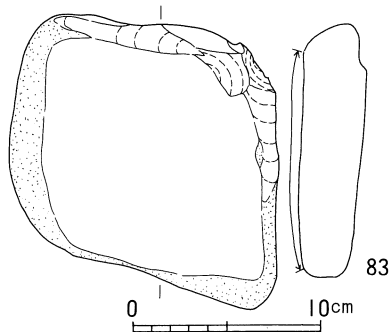
第48図 26号土坑実測図

### 27号土坑

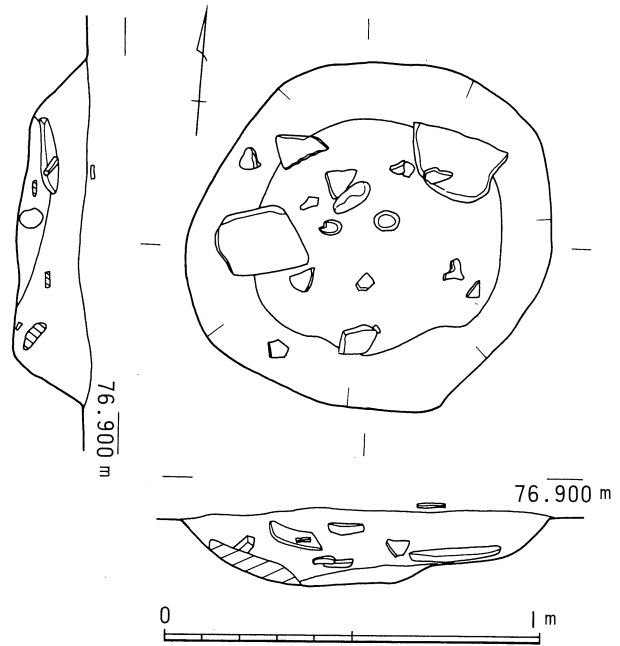
遺構は調査区の南東側に位置する。平面プランは円形で、規模は径95cm、最大深21cmである。立ち上がりは緩やかで、底部は凹凸がある。土坑内からは礫と土器片を出土したが、時期を特定するには至らなかった。

### 出土遺物

83は砂岩質の磨石である。



第49図 27号土坑出土遺物



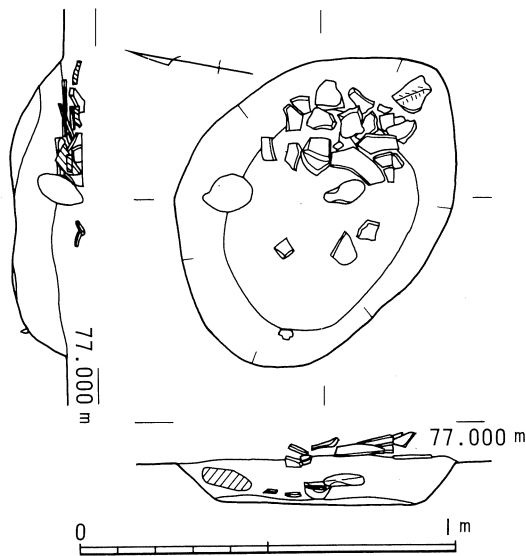
第50図 27号土坑実測図

### 28号土坑

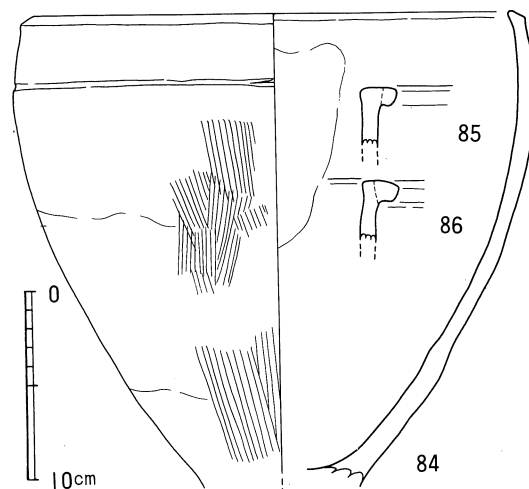
土坑は調査区の中央部に位置する。平面プランは楕円形で、遺構の規模は長軸93cm、短軸66cm、最大深14cmである。立ち上がりは緩やかで、底部は凹凸がある。土坑内からは礫の他に土器片が出土した。

### 出土遺物

84は甕である。口縁部は内反し、つまみあげた形をとる。胴部には沈線が1条あり、沈線下より斜め方向と上下方向に刷毛目を施す。口径は25.4cm。胴部最大径は27.6cmである。85、86は甕の口縁部で断面コの字状の貼りつけ突帯を施す。遺物は弥生前期後半から末に比定できる。

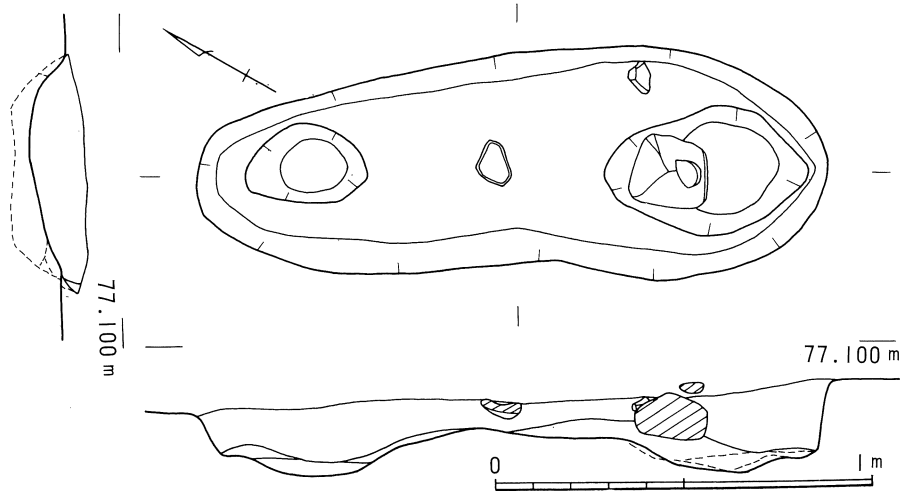


第51図 28号土坑実測図



第52図 28号土坑出土遺物

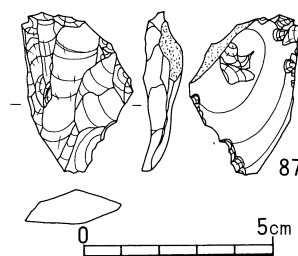
**29号土坑** 遺構は調査区の中央部に位置する。平面プランは長楕円形で、規模は長軸1.67m、短軸61cm、最大深20cmである。立ち上がりは緩やかで、両端に楕円状の掘り方を有する。楕円形の掘り方はそれぞれ長軸33cm、短軸20cmと長軸54cm、短軸29cm、最大深はともに6cmである。土坑内からは時期を特定できる遺物は出土しなかった。



第53図 29号土坑実測図

**出土遺物**

87は黒曜石のスクレイパーである。

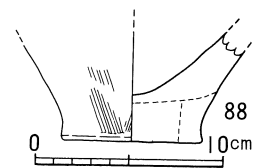


第54図 29号土坑出土遺物

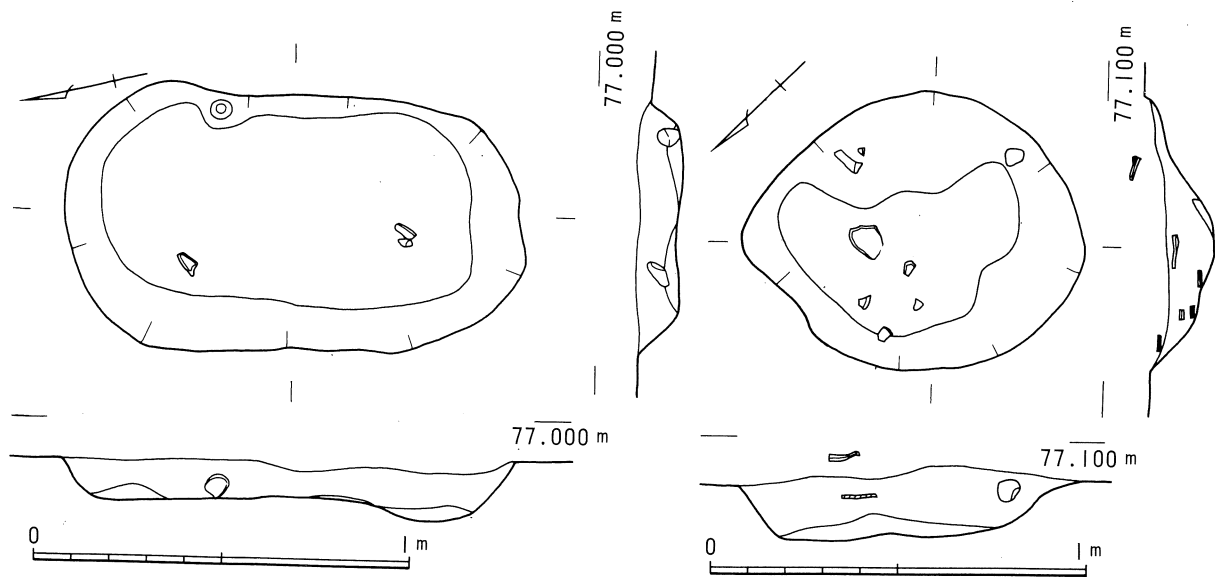
**30号土坑** 遺構は調査区の中央部に位置する。平面プランは楕円形で、規模は長軸1.22m、短軸68cm、最大深15cmである。立ち上がりは緩やかで、底部には凹凸がある。

**出土遺物** 88は底部片である。外面は斜め方向に刷毛目を施す。内面調整は不明である。底部は平底である。遺物は弥生前期後半から末に比定できる。

**31号土坑** 遺構は調査区の中央部に位置する。平面プランは楕円形で、規模は長軸90cm、短軸72cm、最大深18cmである。立ち上がりは緩やかで、底部は凹凸がある。土坑内からは時期を特定できる遺物は出土しなかった。

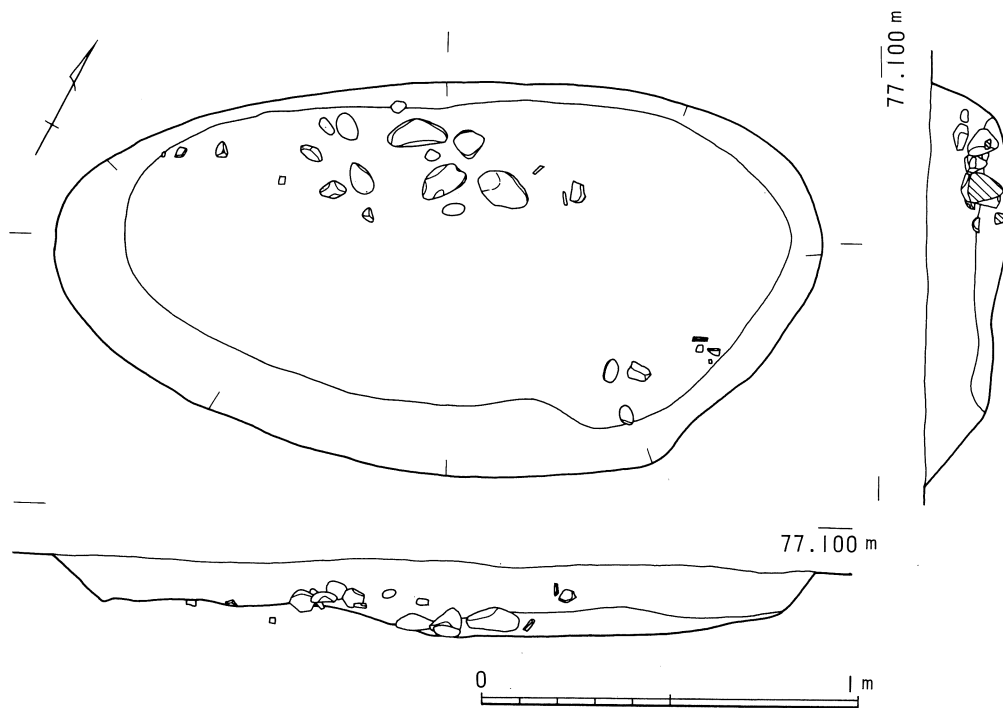


第55図 30号土坑出土遺物



第56図 30・31号土坑実測図

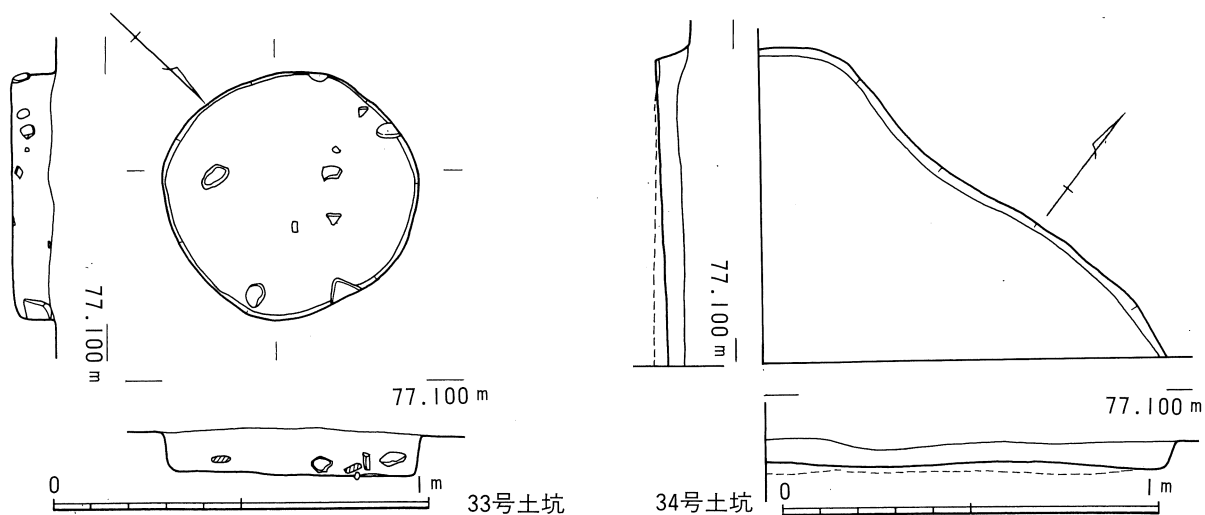
**32号土坑** 遺構は調査区の中央部に位置する。平面プランは長楕円形で、規模は長軸2.03m、短軸1.04m、最大深17cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は凹凸がある。土坑内からは礫の他に土器片を出土したが、時期を特定することはできなかった。



第57図 32号土坑実測図

**33号土坑** 遺構は調査区の中央部に位置する。平面プランは円形で、規模は径68cm、最大深12cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は平坦である。

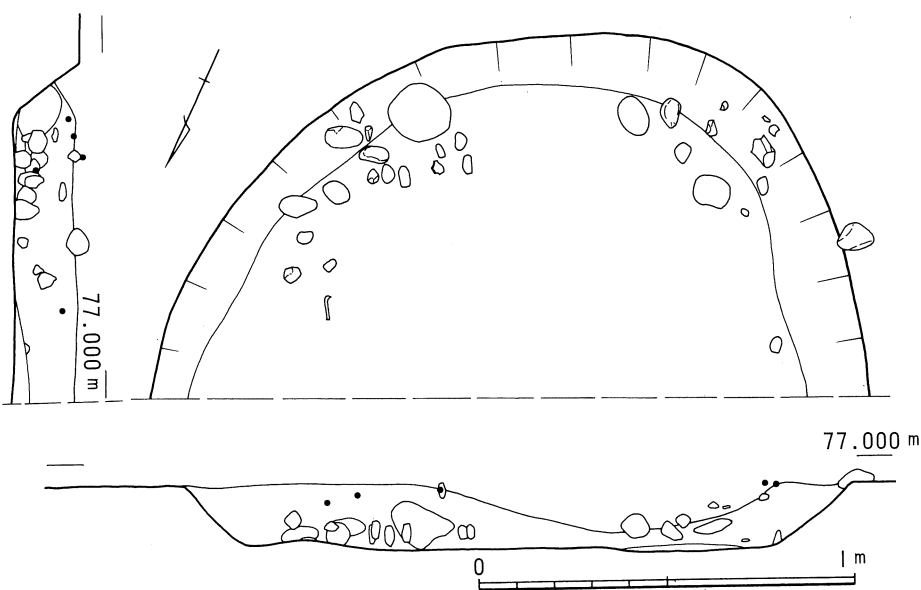
**34号土坑** 遺構は調査区の中央部に位置するが、建物基礎のため土坑の大部分を消失していた。確認できる規模は長軸1.35m、短軸68cm、最大深7cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は平坦である。



第58図 33・34号土坑実測図

35号土坑

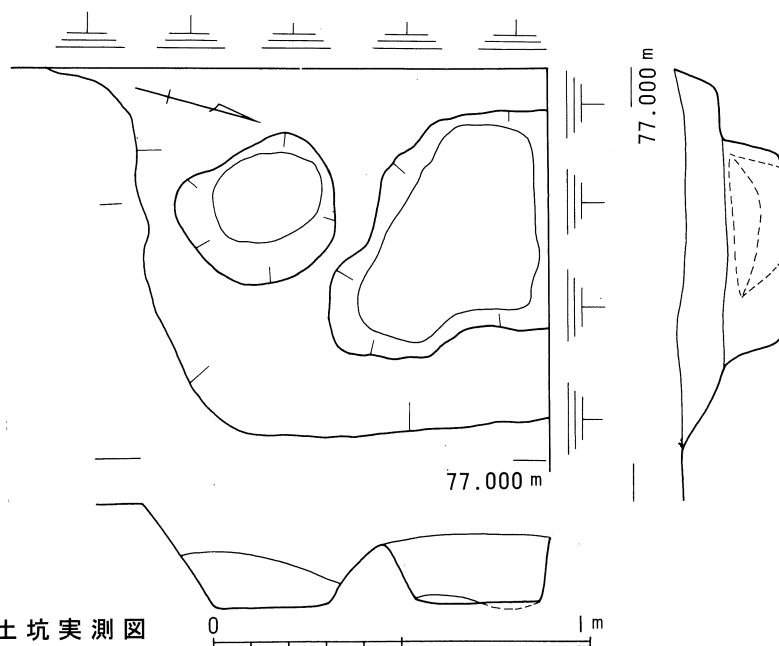
遺構は調査区の中央部に位置するが、建物基礎により遺構北半分を消失していた。確認できる規模は長軸1.91m、短軸96cm、最大深18cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は平坦である。土坑内からは礫、土器片が出土したが、時期を特定できる遺物は出土しなかった。



第59図 35号土坑実測図

36号土坑

遺構は調査区の中央部北西側に位置するが、建物基礎により遺構の大部分を消失していた。確認できる規模は東西92cm、南北1.38m、最大深12cmである。土坑内は二段堀になっており。直径40cm、最大深15cmの不定形掘り方と、長軸82cm、短軸62cm、最大深20cmの不定形掘り方を有する。土坑内から遺物は出土しなかった。



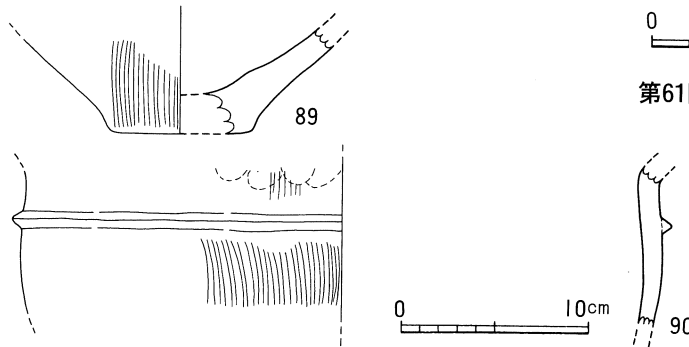
第60図 36号土坑実測図

**37号土坑**

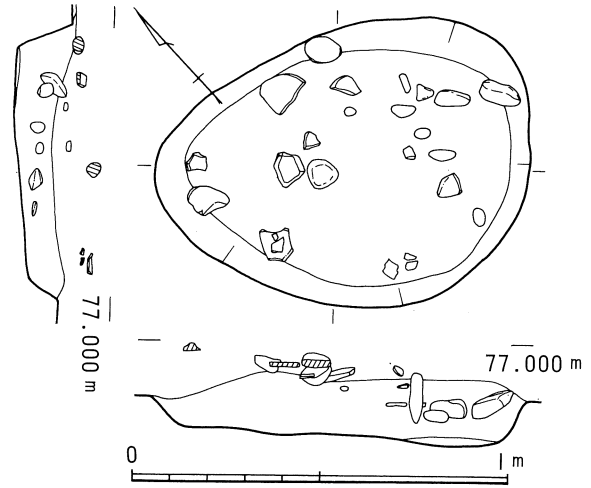
遺構は調査区の中央部に位置する平面プランは楕円形で、規模は長軸99cm、短軸78cm、最大深14cmである。掘り方は明瞭で、底部は平坦である。

**出土遺物**

89は壺の底部片である。外面は上下方向に刷毛目調整を施す。90は甕である。胴部に断面三角形の貼りつけ突帯を持つ。外面には刷毛目と指圧痕を有す。遺物は弥生前期後半から末に比定される。



第62図 37号土坑出土遺物



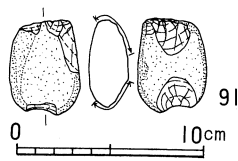
第61図 37号土坑実測図

**38号土坑**

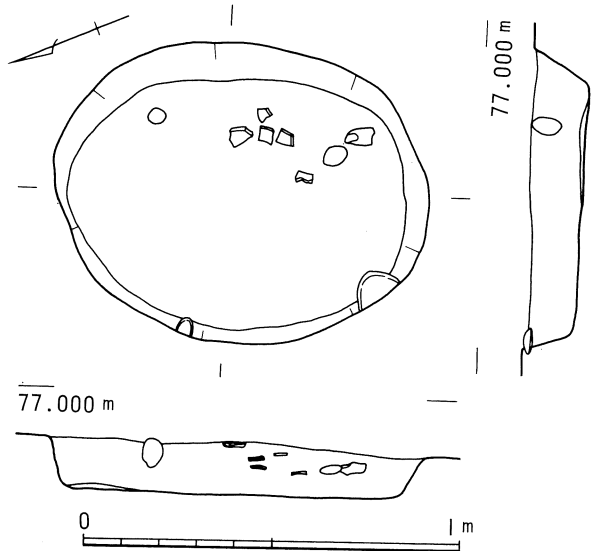
遺構は調査区の中央部に位置する。平面プランは楕円形で、規模は長軸1.02m、短軸79cm、最大深14cmである。掘り方は明瞭で、底部は平坦である。

**出土遺物**

91は砂岩質の石錘である。



第63図 38号土坑出土遺物



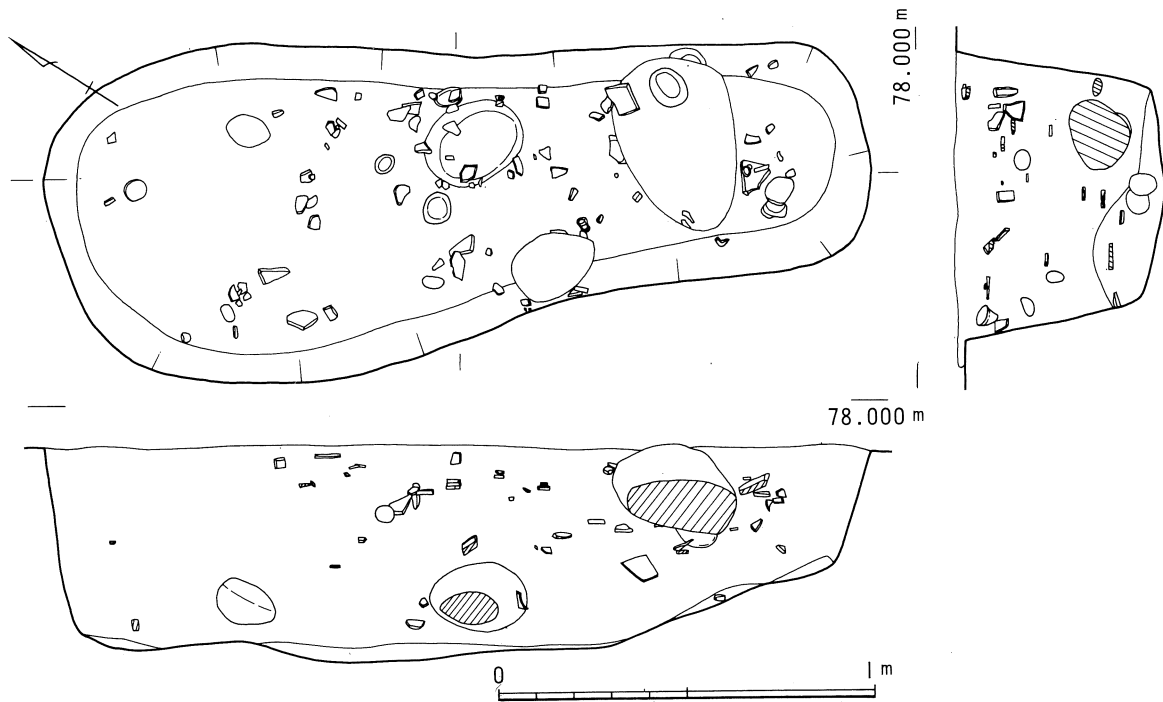
第64図 38号土坑実測図

**39号土坑**

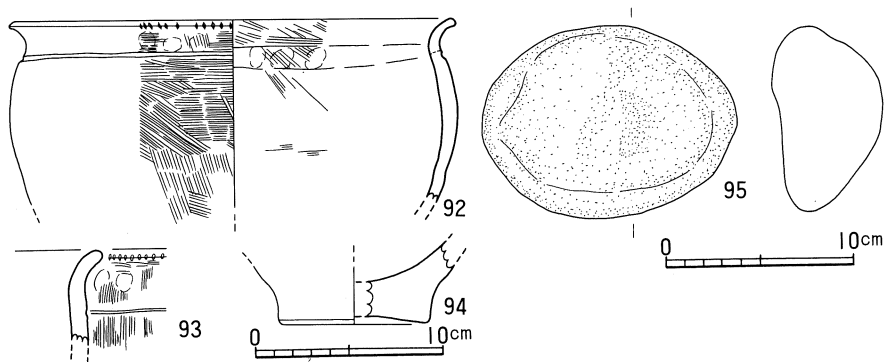
遺構は調査区の中央部に位置する。平面プランは長楕円形で、規模は長軸2.19m、短軸89cm、最大深54cmである。立ち上がりは明瞭である。土坑内からは礫と土器片が出土している。

**出土遺物**

92は甕である。口縁部は如意状を呈する。口唇部には刻目、胴部には沈線を施している。外面は刷毛目と指圧痕を確認できる。93は甕である。口縁部は外反し口唇部に刻目をもつ。胴部には沈線を施す。外面には刷毛目と指圧痕を確認できる。94は底部片である。95は砂岩質の磨石である。92～94は弥生前期後半から末に比定される。



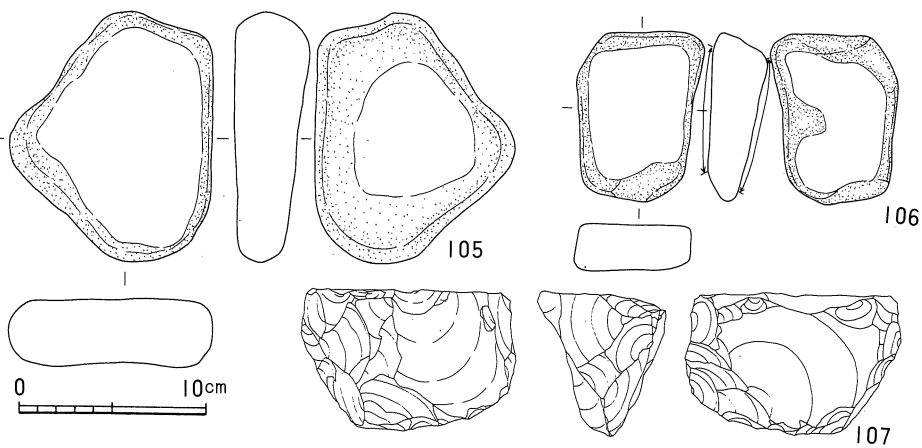
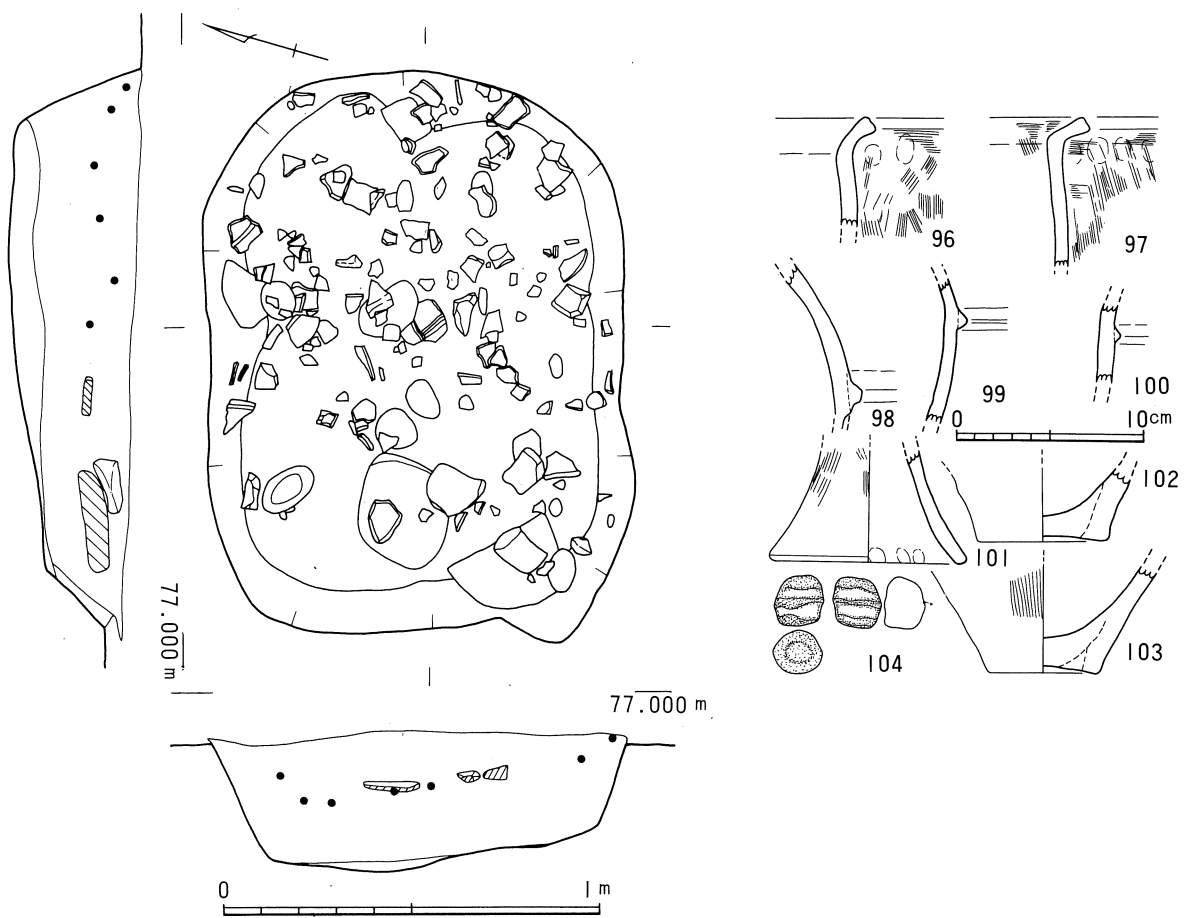
第65図 39号土坑実測図



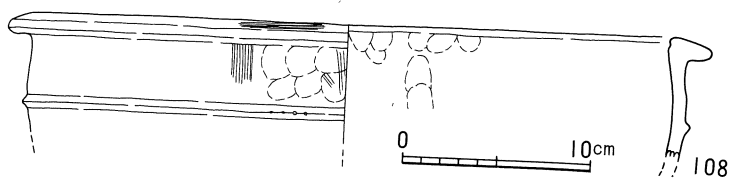
第66図 39号土坑出土遺物

**40号土坑** 遺構は調査区の中央部に位置する。平面プランは隅丸方形で、規模は長軸1.45m、短軸1.11m、最大深35cmである。立ち上がりは明瞭で、底部はほぼ平坦である。土坑内からは礫と土器片が出土した。

**出土遺物** 96、97は甕の口縁部である。口縁はくの字状である。外面は上下、斜め方向に刷毛目を施し、部分的に指圧痕が確認できる。内面は刷毛目を施す。98～100は壺の胴部である。ともに貼りつけ突帯を持つ。98は断面台形、99、100は断面三角形である。内外面ともに調整は不明である。101は器台である。外面は刷毛目、内面は底部に指圧痕を確認できる。102、103は底部片である。外面に僅かに刷毛目を確認できる。104は砂岩質の不明石器である。石の中央部に2条の凹部がある。105は砂岩質の石皿である。106は砂岩質の磨石である。107は黒曜石の礫器である。断面三角形で稜線を両面から調整する。96～103は弥生中期中頃に比定される。



第67图 40号土坑实测图及び出土遺物



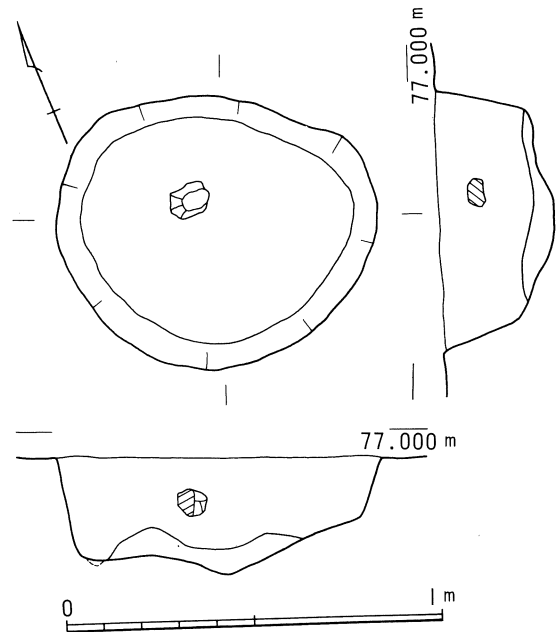
第68图 41号土坑出土遺物

41号土坑

遺構は調査区の中央部に位置する。平面プランはほぼ円形で、規模は長軸86cm、短軸72cm、最大深30cmである。

出土遺物

108は甕の口縁部である。口縁部と胴部に突帯をもつ。外面は刷毛目と指圧痕、内面は指圧痕を確認できる。遺物は弥生前期末に比定される。

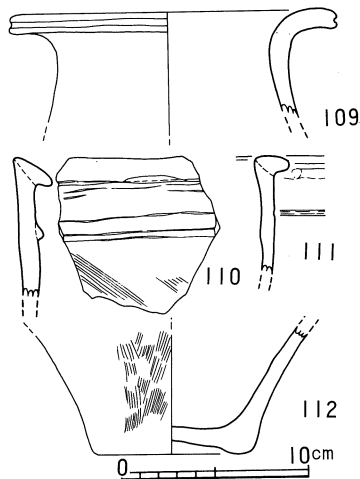


42号土坑

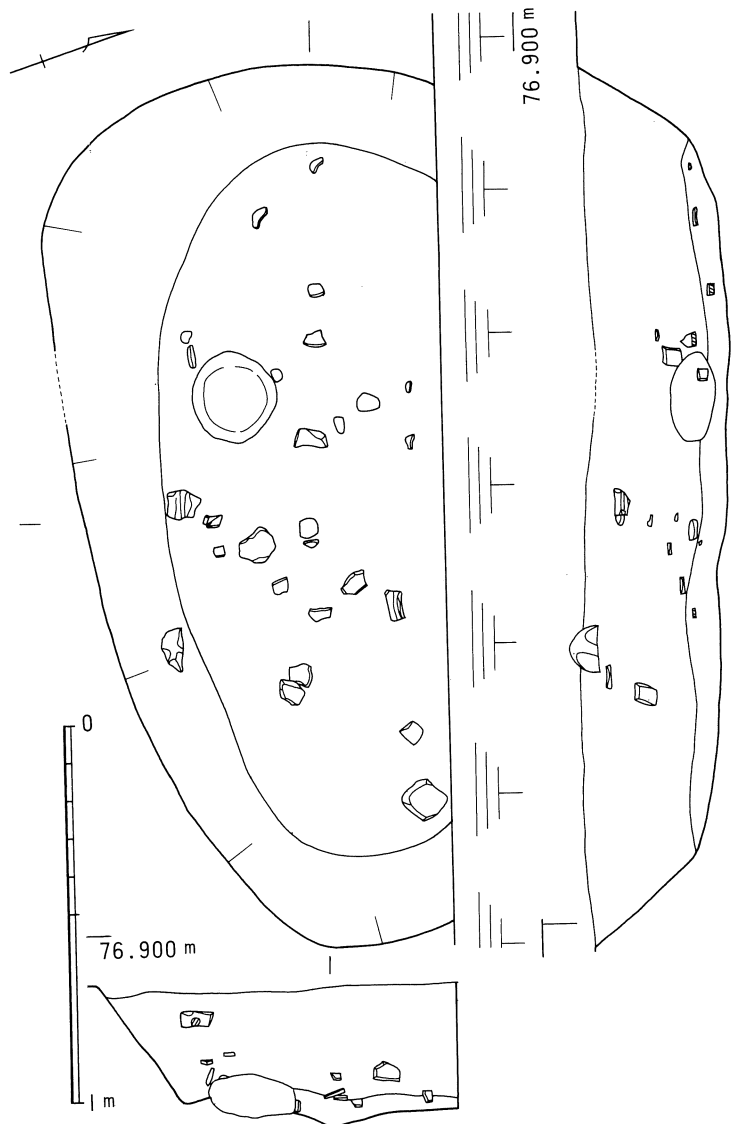
遺構は調査区の南端に位置するが、建物基礎のため遺構の北半分を消失していた。平面プランは楕円形で、確認できる規模は長軸2.11m、短軸1.06m、最大深35cmである。

出土遺物

109は壺である。口縁部は大きく外反する。内外面ともに調整は不明である。110、111は甕の口縁部である。111は口縁部に貼りつけ突帯を持つ。110の外面は刷毛目調整を施す。112は底部片である。外面は上下、斜め方向に刷毛目を施す。遺物は弥生前期後半から末に比定できる。



第70図 42号土坑出土遺物



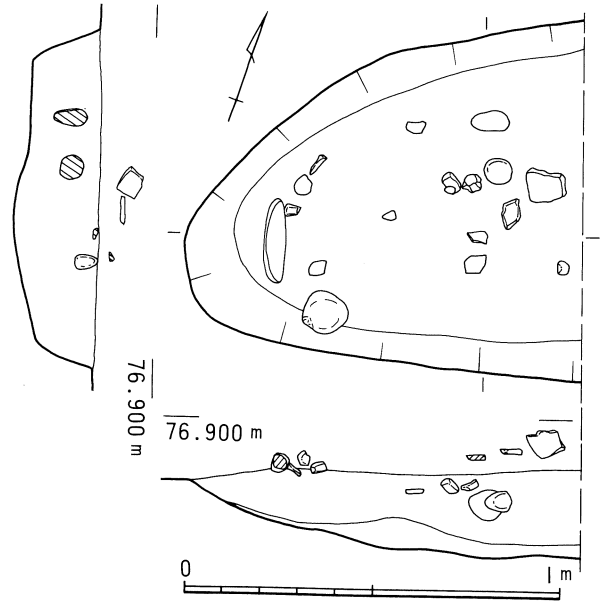
第71図 42号土坑実測図

第69図 41号土坑実測図

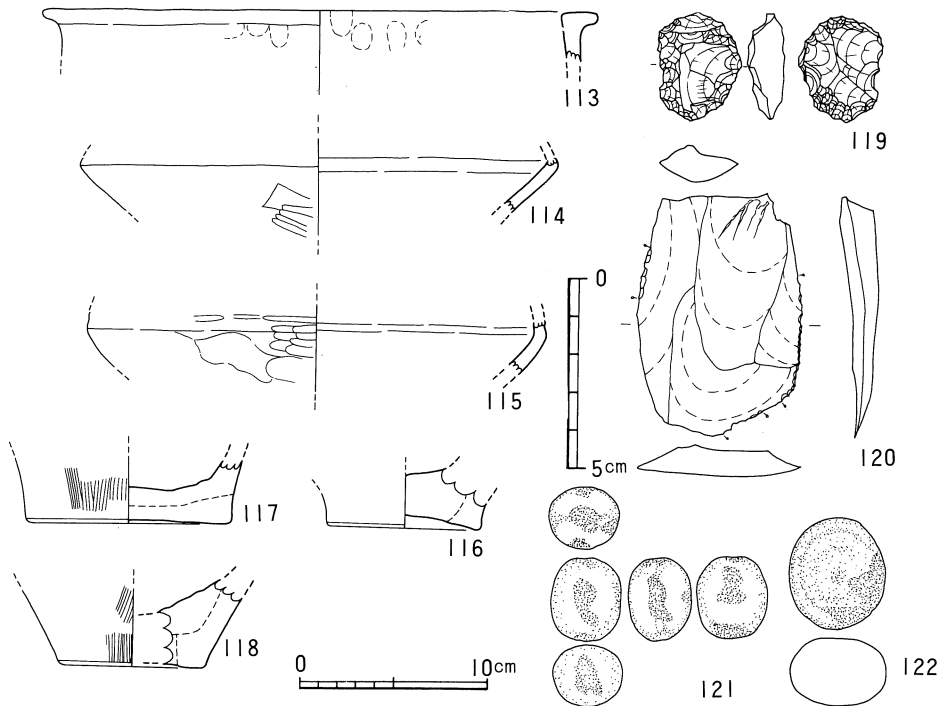


**43号土坑** 遺構は調査区の南側に位置すが、建物基礎のため東半分を消失していた。平面プランは楕円形で、確認できる規模は長軸1.11m、短軸94cm、最大深22cmである。

**出土遺物** 113は甕である。口縁部は逆L字に屈曲し、内外面に指圧痕を残す。114、115は浅鉢で外面は磨き調整を施す。116~118は底部片である。117、118は外面に刷毛目をもつ。119は黒曜石のスクレイパーである。120は流紋岩製の使用痕のある剥片である。121、122は砂岩質の敲石である。114、115は縄文晩期、他の遺物は弥生前期後半から末に比定される。



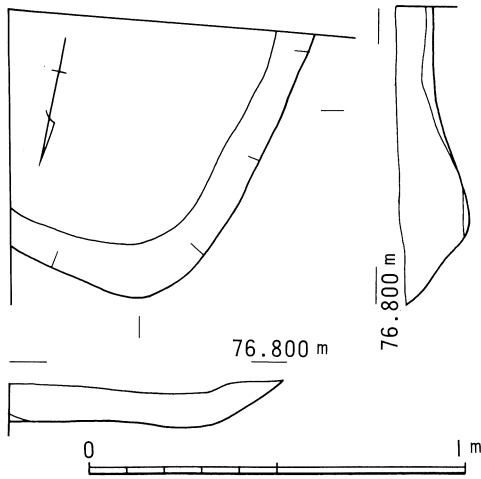
第72図 43号土坑実測図



第73図 43号土坑出土遺物

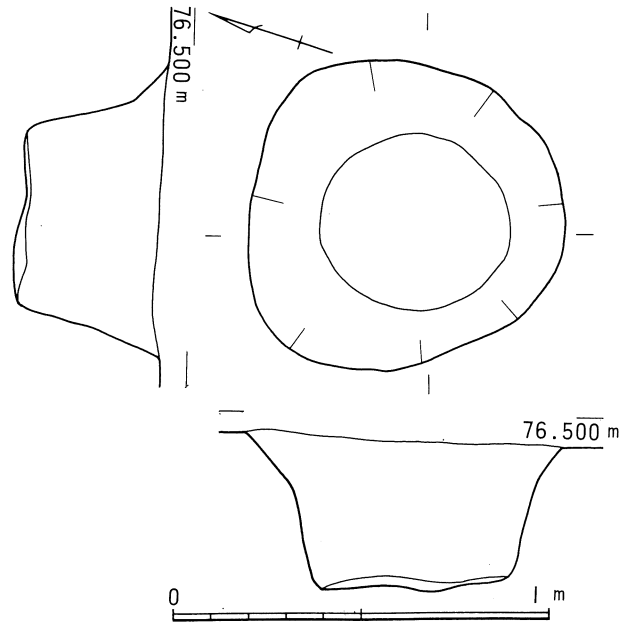
**44号土坑** 遺構は調査区の南側に位置するが、建物基礎のため遺構の大部分は消失していた。確認できる規模は南北60cm、東西82cm、最大深18cmである。

**45号土坑** 遺構は調査区の南側に位置する。平面プランは円形で、規模は径80cm、最大深42cmである。



第74図 44号土坑実測図

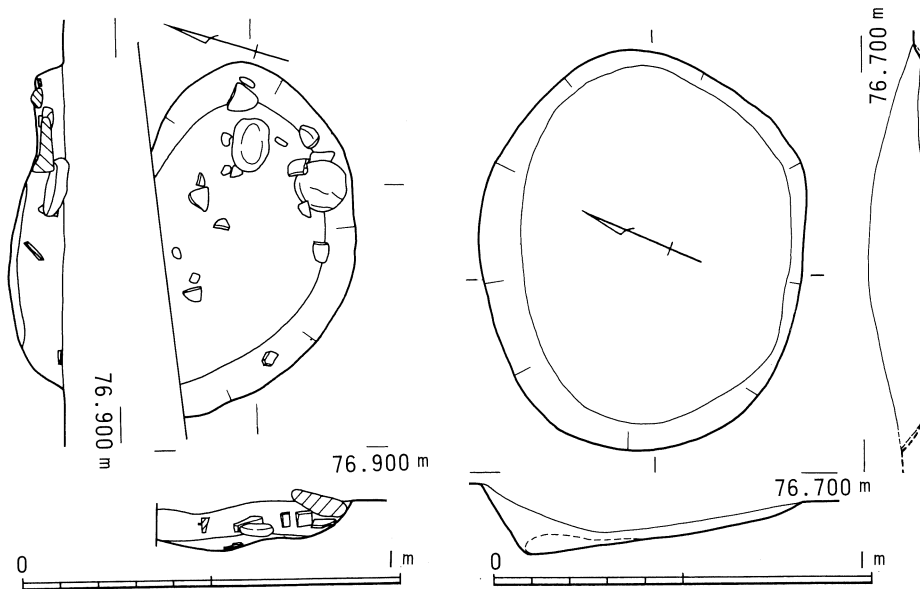
46号土坑 遺構は調査区の南側に位置するが、建物基礎のため遺構西側を消失している。平面プランは楕円形で、規模は長軸95cm、短軸59cm、最大深10cmである。



第75図 45号土坑実測図

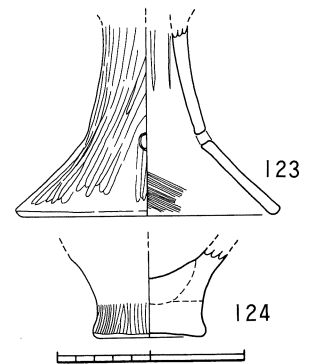
47号土坑 遺構は調査区の南西側に位置する。平面プランは楕円形で、規模は長軸1.08m、短軸86cm、最大深21cmである。

出土遺物 123は高坏である。外面は篋磨き、内面は刷毛目を施し、孔を有する。124は底部片である。123は弥生後期、124は弥生前期末から中期初頭にそれぞれ比定される。



第76図 46号土坑実測図

第77図 47号土坑実測図



第78図 47号土坑出土遺物

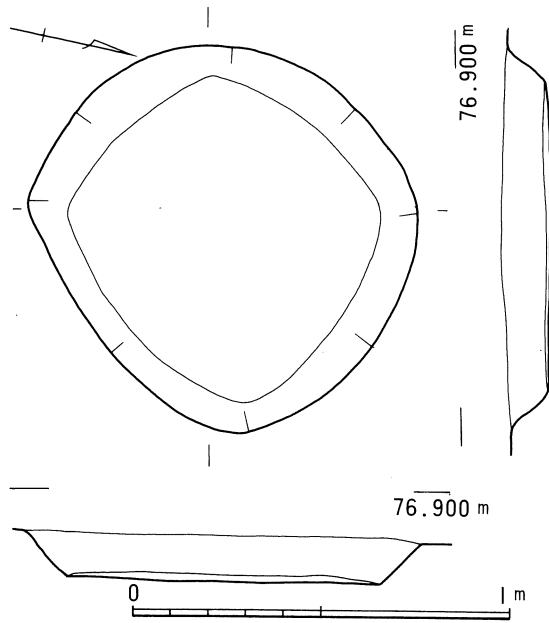
48号土坑 遺構は調査区の南西側に位置する。平面プランは円形で、規模は径1.01m、最大深22cmである。

49号土坑 遺構は調査区の南西側に位置すが、建物基礎のため遺構西側を消失していた。平面プランは円形で、規模は径1.20m、最大深12cmである。

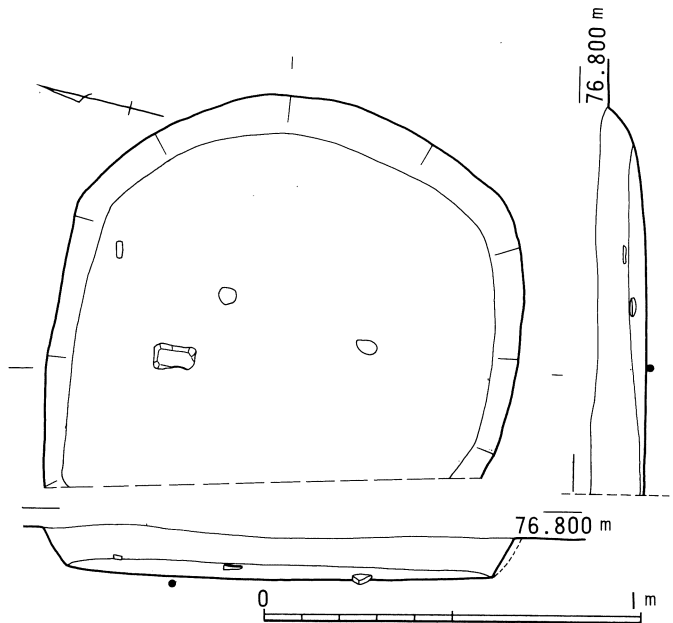
出土遺物 125は底部片である。内外面ともに調整は不明である。遺物は弥生前期後半から末に比定される。



第79図 49号土坑出土遺物



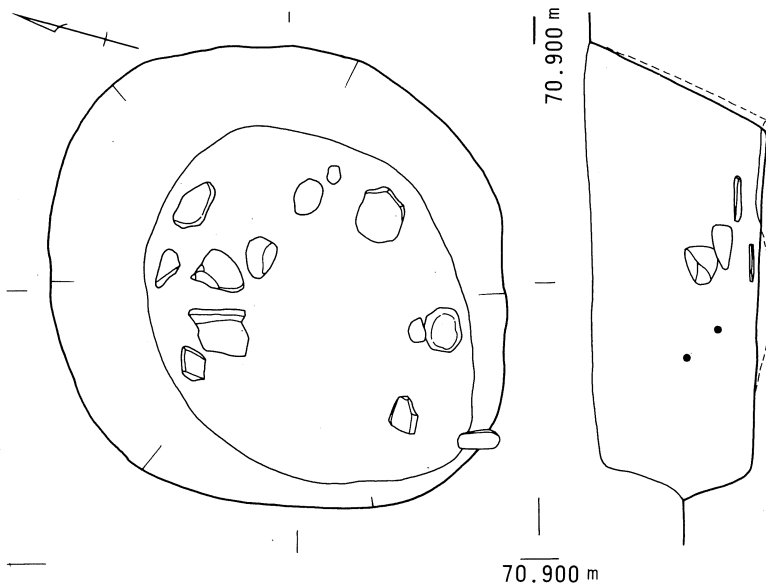
第80図 48号土坑実測図



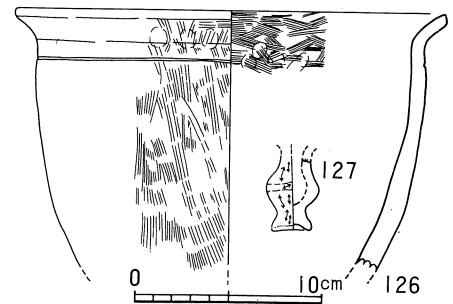
第81図 49号土坑実測図

**50号土坑** 遺構は調査区の南西側に位置する。平面プランは円形で、規模は径1.20m、最大深48cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は平坦である。土坑内からは礫と土器片を出土した。

**出土遺物** 126は甕である。口縁部は外反し、胴部には1条の沈線を施す。口縁部内外面には指圧痕と刷毛目が施される。胴部外面には上下、斜め方向に刷毛目を施す。127はミニチュア土器である。外面は撫で調整を施す。器高3.6cmである。126は弥生前期末に比定される。



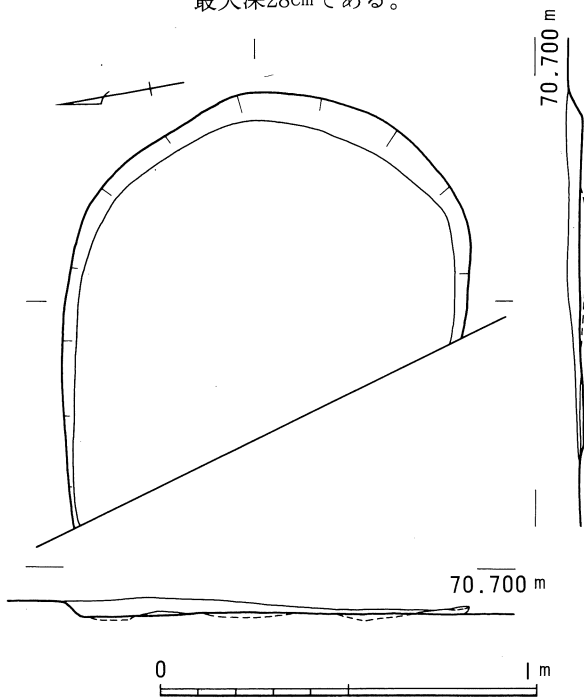
第82図 50号土坑実測図



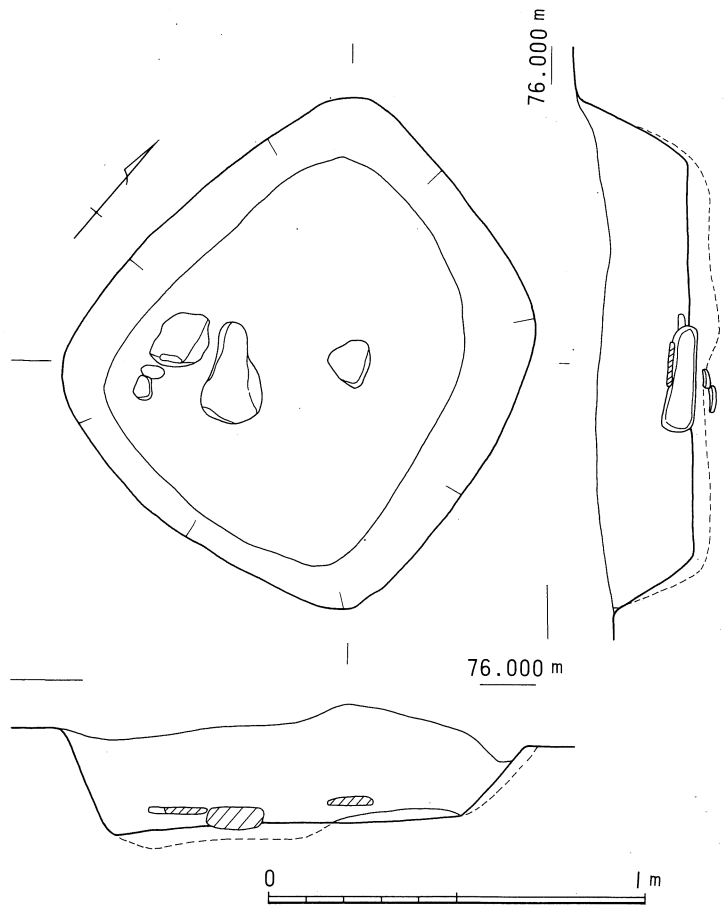
第83図 50号土坑出土遺物

51号土坑 遺構は調査区の南西側に位置すが、2号溝によって切られ、遺構西側を失っていた。平面プランは楕円形で、確認できる規模は長軸1.15m、短軸1.05m、最大深4cmである。

52号土坑 遺構は調査区の南西側に位置する。平面プランは隈丸方形で、規模は長軸1.20m、短軸1.08m、最大深28cmである。

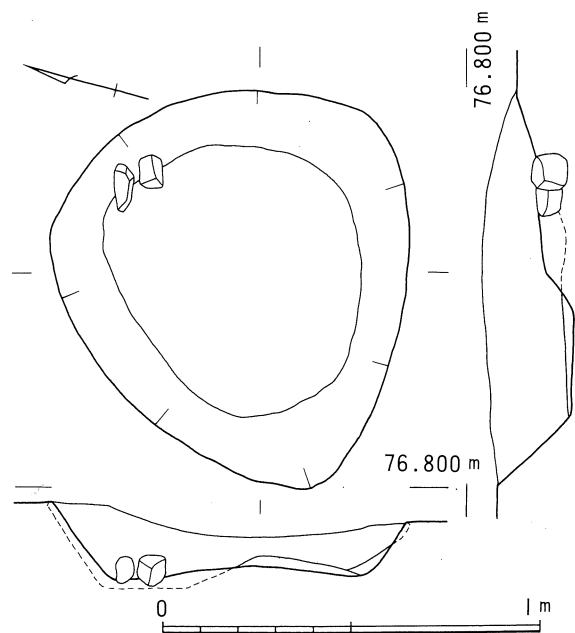


第84図 51号土坑実測図



第85図 52号土坑実測図

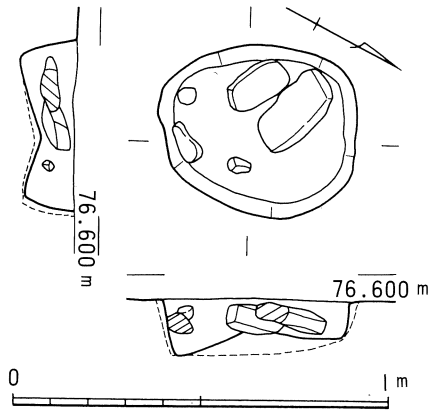
53号土坑 遺構は調査区の南西側に位置する。平面プランはいびつな円形で、規模は長軸1.03m、短軸95cm、最大深19cmである。土坑内からは礫が出土している。



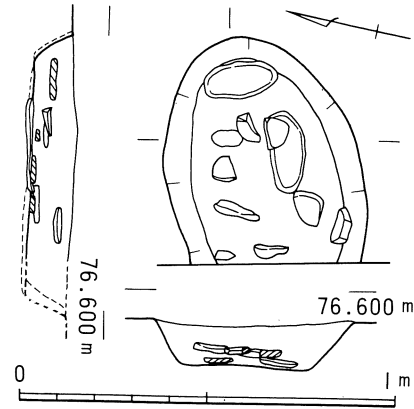
第86図 53号土坑実測図

54号土坑 遺構は調査区の南西端に位置する。平面プランは楕円形で、規模は長軸50cm、短軸42cm、最大深15cmである。

55号土坑 遺構は調査区の南西端に位置する。遺構西側は調査区外に続くと推定される。平面プランは楕円形で、確認できる規模は長軸62cm、短軸52cm、最大深11cmである。



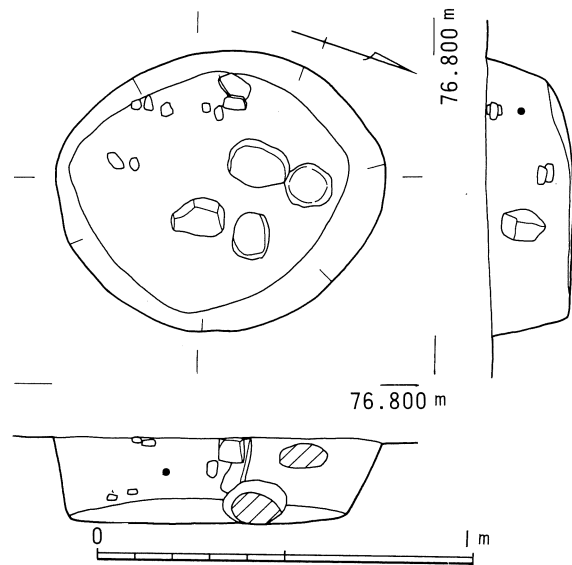
第87図 54号土坑実測図



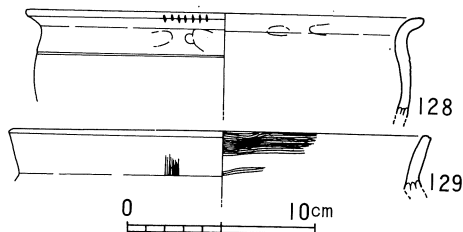
第88図 55号土坑実測図

56号土坑 遺構は調査区の西側に位置する。平面プランは楕円形で、規模は長軸86cm、短軸74cm、最大深22cmである。土坑内からは礫と土器片が出土した。

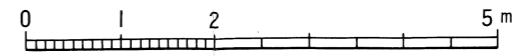
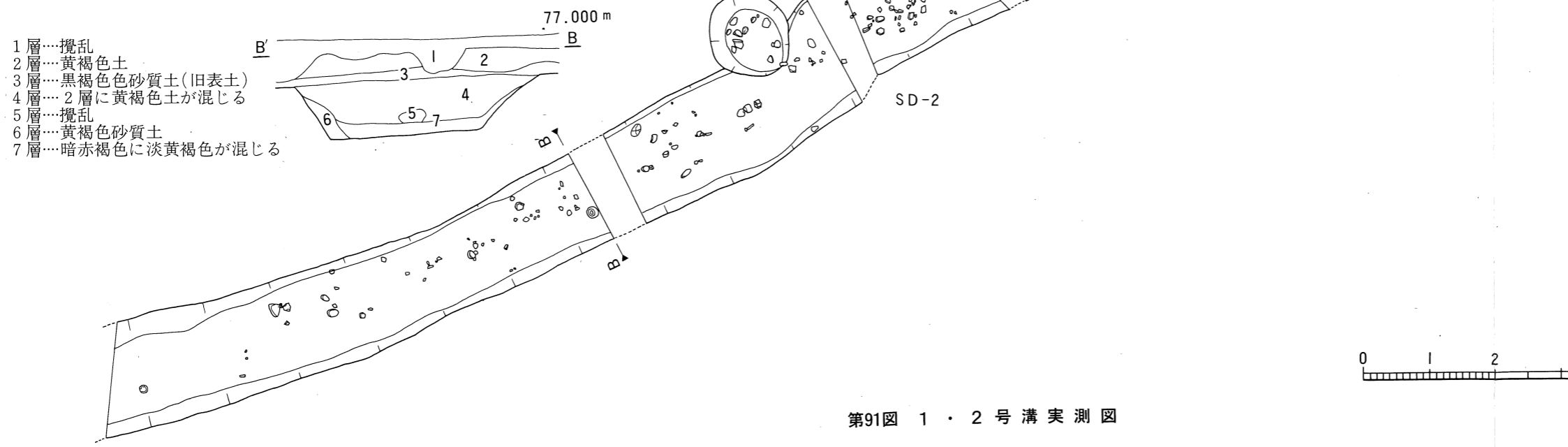
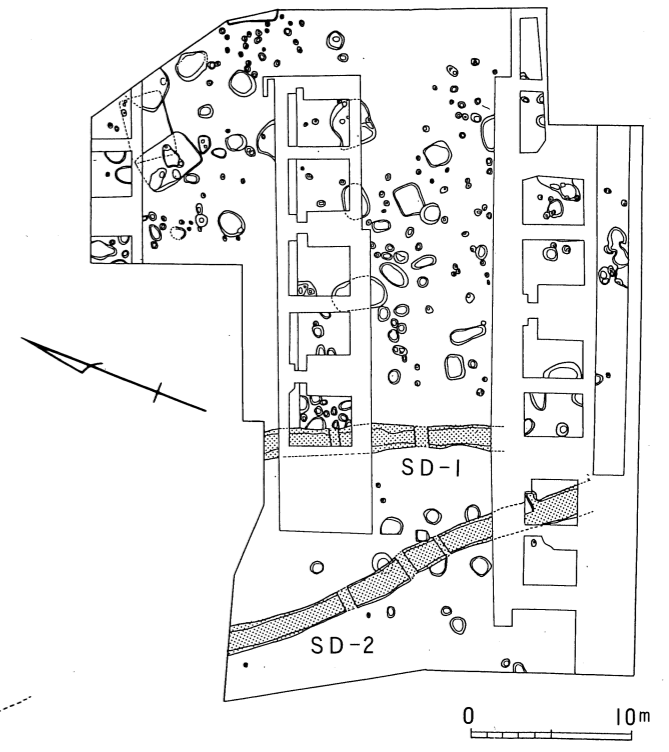
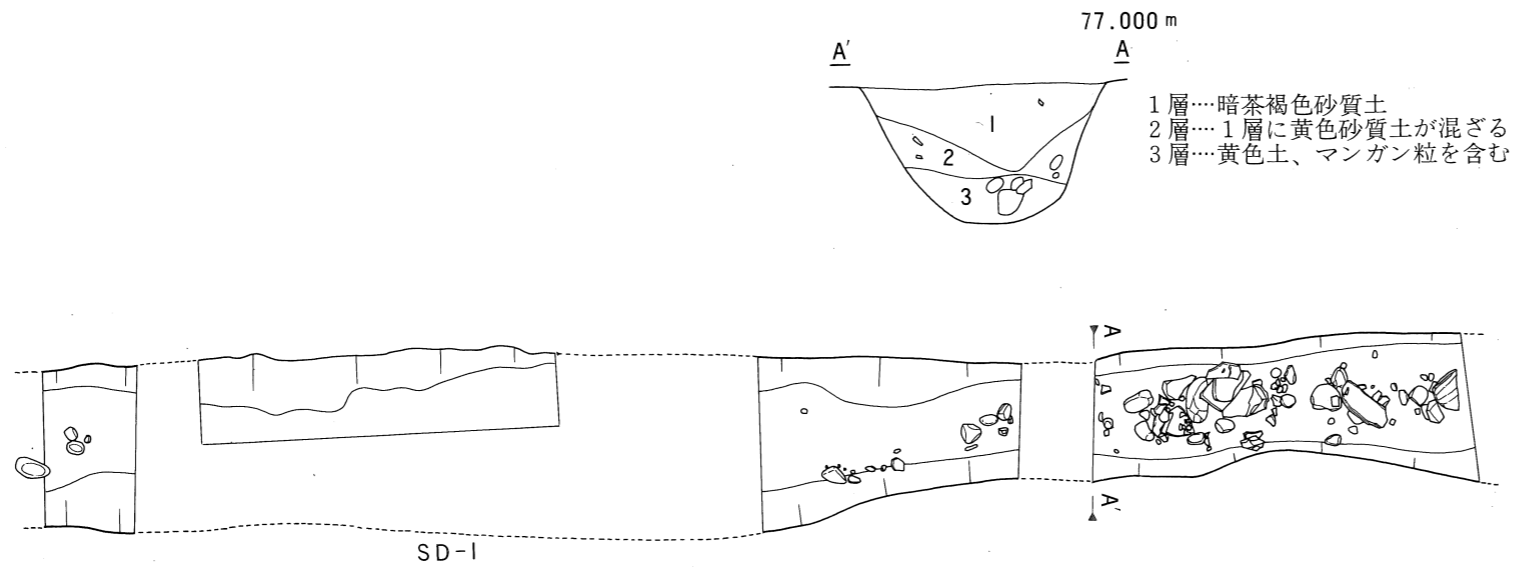
出土遺物 128は甕である。如意状の口縁部を持ち、口唇部には刻目を施す。胴部には沈線を施し、口縁部内外面には指圧痕が確認される。129は甕である。口縁部はくの字に屈曲し、内面は横方向に刷毛目を施す。128は弥生前期後半から末、129は弥生終末にそれぞれ比定できる。



第89図 56号土坑実測図



第90図 56号土坑出土遺物



第91図 1・2号溝実測図

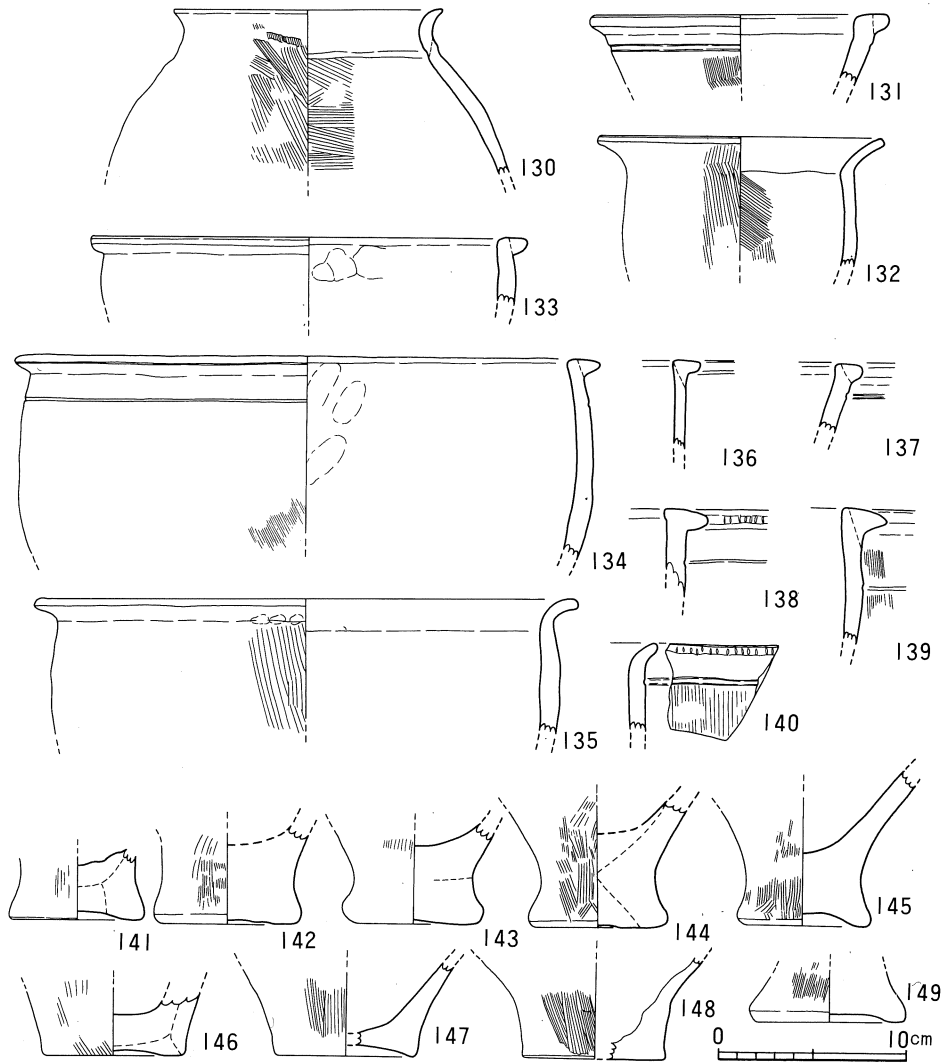
**溝遺構**

発掘区の西側において2条の溝（1号溝・2号溝）が南北方向に検出された。この2条の溝は東西に伸びる微高地の先端部あたりに掘られており、おそらく集落遺跡の西側を南北に区画する条溝と考えられる。いずれも溝はやや西側に振れほぼ直線的に掘削されているが、2号溝が1号溝よりその振れが大きく、発掘区の南側で近接して走る。

**1号溝**

(SD-1)

一部建物の基礎によって破壊されていたが全長約15mほどが確認された。溝幅は1.1~1.7m、深さ約55~80cmあり、断面U字型を呈する。この溝には、中層から下層にかけて多量の礫が堆積していた。おそらく、人為的に投棄したと考えられ、溝の南側ではこれら礫に混ざり石棺材と思われる板材が検出された。土器もこの礫群内（下層）と暗茶褐色砂質土（上層）から出土した。



第92図 1号溝出土遺物

## 出土遺物

土器が出土したが量は多くない。土器の大半は、弥生時代前期後半から末（131・133～149）に属するが下層から後期終末（130・132）の土器が礫層に混入して若干検出された。前期後半から末（一部中期初頭か）の土器には亀ノ甲タイプの甕（口縁部と底部）と如意形口縁の板付Ⅱ式タイプの甕（口縁部と底部）で、いずれも沈線のあるものとないものがある。終末の土器は単口縁壺と甕である。

## 2号溝 (SD-2)

1号溝の西側で全長約24mほどが検出された。溝の断面は1号溝と異なり、逆台形を呈する。規模は幅約1.3～1.7m、深さ40～50cmで1号溝より浅い。溝内の堆積状況についても、多量の礫は検出されず、黄褐色ないし黒褐色系統の砂質土が大きく2～3層に分かれ、レンズ状に堆積している。溝内から土器が比較的良好な状況で検出された。

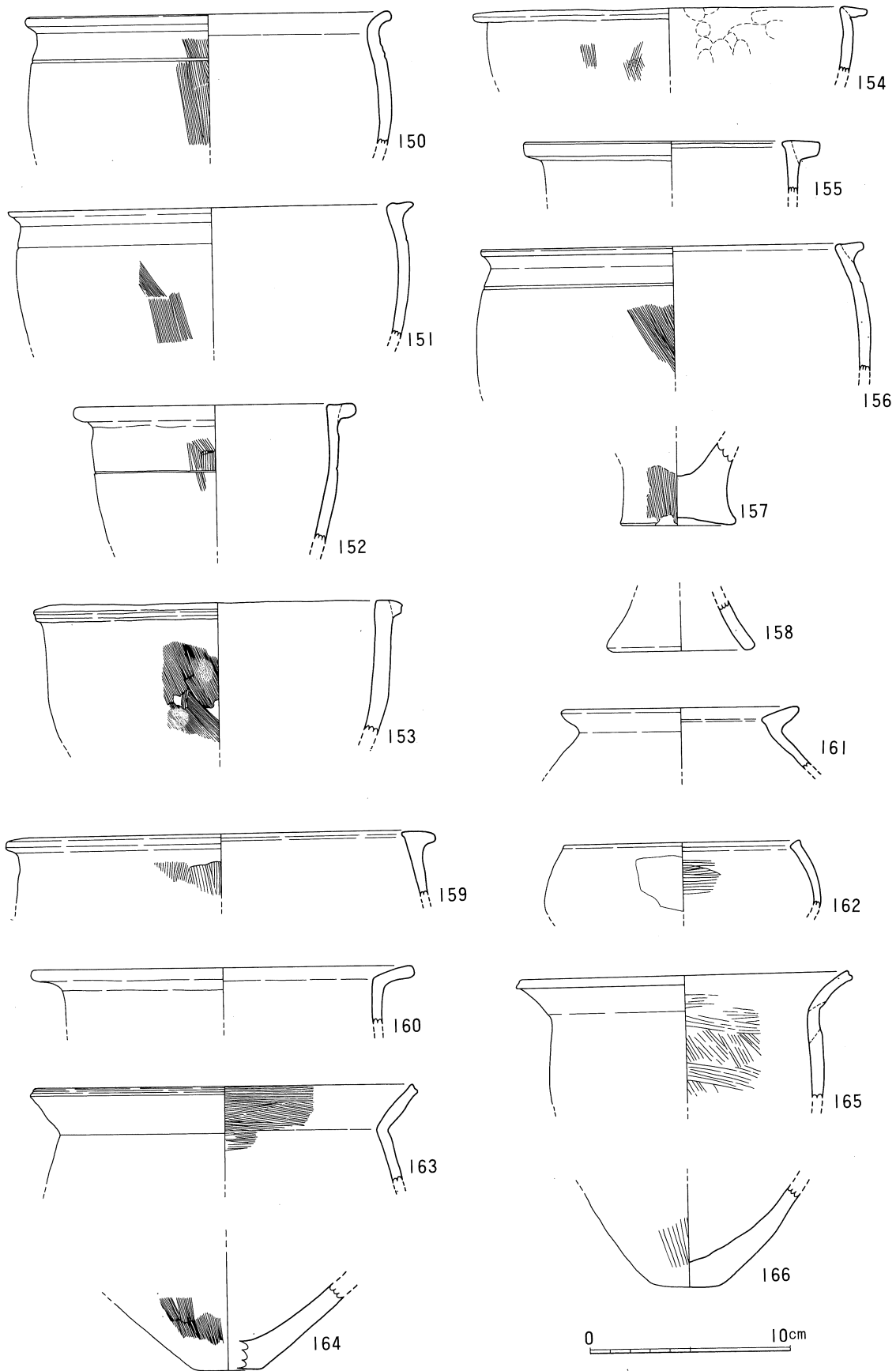
## 出土遺物

2号溝についても弥生時代前期後半～中期後半と後期後半～終末の土器が検出された。150は、如意形口縁の甕で口縁下に一条の沈線をめぐらす。前期後半から末。151～157は亀ノ甲タイプの甕で口縁部に断面三角形やコの字状の貼付突帯をめぐらし分厚い上げ底の底部をもつものである。口縁の形態により時期差が認められ、明確な平坦部が形成され、逆L字ないし三角形を呈する152・155・156などは中期初頭から前半であろう。158は中期初頭から前半の器台か。159～162は中期中頃から後半の土器である。159は鋤先口縁甕で、160は逆L字からくの字口縁甕移行段階の甕か。161は無頸壺、162は脚付きの鉢（高坏）と思われる。163～176は弥生時代後期後半～終末（庄内式併行段階か）の土器である。163～168・173は甕の破片である。底部は小さな平底（164・166）と丸底（168）があり、おそらく165のゆるやかに外反して立ち上がる口縁の甕は164・166タイプの平底と思われる後期後半、口縁部がすどく稜線をもちくの字に屈曲する163と167の甕及び頸部がしまり大きく外反して開く甕は、丸底と考えられ後期終末。とくに167の胴部外面の上半部には右下がりの荒い叩き目、下半分部にヘラケズリ痕がある。173は頸部に断面三角形の粘土帯に刻み目を施すもので、西新式系の甕である。169は脚台付きの鉢、170は丸底の小型壺、172は丸底の長頸壺、171は粘土の接合痕を残すやや荒い造りで、丸底風平底の鉢、174～176は高坏の坏部と脚部である。175は口径20cm、深さ6.7cmの高坏の坏部で、口縁は外反して大きく開き、坏底部と口縁部の比率は約1：1である。脚部はいずれも裾部がラッパ状に開くもので、174は内湾気味に開き2対の穿孔をもつ。

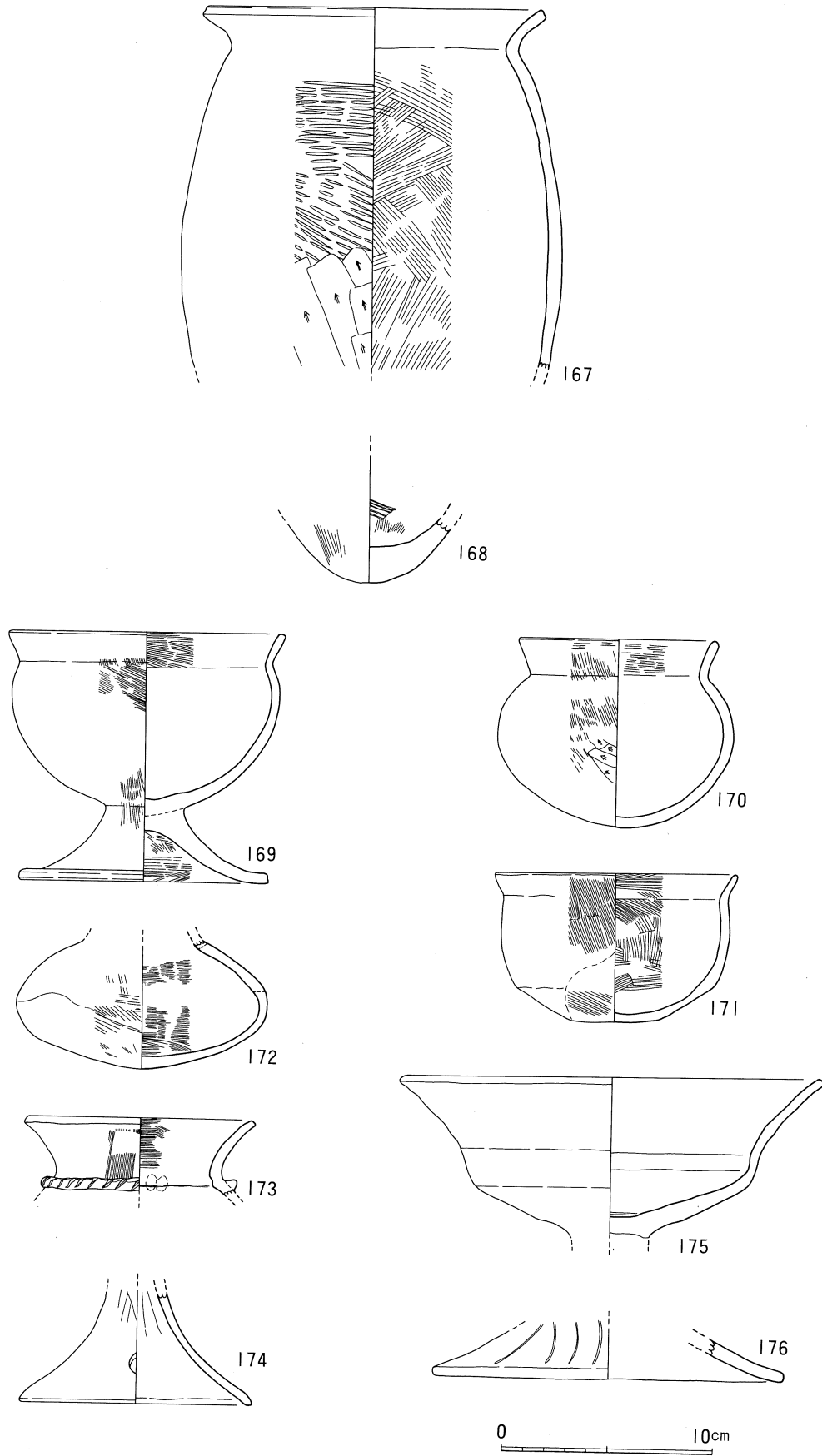
**包含層出土遺物** 表土層を除去する段階で多くの遺物が採集された。遺物には土器と石器があり、その大半は発掘調査で検出された遺構の時期に合致するものであるが、遺構は検出されなかったものの古墳時代前期（布留式併行）に属する土器も一部出土した。

177～185は板付Ⅱ式系の如意形口縁甕である。その内177～181・185には口縁下に一条の沈線をめぐらすタイプである。時期的には177～179・181～183・185が前期後半から末、180・184が中期初頭から前半であろうか。186・190・193・194は亀ノ甲式タイプの甕で、口唇部に刻みを施すものはないが断面三角形の小さな貼付突帯めぐらすもので、突帯下にさらに一条の三角突帯をつける（186・194）ものと、沈線（190）の折衷形のものがある。188～192は逆L字口縁及び鋤先口縁状を呈す甕であり、城ノ越式、須玖Ⅰ式併行の土器であり、中期前半（188・191）及び中頃（189・192）と思われる。197～200はいわゆる跳ね上げ口縁の甕である。199・200は逆L字口縁に近く、胴部は張らず底部へ移行するもので中期初頭から前半頃、197・198はくの字口縁に近く、胴部が大きく張るタイプと考えられ、中期後半から末（須玖Ⅱ式併行）であろう。195は口唇下部に刻み目を施し、口縁部にかかるい段をもつ板付Ⅱ式系の壺である。前期後半から末と考えられる。196は器台上半部を欠くが、おそらく中期初頭から中頃の鼓形を呈すると考えられる。201はいわゆる5の字状の二重口縁

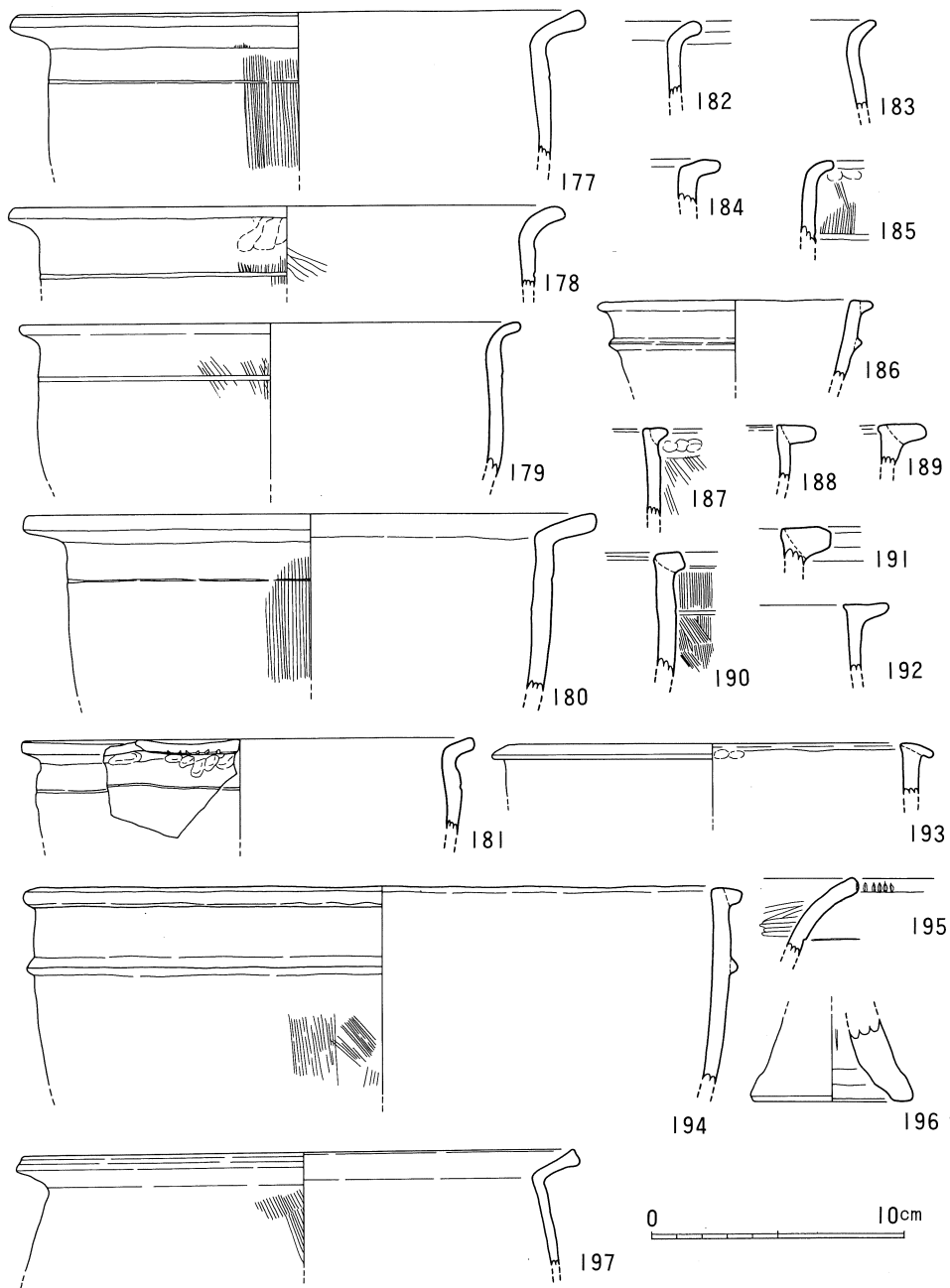




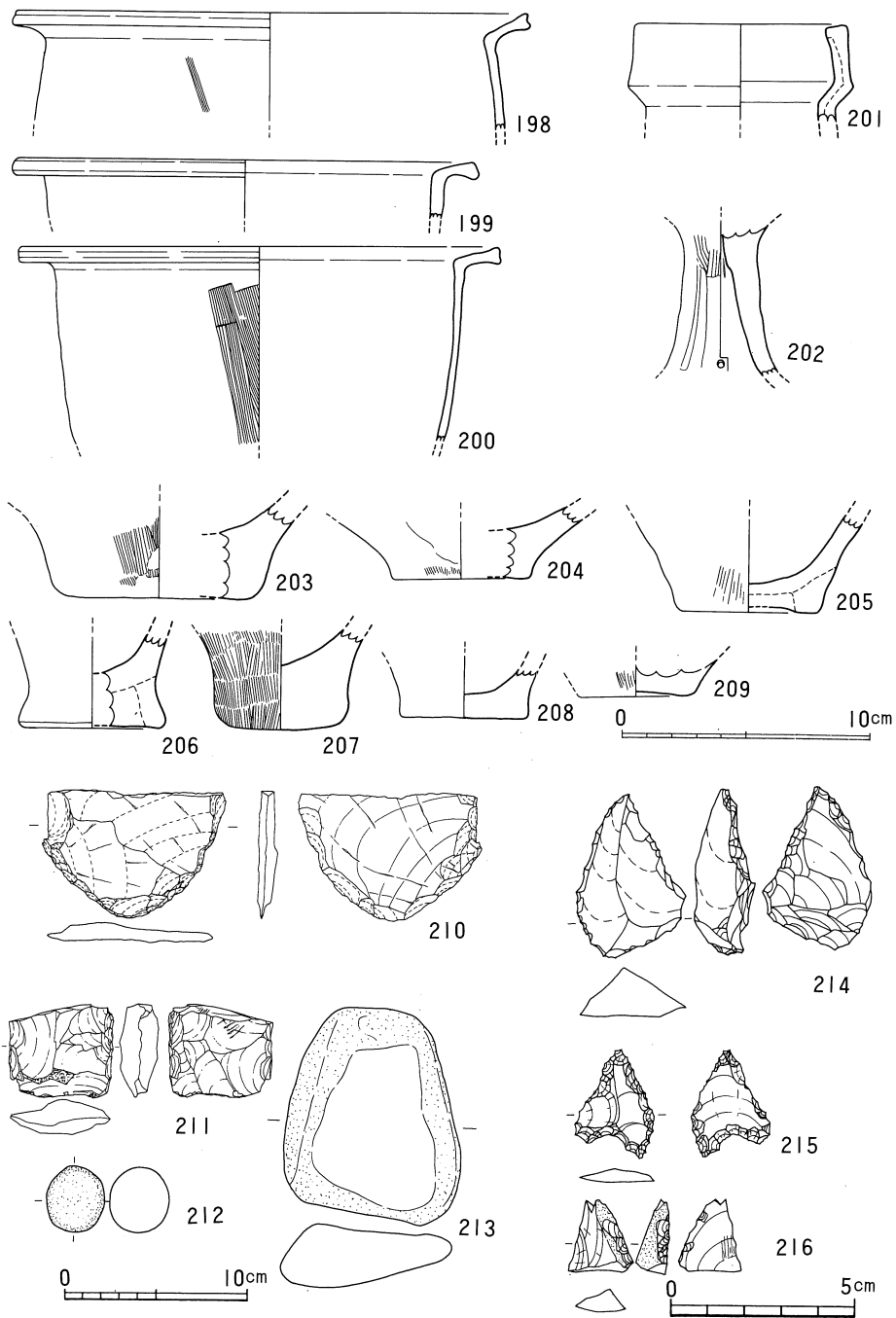
第93图 2号沟出土遗物 (1)



第94图 2号沟出土遗物 (2)



第95圖 包含層出土遺物 (1)



第96図 包含層出土遺物 (2)

壺であり、短い頸部にやや内傾して立上がる口縁に、丸底・球形胴をとるタイプと思われる。時期は古墳時代前半頃と考えられる。202は高坏の脚部で高い脚部を呈し、裾部にむかって大きくラッパ状に開くもので、脚柱部と裾部との変換点に焼成前の2対（4箇所）の穿孔をもっている。後期後半から終末であろう。203～209は壺と甕の底部である。

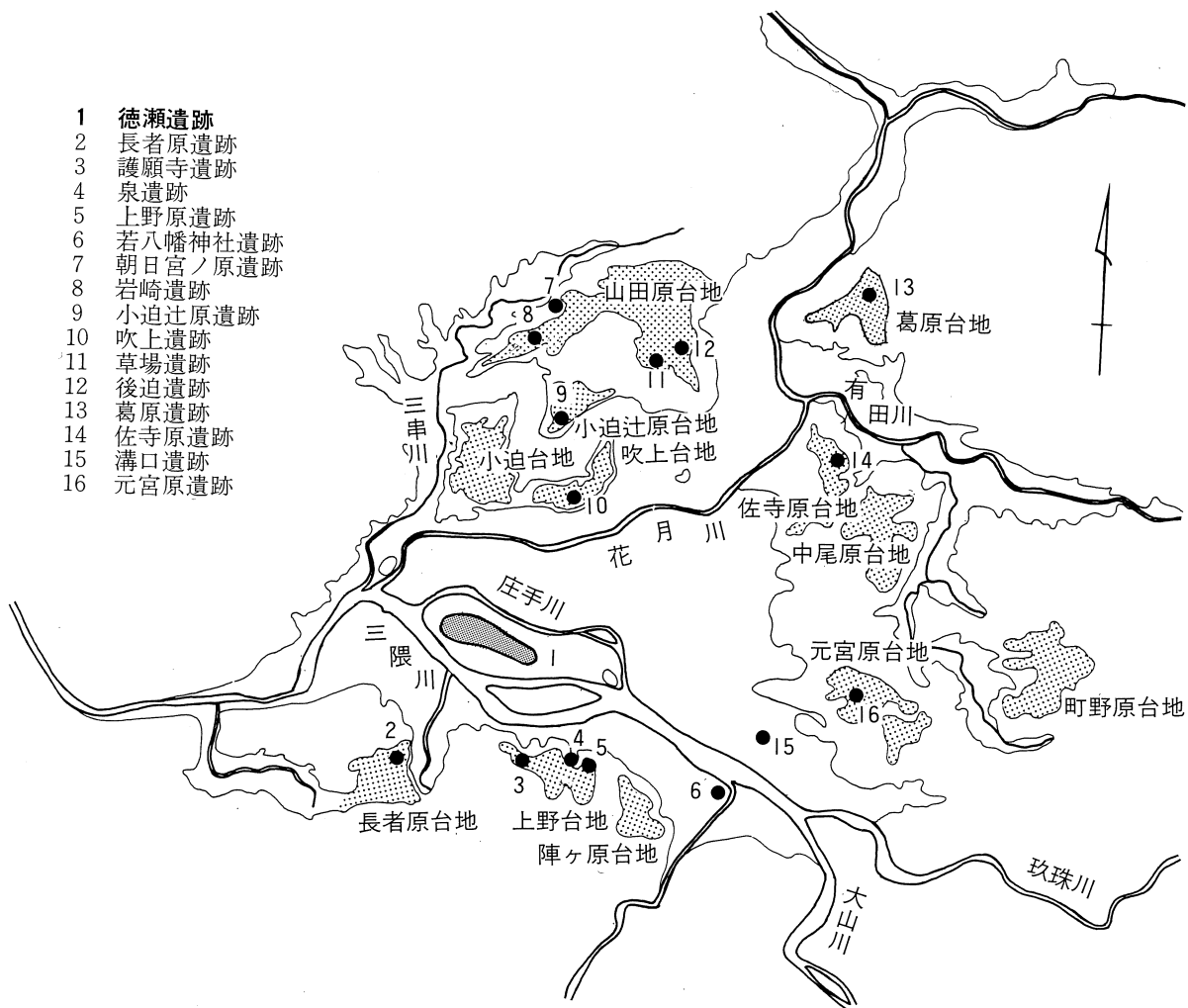
210～216は石器である。210は安山岩製の扁平打製石斧、211はサヌカイト製スクレイパー、212は安山岩製敲石、213は安山岩製石皿、214はチャート製尖頭状石器、215は黒曜石製石鏃、216は黒曜石製スクレイパーである。212・215は弥生時代、外は縄文時代に属すると考えられる。

## V. ま と め

徳瀬遺跡は、三隈川本流とその支流である庄手川に挟まれた標高約77mの微高地上に立地している。この微高地は、三隈川流域ではもっとも大規模な中州状の沖積地に位置しているが、沖積地の東方約1.5kmあたりから三隈川本流は二本の支流に分岐し、沖積地を二つに分断して挟みこんでいる自然環境は、まさに洪水などの自然災害を永年にわたり受けてきたことを物語っている。

今回、このように不安定な環境と想定できる徳瀬の微高地上の調査において、弥生時代前期後半から中期の住居跡や貯蔵穴、土坑、後期後半から終末の溝が検出された。また、平成5・6年度に行われた日田市教育委員会の調査でも県調査区と同様な時期の住居跡（ただし中期円形住居跡で時期が異なる）や貯蔵穴、後期終末から古墳初頭の住居跡や溝とともに古墳時代前期の方形周溝墓や石棺、土壙墓で構成される墓地が検出されている。

このように、徳瀬遺跡の成立からその変遷を見ていくには、県・市調査区を合せ検討しなくてはならないことは言うまでもない。しかし、市教育委員会調査区の報告書が刊行されてない段階であり、ここでは県調査区の調査を中心に整理することにする。とは言っても県調査区の性格を把握するためには、市調査区の情報はある程度わからないとならないので、その概略は市教育委員会の担当者に便宜を図っていただいた。



第97図 日田盆地の主要定着期遺跡分布図

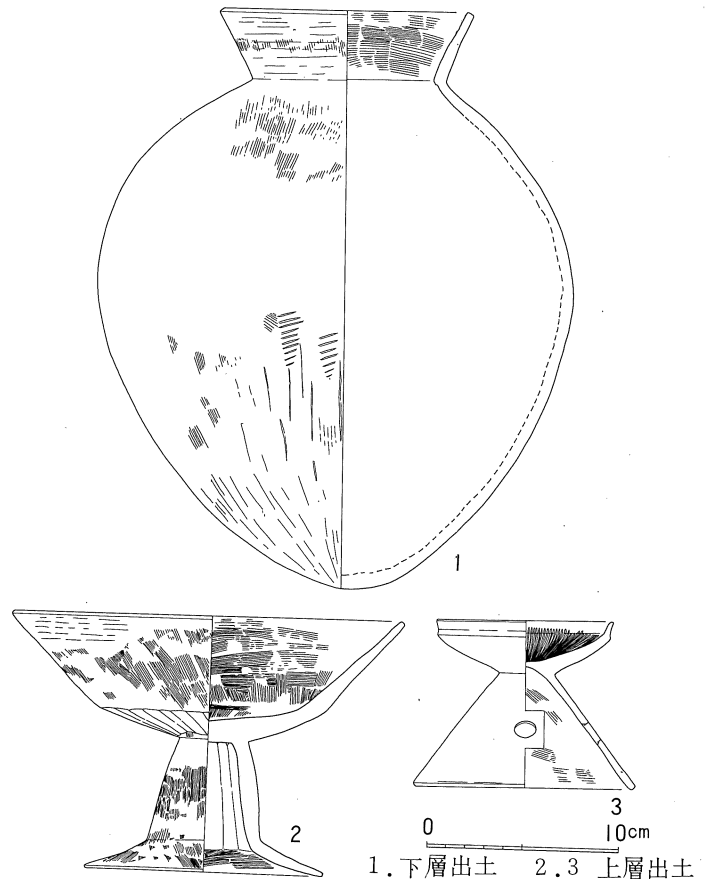
すでに述べたように、県・市の調査区において弥生時代前期から中期の遺構と後期後半から終末の遺構がある。そのなかで後期から終末は二条の溝のみであり、遺構群の大半は前期後半・末から中期前半の住居跡と貯蔵穴である。とくに貯蔵穴及び性格不明の土坑群は数基から数十基を単位として数群にグループングが可能で、しかも広範囲に分布しておりある程度安定した生活状況が観取された。

従来、日田盆地の弥生時代開始から定着期の集落は、第97図に示すように標高120~170m、比高40~50mほどの台地上にで発見される遺跡が大半であり、日田盆地の北部、花月川及び二串川流域の吹上台地、小迫辻原台地、山田原台地などに遺跡が集中して発見され、調査事例も多い。とくに、注目される遺跡として東西800m、南北200mの吹上台地に所在

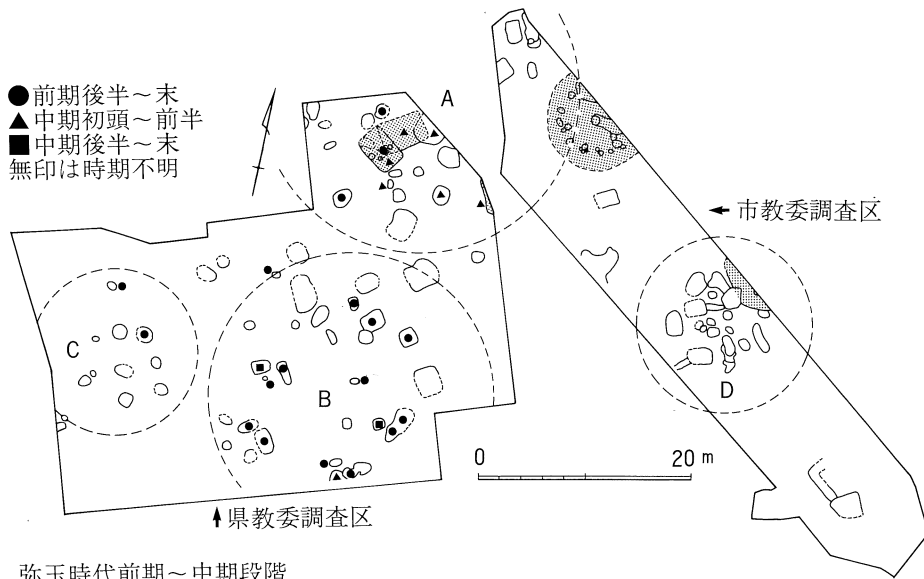
する吹上遺跡は、弥生時代前期後半から後期終末にかけての拠点型の大規模集落遺跡と考えられ、住居跡とともに貯蔵穴や墓地の形成が見られる。なかでも、中期中頃から後半の木棺墓と甕棺墓から細形銅剣や把頭飾さらには貝輪を装着した人骨などが検出され、日田盆地においても魏志倭人伝に記述されている一つの国や王の存在を彷彿させる発見となった。生活遺物も膨大な量の石庖丁や大型蛤刃石斧、扁平片刃石斧、柱状片刃石斧などの大陸系磨製石器が採集及び検出されている。さらに、その外の台地についても次々と新たな遺構の発見が相次ぎ、継続型、廃絶型などの集落類型がおぼろげながら明らかになろうとしている。このように、台地上における農耕集落の開始から定着、そして発展段階の遺跡の情報は十分とは言えないが比較的多いのである。

一方こうした台地の遺跡に比べ、低地すなわち低位段丘や沖積地に分布する周知の遺跡は少なく本地方の集落形成を分析するのに大きなネックとなっていた。このことは、おそらく盆地内の沖積地は戦国末期から近世にかけて急激に都市化が進み、現在はその大半が市街地となっていることも大きな要因となっていたと考えられる。そのようななかで徳瀬遺跡は昭和59年、畑地の耕作時に多量の弥生土器や土師器が採集され、昭和60年に日田市教育委員会が試掘調査を実施したところ、溝の一部が検出され、また竪穴住居跡の存在も想定された。遺物は弥生時代前期から中期(板付II式、城ノ越式、須玖式)の土器とともに立岩産の石庖丁などが出土した。そして、平成5・6・7年の市及び県教育委員会の発掘調査において、いままでその実態が不透明であった低地集落の一端が明らかになった。したがって、徳瀬遺跡におけるこれら一連の調査は、本地域の低地遺跡の動向を探る重要な調査であった。それでは、後世の削平等によって遺構の残存状態が悪く残念であるが、検出された遺構・遺物について整理をおこなう。

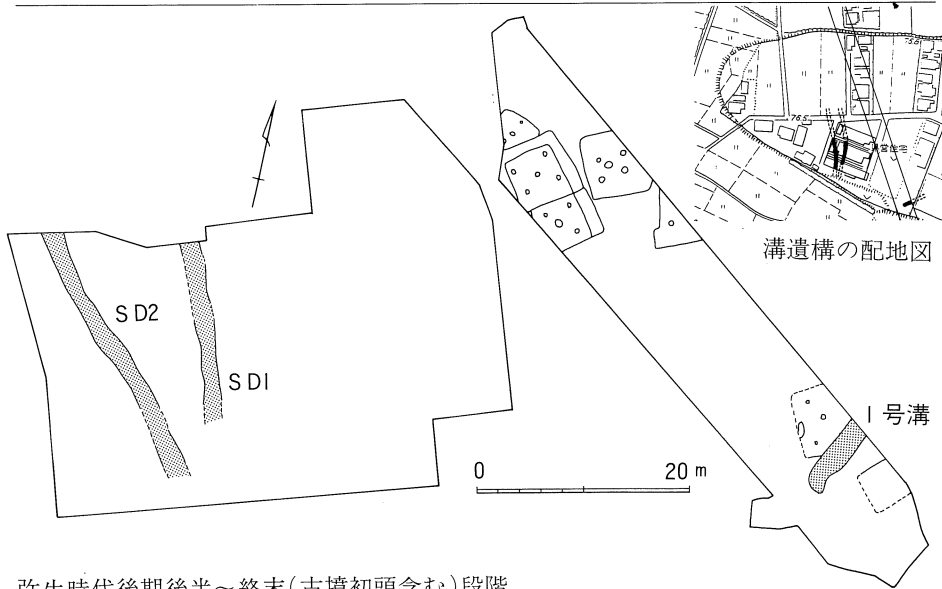
**前期・中期の遺構と遺物** 検出された遺構は、竪穴6基、土坑56基、溝2条である。竪穴のなかには、規模や形態、床面の特徴から竪穴住居跡と判断されたのが4・5・6号竪穴である。隅がやや丸い長方形プランに復原



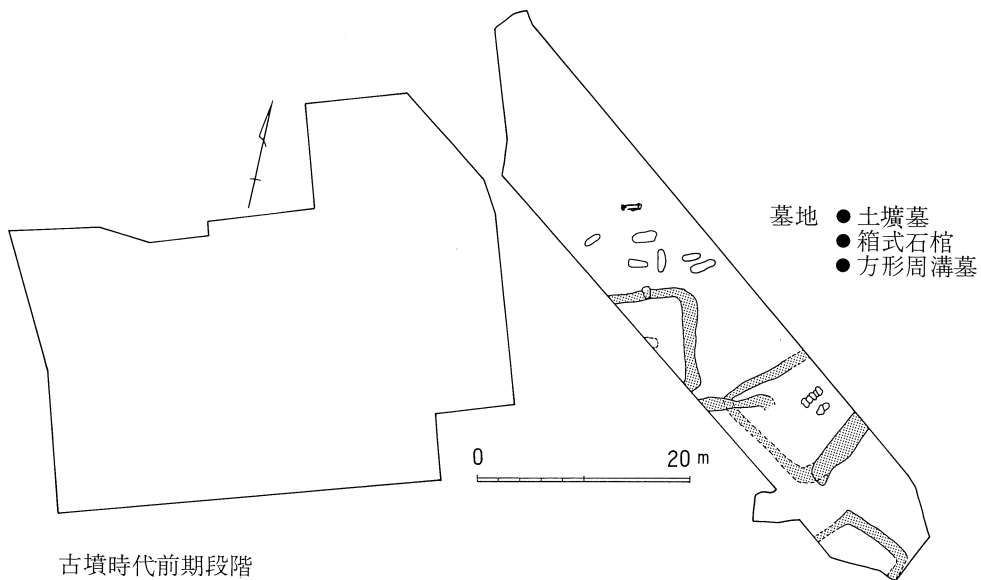
第98図 市教委調査区1号溝出土土器



弥玉時代前期～中期段階



弥生時代後期後半～終末(古墳初頭含む)段階



古墳時代前期段階

第99図 徳瀬遺跡遺構変遷図



されるもので、長径約4m、短径約2.7mほどの小型の住居跡である。5号では2本の主柱穴と床面に焼土が検出されたが、4号では検出できなかった。また、6号は一部発掘のため詳細は不明である。4・5号が重複関係にあり、重なる部分に貼床を施し4号の上に5号を築いている。遺物は4号に比較的まとまって出土し、5・6号は微量である。したがって、竪穴の時期については、重複関係からもっとも古い4号竪穴が前期末から中期初頭(板付Ⅱb・Ⅱc式～城ノ越式併行)ころと考えられるので、5号は中期初頭から前半と考えた。6号は難しいが出土した甕の底部からやはり中期初頭から前半と判断される。

これら竪穴住居跡以外の竪穴(1・2・3号)については、いずれも遺構の残りが悪いが、2.7～8mの隅丸の略方形のもので住居跡より小規模で、貯蔵用の竪穴と考えられる。時期は、1号は縄文晩期と思われる管玉しか出土してなく明確な所属時期は不明であるが、2・3号は出土遺物、遺構の切り合い(3と4号竪穴)から中期初頭から前半であろう。このような規模・形態を呈すものが、土坑番号をつけたなかにも散見できる。

土坑は、56基確認されたが、何らかの遺物が出土したのは35基の土坑である。土坑群の大半は、1～3号竪穴と同様にはじめは貯蔵用の穴として掘られたものと考えられるが、貯蔵状況を把握できる土坑はなく、廃棄穴の状況で確認された。平面プランは、隅丸方形、円形、長楕円、不定形の4タイプあり、数は円形・長楕円系統が多い。規模は1m未満(小型)、2m未満(中型)、3m未満(大型)の大きく3群に分類でき、方形プランに大型が多い。断面形はいわゆる袋状を呈するものではなく、壁が方形のみならず円形についても垂直に立ち上がっているが、深さが最も深いものでも50～60cmしかなく、多くが上半部を後世の削平によって失ったとみることも可能であろう。地山の土が砂質の強い土であることも壁崩壊の原因かもしれない。出土遺物の種類は少なく、土器は各種の器種が比較的多いと言えるが、小破片が大半である。外に石皿(27・39・40号土坑)、石錘(38号土坑)、磨石・敲石(1・40・43号土坑)などがある。

各土坑の時期は、覆土中の土器が多く、しかも土器は細片であるためその所属時期については不安定ではあるが、一応全体的傾向で次のような位置付けが可能と思われる。前期後半～末の土坑には、6・8・12・15・17・19・20・24・26・30・37・39・41・42・43・50・56号土坑、中期初頭から前半(城ノ越式併行)は2・4・25号土坑、中期後半から末(須玖Ⅱ式併行)は1・21号があるが、これらよりやや古相(須玖Ⅰ式併行か)に位置付けられるものに18・40号土坑があげられよう。

このように、土器相からみる位置付けは、3から4期に分類できるが、遺構数は、中期になると極端に減少すると言える。調査区内での土坑群の分布は、大きく3グループ(A～C)に分けられ、北側の一群(A)に竪穴住居跡が伴っている。目を転じて市教育委員会調査区の状況を見ると、中央部の円形住居跡周辺と北側の円形住居跡周辺の二箇所では群をなして分布をしており、住居跡に近接したところに形成されていることが特徴である。北の一群は県調査区北側の一群と同じ群と想定すると4つにグルーピング可能である。このような貯蔵穴の分布傾向は、集落から離れて独立する場合と集落内で住居跡群に取り付くように分布するケースが多いが、県内では前者は確認されていない。徳瀬遺跡についても集落内それも竪穴住居跡の周辺に形成される類型と考えられ、おそらくBやCグループにも竪穴住居跡が存在していた可能性が高く、これら数グループがまとまり一つの集団を構成したいたものと考えられる。遺物には、鑄造鉄斧片の再利用鉄器と考えられる小鉄片や石庖丁などが出土しており、県調査区で検出されていない遺物がある。このように、市・県調査区の広範囲にわたり、遺構が広がっており、低地においてもかなり安定した集落が成立していたことが考えられる。今後は、遺跡の規模や中期に減少する傾向が見られることが、微高地内か外への移動なのか、など検討する必要がある。

最後に、これら土坑群から出土した土器の特徴について見てみる。大分県における弥生時代前期の編年はいまだまとまっていない。良好な一括資料で、関係土器が豊富で、一つの地域で長期間存

続する好条件の遺跡が発見されていないことが大きな原因であるが、近年大分市の下志村遺跡<sup>(1)</sup>や下群遺跡群<sup>(2)</sup>などの低位段丘や低位砂丘の遺跡などによって、前期後半から末に成立する下城式甕成立以前の良好な資料が検出され、刻み目突帯文系の甕に板付Ⅱ a 式の壺（大分においてこの期の壺に国東町内田遺跡出土の土器がある）が伴っている。しかし、日田地方は、行政的には豊後であり、現在も大分県に属するが、豊後地域を代表する下城式甕は見られなく、むしろ筑後地方の土器文化と極めて緊密な関係にあると言える。すなわち、徳瀬遺跡で検出された前期土器には、板付Ⅰ式やⅡ a 式の特徴をもつ如意形口縁甕や壺はなく、板付Ⅱ b・c 式の甕（口縁部の型式変化では分けられるがここでは、Ⅱ b・c 式を一つに捉えている）・壺が出土している。これら筑前にルーツを持つ土器群とともに、口唇部に断面三角形の貼付突帯（刻み目をもつものもある）と口縁下の三角突帯（沈線など一部板付系甕との折衷形式のものも若干ある）をめぐらし、上げ底の分厚い底部をもつ、筑後の亀ノ甲式タイプの甕と組み合わせる様式を形成している。中期には新たに逆L字の跳ね上げ口縁の甕が加わり、城ノ越式系統の様式に変化し、そして量的には少ないが鋤先口縁に代表される須玖Ⅰ式・Ⅱ式と同様な土器構成となっている。

#### 後期以降の遺構と遺物

後期になると一時遺構の姿が見えなくなる。そして後期後半から終末の溝が2条出現するが、その外の遺構は検出されなかった。溝は第99図のようにおそらく東西にのびる微高地の西側先端部を南北に区画する条溝と考えられる。溝の規模は、SD1、SD2とも大きく変わらないが、SD1の断面がU字形を呈するのに対して、SD2は逆台形である点が異なる。時期は、とくにSD1出土の大半の土器は弥生前期から中期であり、数点後期終末の土器が含まれている状況であった。しかし、数点ではあったが終末の土器は溝底出土であり、小破片ではあるがこれによって後期終末と判断された。また、溝の中層から下層には大量の礫が投棄された状況で検出され、その礫とともに石棺材である安山岩質の板材も含まれており、埋没状況がSD2と大きく異なる。このU字形の溝は、市調査区の南側でも検出されているが、時期的には下層（第98図）から庄内新式から布留式最古式、上層から布留式の土器が出土しており、上層は方形周溝墓の墓域を画する溝として掘りなおされている。SD1にはこうした外来系の土器は検出されてない。また、SD2についても、西新式系の土器を中心とし、外来系の土器は確認されていない。そして、終末の土器とともに後半の土器（平底の甕）検出され、SD2は後期の後半から終末にかけて営まれたと考えられる。

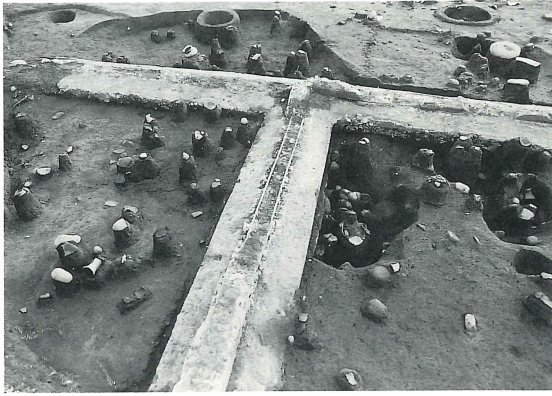
ところで、県調査区ではこの溝に伴う遺構は発見されてなく、市調査区で10基ほどの竪穴住居跡が確認されている。このことから溝はこれら住居群を区画する、いわゆる環濠集落的性格が考えられ、その規模は大きい。とくに市調査区検出の溝には開口部（陸橋部か）と想定される箇所があり注目される。県調査区の2条の南北溝はこれら集落の西域を画すと考えるのが最も自然であろう。とすれば、この2条の溝の廃絶時期は、布留式（布留Ⅰ式段階か）の方形周溝墓を中心とする墓地形成の直前と想定される。さらに言えば、SD2がやや先行し、その後SD1の掘削が行われる。つまり、SD1と市調査区下層の溝が対応すると思われる。県調査区で竪穴住居跡が検出されなかったことについては、ここに住居が営まれなかったとするよりは、後世の造成によって削平を受け消失したと考えたい。

日田地方においては、平成6年度に国指定に答申された小迫辻原遺跡で環濠集落と豪族居館(?)が検出されており、日田盆地北部地域の台地上に強力な拠点集落の成立があきらかとなった。このようなか、低地の沖積地においても溝で囲まれた大規模集落が確認されたことは、前方後円墳出現前夜における日田盆地の動向を探るうえで極めて重要で、新たな政治権力による地域的再編の幕開けをつげるものと考えられる。それは、この地区が集落から墓地へ変質していくことと無縁ではなからう。

(1) 県文化課高橋徹氏にご教示いただいた。

(2) 大分市教育委員会坪根伸也氏にご教示いただいた。

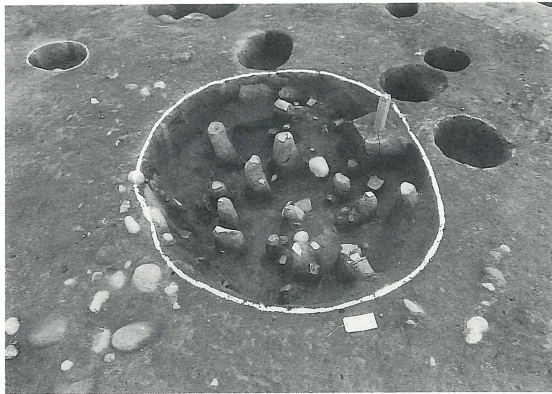
# 写 真 图 版



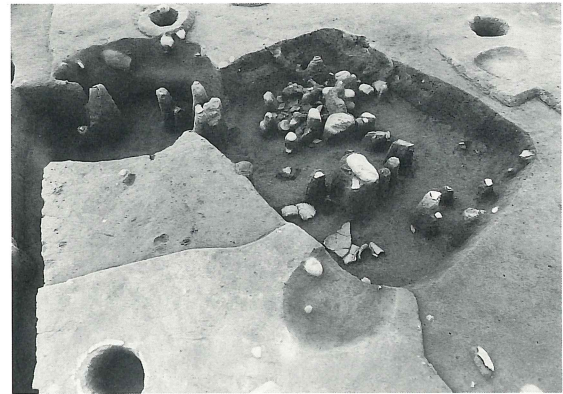
3~5号竖穴



6号竖穴



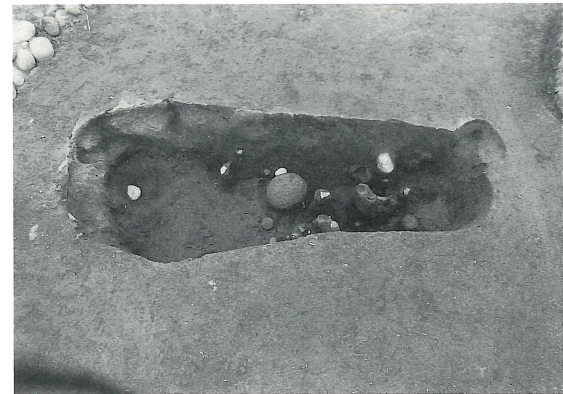
2号土坑



15、16号土坑



17号土坑



39号土坑



40号土坑



4号竖穴遺物出土狀況

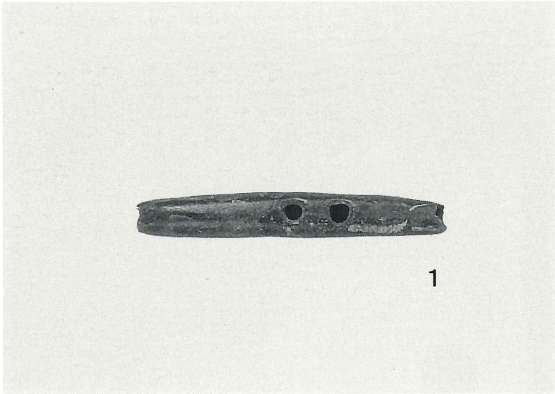




14号土坑遺物出土状况



19号土坑遺物出土状况



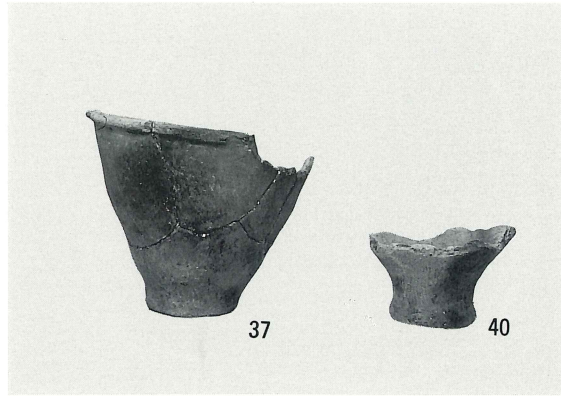
1号竖穴出土遺物(管玉)



4号竖穴出土遺物



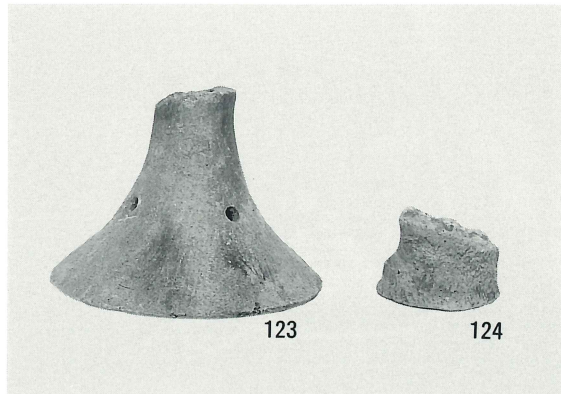
4号竖穴出土遺物



8号土坑出土遺物



19号土坑出土遺物

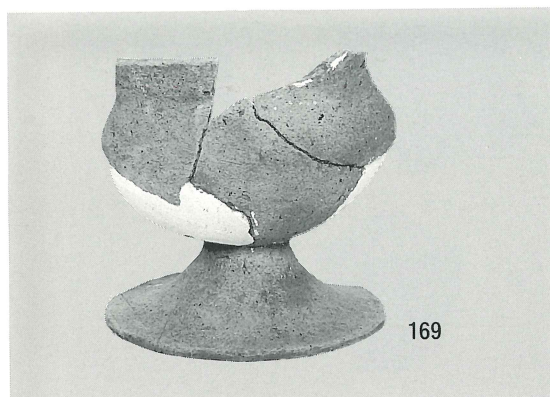


47号土坑出土遺物

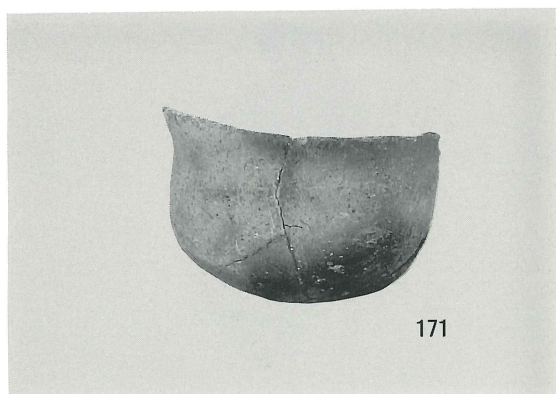




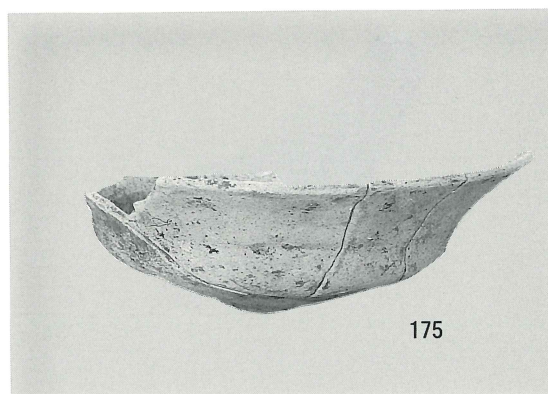
50号土坑出土遺物 (ミニチュア土器)



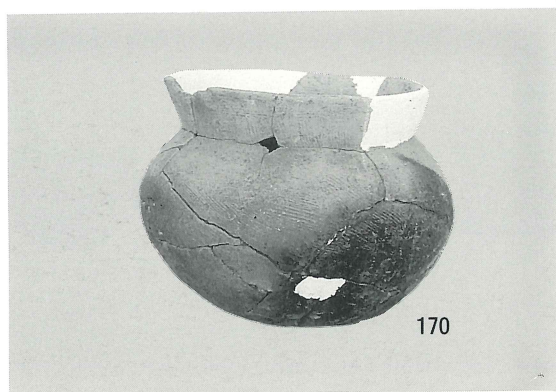
2号溝出土遺物



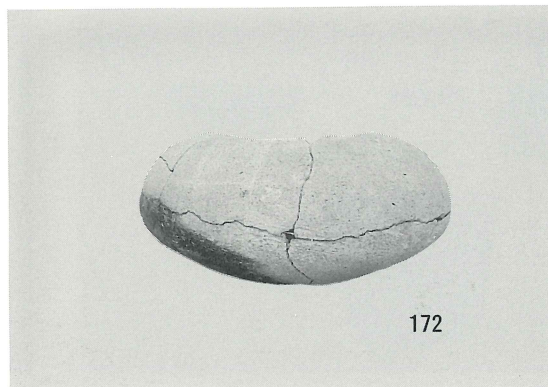
2号溝出土遺物



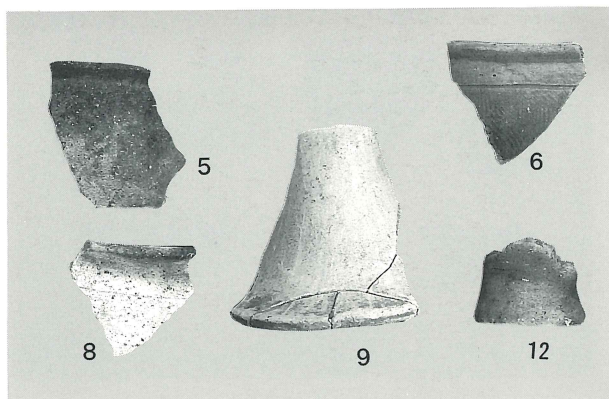
2号溝出土遺物



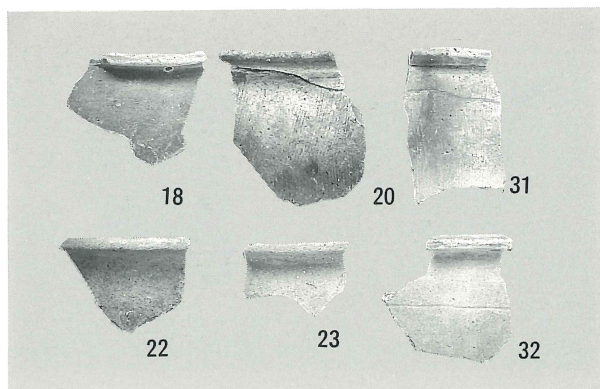
2号溝出土遺物



2号溝出土遺物

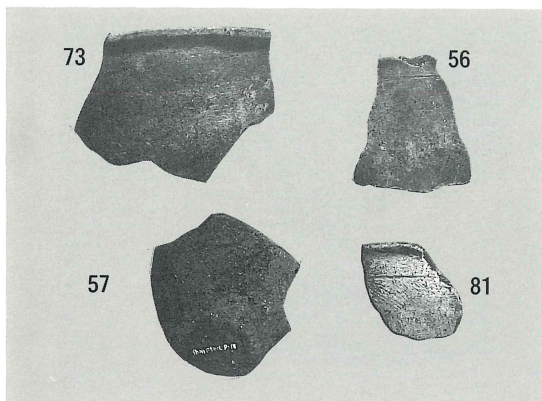


3~5号竪穴出土遺物

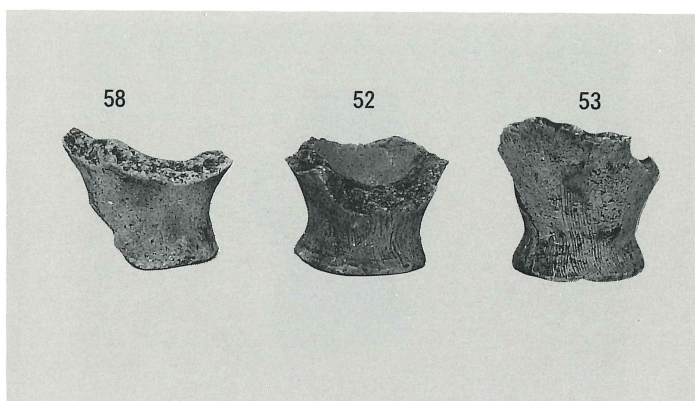


1. 2号土坑出土遺物





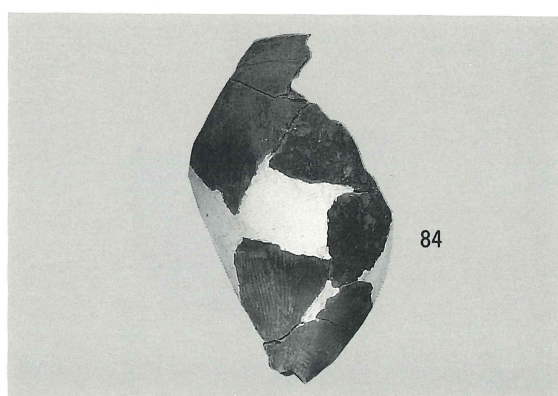
17.24.26号土坑出土遺物



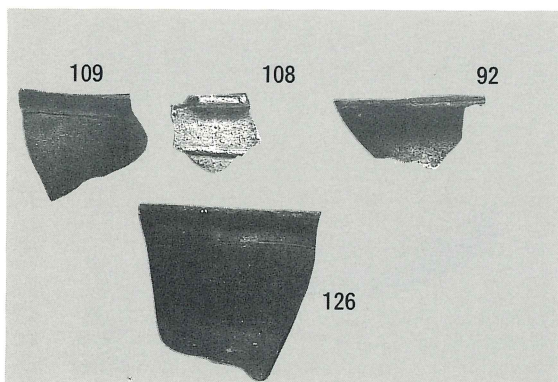
15.17号土坑出土遺物



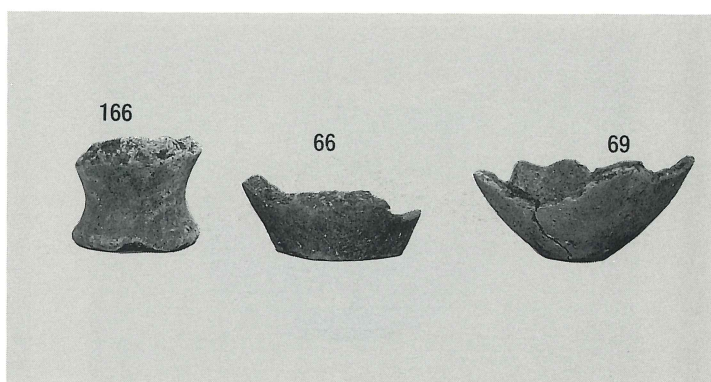
24号土坑出土遺物



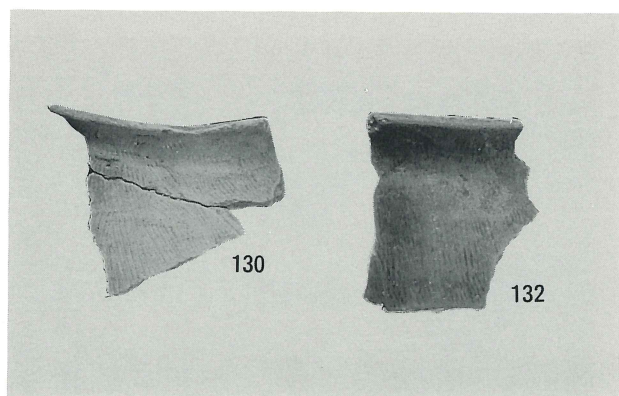
28号土坑出土遺物



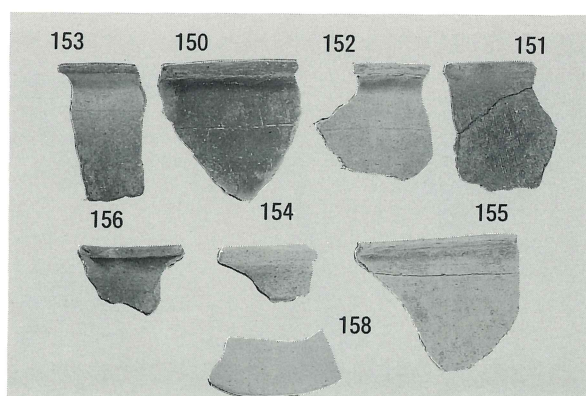
39.41.42.50号土坑出土遺物



19号土坑・2号溝出土遺物

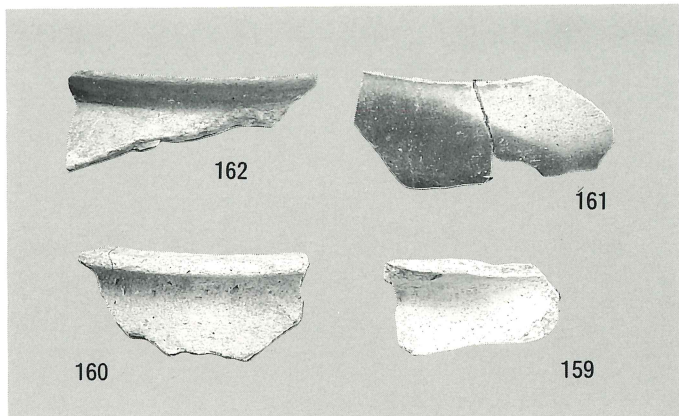


1号溝出土遺物

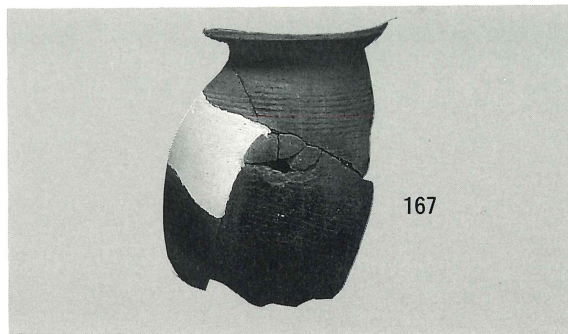


2号溝出土遺物

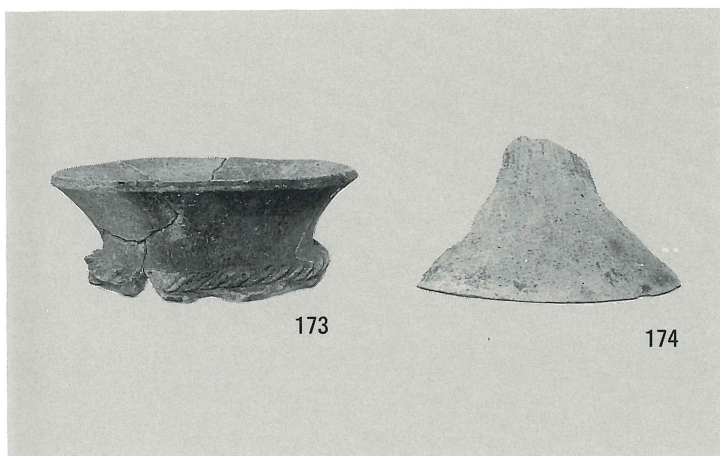




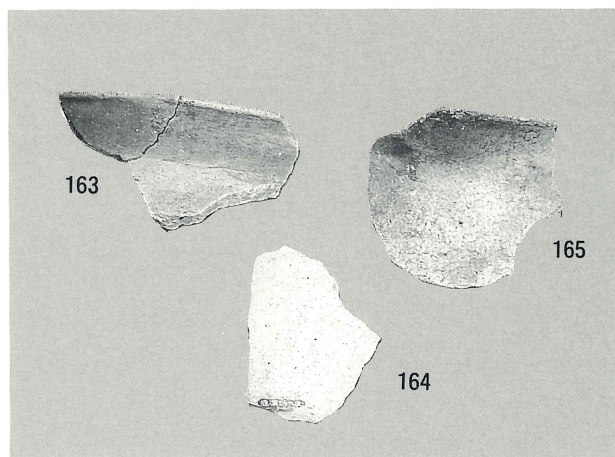
2号沟出土遺物



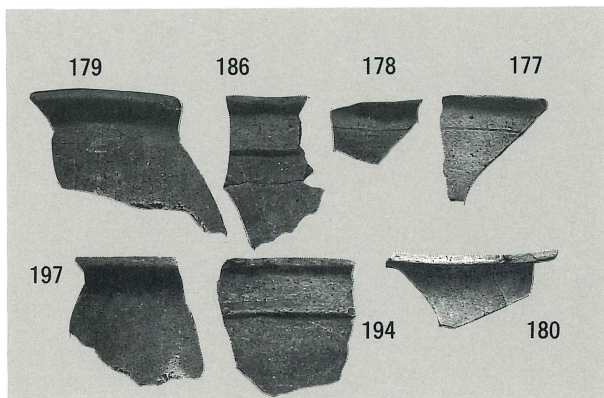
2号沟出土遺物



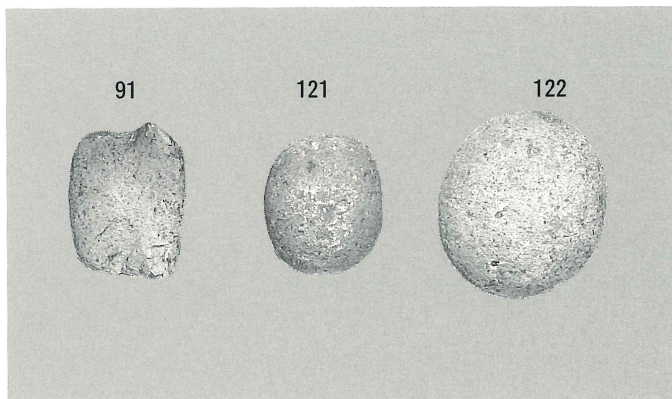
2号沟出土遺物



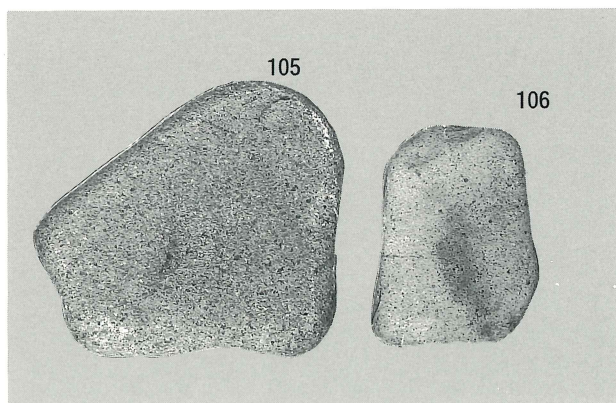
2号沟出土遺物



包含層出土遺物



38.43号土坑出土遺物  
(石錘・磨石)



40号土坑出土遺物  
(磨石)



## 報 告 書 抄 録

フリガナ	トクゼイセキ
書名	徳瀬遺跡
副書名	日田市県営住宅改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	—
シリーズ名	大分県文化財調査報告書
シリーズ番号	第94集
編著者名	稲村博文・玉永光洋
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870 大分県大分市府内町3-10-1
発行年月日	1996年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
トクゼイセキ 徳瀬遺跡	オオイタケンヒタシ 大分県日田市 オオアガトモタアザトクゼ 大字友田字徳瀬	651	101	33°21'00"	130°55'30"	19941001 ) 19950110	1,200m <sup>2</sup>	県営住宅改 修工事

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
徳瀬遺跡		弥生	土坑、溝状遺構	土器	

徳 瀬 遺 跡

日田市県営住宅改築工事に伴う

埋蔵文化財調査報告書

大分県文化財調査報告書第94集

1996年3月31日

発 行 大 分 県 教 育 委 員 会

印 刷 明 治 印 刷 株 式 会 社